

松本市文化財調査報告No.35

# 松本市島立南栗・北栗遺跡 高綱中学校遺跡、条里的遺構

——緊急発掘調査報告書——

1985・3

長野県中信土地改良事務所  
松本市教育委員会

### 正誤表

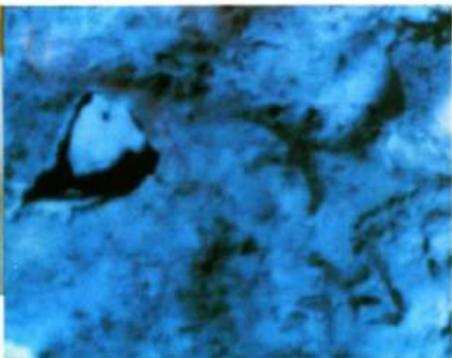
	<誤>	<正>
35頁	(圖)19住 VII	XIII
66頁	(圖)92住 VII	XIII
87頁	6行目 第57号住	第75号住
124頁	(27-b) 10cm	10m



南栗・北栗遺跡上空よりⅠ～Ⅳ地区



75住出土紙



同拡大(赤外線テレビ)

## 序

この遺跡は昭和58年度に着工しました県営は場整備事業島立地区にあり当初から、埋蔵文化財の存在が確認されている遺跡であります。昨年に引き続き本年度も区画整理工事の着手にあたり、県、市教育委員会の皆様と事前打合せにより、調査方法、調査時期、費用負担等について再三御検討をいただき発掘調査による記録保存の方針を決定しました。

調査の実施は松本市教育委員会より全面的に受託していただくことになりました。その結果、奈良、平安時代の大集落跡又陶磁器、古銭、鉄器など数多くの出土品が発掘されました。島立地区の歴史を探るうえで貴重な資料となることと思います。

このように発掘調査が計画どおり完了できますことは、県、市教育委員会の適切な御指導とお忙しい中、調査団に参画され、発掘にあられた皆様の御尽力のたまものと感謝しております。

なお、遺跡発掘にあたり6月より支障なく調査が出来ましたことは島立土地改良区の役員、地元関係者の御協力と御理解によるものと深く感謝申し上げます。

昭和60年3月

長野県中信土地改良事務所長 丸山仁志

## 序

島立南栗地区は以前から古い時代の遺物を出土するところとして知られておりました。昨年に続き本年も南栗遺跡周辺で県営ほ場整備が行なわれることになり、工事に先立って緊急発掘調査を実施し記録保存を行なうことになりました。この調査は中信土地改良事務所から市教育委員会に委託され地元の考古学研究者、市教委職員を中心に地区のみなさまの協力により実施されました。調査は南栗・北栗遺跡を6月初めから初秋の9月末まで行ない、更に、10月下旬から12月中旬まで高綱中学校遺跡、島立条里的遺構を発掘して多大な成果をおさめました。古墳時代から平安時代、中世までの住居址が数多く発見され、またこれらの住居址内から多数の土器、鉄器が出土しました。昨年の調査結果と合わせて見て奈良井川の段丘上には古代からかなり大きな集落が発達していたことがわかり貴重な遺跡だと思います。今後の地域の歴史解明にたいへん役にたつ資料になることでしょう。

今回の調査は記録保存を目的とする緊急発掘調査でしたが開発事業が多発している中で文化財のたいせつさと文化財保護の必要性を御理解いただければ幸いです。

最後にこの調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました島立土地改良区をはじめ、島立公民館、島立出張所のみなさま、地元のみなさまに心から感謝いたしまして序といたします。

昭和60年3月

松本市教育委員会

教育長 中島俊彦

## 例 言

- 1 本書は昭和59年6月1日より9月17日にかけて行なわれた、松本市島立、南栗、北栗遺跡、及び、10月22日より11月26日まで実施した、高綱中学校、島立条里的遺構の緊急発掘調査に関する報告書である。
- 2 本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。
- 3 本書の執筆は高桑俊雄が中心となつて行ない、その分担は下記の通りである。
  - 第1章 事務局
  - 第2章 太田守夫、神沢昌二郎、高桑俊雄
  - 第3章 第1節 高桑俊雄  
第2節 三村竜一、山田真一、山下泰永、神沢昌二郎、高桑俊雄  
第3節 山田真一、山下泰永、直井雅尚、高桑俊雄  
第4節 高桑俊雄
  - 第4章 山田真一、高桑俊雄
  - 第5章 神沢昌二郎、高桑俊雄
  - 第6章 神沢昌二郎
- 4 本書の編集は事務局が行ない、滝沢智恵子の助力を得た。
- 5 本書作成に関する作業の分担は次の通りである。

遺構図製図、トレース：伊那史彦、山田真一、山下泰永、面手勝仁、高桑俊雄、関沢聡  
遺物復元、実測：山田真一、山下泰永、滝沢智恵子、(土器)、三村竜一、高桑俊雄、(金属器、土製品、石器)

拓影：石合英子
- 6 航空写真は新日本航空の御好意により提供して頂いた。
- 7 条里的遺構については小穴喜一、小穴芳実氏に現地指導をいただいた。記して感謝申し上げる。
- 8 出土遺物及び図類は松本市教育委員会に保管してある。
- 9 各遺構・遺物の一覧表、観察表は各本文の後に掲載した。

# 目次

## 第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録	5
第2節 調査体制	5
第3節 作業日誌	6

## 第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置	11
第2節 地形と地質	11
第3節 周辺遺跡	21

## 第3章 南栗・北栗遺跡

第1節 調査の概要	23
第2節 遺構	23

### 1 住居址

① 第1・2・50号住居址	② 第3号住居址	③ 第4号住居址
④ 第5号住居址	⑤ 第6号住居址、土壇19	⑥ 第7・8・9号住居址
⑦ 第10・11号住居址	⑧ 第12号住居址	⑨ 第13・14号住居址
⑩ 第15・53・55号住居址	⑪ 第16・17号住居址	⑫ 第18・19・20・21号住居址
⑬ 第22・23・24・25号住居址	⑭ 第26・(27)・28号住居址	⑮ 第29号住居址
⑯ 第31・32号住居址	⑰ 第33・34号住居址	⑱ 第35・36号住居址
⑲ 第37・38号住居址	⑳ 第39・40号住居址	㉑ 第41・42・54号住居址
㉒ 第43・44号住居址	㉓ 第46・50号住居址	㉔ 第47・48号住居址、臨13
㉕ 第49・57号住居址	㉖ 第51・52号住居址	㉗ 第58・59号住居址
㉘ 第60・61号住居址	㉙ 第62・63号住居址	㉚ 第64・65号住居址
㉛ 第66・67号住居址	㉜ 第68・69号住居址	㉝ 第70・71・72号住居址
㉞ 第73・74号住居址	㉟ 第75号住居址	㊱ 第76・77号住居址
㊲ 第78・81・91号住居址	㊳ 第79・80号住居址	㊴ 第82・86号住居址
㊵ 第83・84・85・89号住居址	㊶ 第87・97号住居址	㊷ 第88・90号住居址
㊸ 第92・93・94号住居址	㊹ 第95・96号住居址	

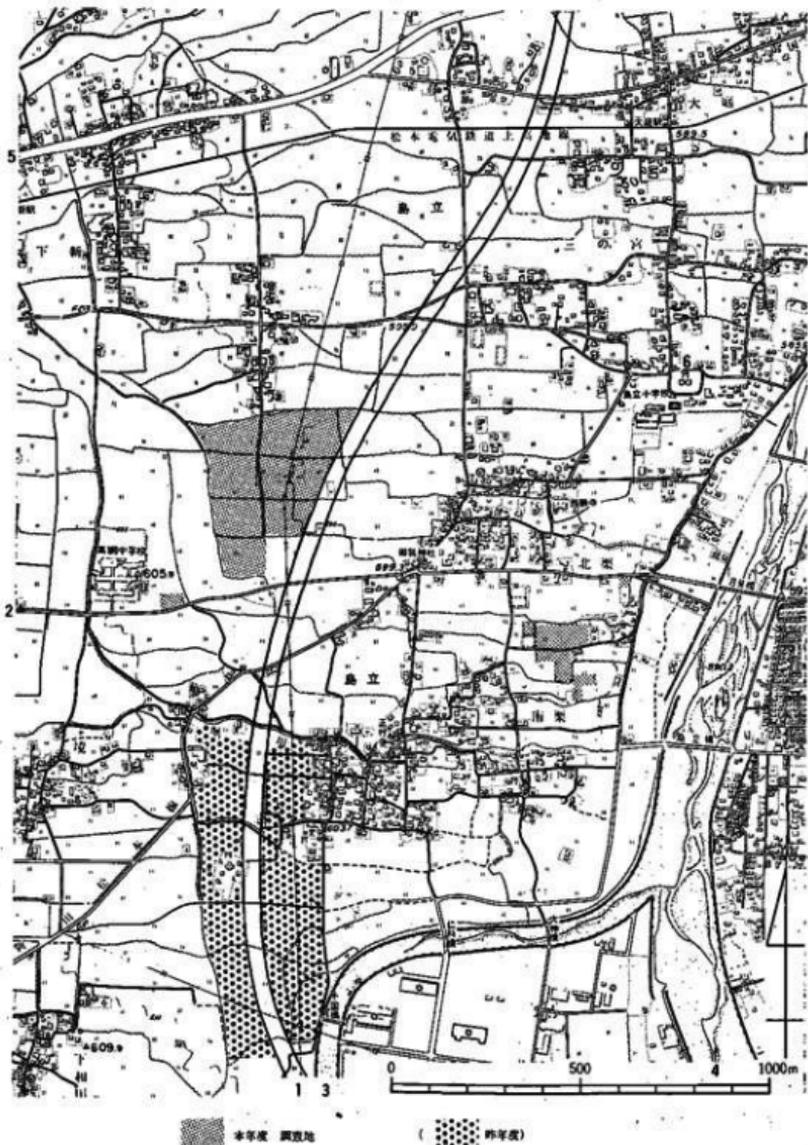
2 掘立柱建物址	68
3 竪穴状遺構・土壇	77
4 溝	80

第3節 遺物	
1 土器	86
2 銅製品、鉄器、銭	115
3 土製品、石器、石製品	119
第4節 小結	121
第4章 高綱中学校遺跡	
第1節 調査の概要	123
第2節 遺構と遺物	123
第3節 小結	125
第5章 島立条里的遺構	
第1節 調査の概要	129
第2節 遺構と遺物	131
第3節 小結	132
第6章 調査のまとめ	141

## 挿 図 目 次

第1図 調査地の位置	4	第17図 第22～25号住居址	36
第2図 トレンチ及び土層概略	19	第18図 第26～28号住居址	37
第3図 周辺遺跡	20	第19図 第29号住居址	38
北栗・南栗遺跡		第20図 第31・32号住居址	39
第4図 調査範囲	22	第21図 第33・34号住居址	40
第5図 第1・2・50号住居址	24	第22図 第35・36号住居址	41
第6図 第3号住居址	25	第23図 第37・38号住居址	42
第7図 第4号住居址	26	第24図 第39・40号住居址	43
第8図 第5号住居址	27	第25図 第41・42・54号住居址	44
第9図 第6号住居址、土壇9	28	第26図 第43・44号住居址	45
第10図 第7～9号住居址	29	第27図 第46・56号住居址	46
第11図 第10・11号住居址	30	第28図 第47・48号住居址、堅穴状遺構13	47
第12図 第12号住居址	31	第29図 第49・57号住居址	48
第13図 第13・14号住居址	32	第30図 第51・52号住居址	49
第14図 第15・53・55号住居址	33	第31図 第58・59号住居址	50
第15図 第16・17号住居址	34	第32図 第60・61号住居址	51
第16図 第18～21号住居址	35	第33図 第62・63号住居址	52

第34図	第64・65号住居址	53	第65図	土器実測図(7)	103
第35図	第66・67号住居址	54	第66図	土器実測図(8)	104
第36図	第68・69号住居址	55	第67図	土器実測図(9)	105
第37図	第70～72号住居址	56	第68図	土器実測図(10)	106
第38図	第73・74号住居址	57	第69図	土器実測図(11)	107
第39図	第75号住居址	58	第70図	土器実測図(12)	108
第40図	第76・77号住居址	59	第71図	土器実測図(13)	109
第41図	第78・81・91号住居址	60	第72図	土器実測図(14)	110
第42図	第79・80号住居址	61	第73図	土器実測図(15)	111
第43図	第82・86号住居址	62	第74図	土器実測図(16)	112
第44図	第83～85・89号住居址	63	第75図	土器実測図(17)	113
第45図	第87・97号住居址	64	第76図	土器実測図(18)	114
第46図	第88・90号住居址	65	第77図	銅製品・鉄器実測図	117
第47図	第92～94号住居址	66	第78図	銭拓影	118
第48図	第95・96号住居址	67	第79図	土製品、石器、石製品実測図	120
第49図	建物址1～3	72	<b>高網中学校遺跡</b>		
第50図	建物址4～6	73	第80図	遺構配置図	124
第51図	建物址7～10	74	第81図	竪穴状遺構、建物址出土土器	125
第52図	建物址11～13	75	第82図	建物址1・2	127
第53図	建物址14・15	76	第83図	建物址3・4	128
第54図	竪穴状遺構(1)	81	<b>桑里の遺構</b>		
第55図	竪穴状遺構(2)	82	第84図	島立発掘地区大字小字界図	129
第56図	竪穴状遺構(3)	83	第85図	調査地の位置・トレンチ設定	130
第57図	土壌・溝(1)	84	第86図	検出遺構	134
第58図	溝(2)	85	第87図	1・2トレンチ	135
第59図	土器実測図(1)	97	第88図	3トレンチ	136
第60図	土器実測図(2)	98	第89図	4・5トレンチ	137
第61図	土器実測図(3)	99	第90図	6・7トレンチ	138
第62図	土器実測図(4)	100	第91図	7トレンチ	139
第63図	土器実測図(5)	101	第92図	土器実測図	140
第64図	土器実測図(6)	102			



第1図 調査地の位置

# 第1章 調査経過

## 第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和58年8月12日 埋蔵文化財保護協議を現地にて実施。出席者は県教委文化課郷道指導主事・中信土地改良事務所花岡主事外4名、地元研究者大久保知巳、市教委神沢。
- 昭和59年1月17日 昭和59年度補助事業計画書提出。
- 1月17日 昭和59年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議実施。調査実施時期等について打合わせ。出席者、中土改花岡主事外3名、市教委神沢外4名。
- 4月25日 昭和59年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議実施。調査について細部の打合せ出席者、中土改花岡主事外3名、市教委神沢外4名。
- 4月25日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 4月25日 昭和59年度県営は場整備事業島立地区島立南栗・北栗、新村・島立朱里遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約を結ぶ。
- 5月1日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月21日 昭和59年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 5月31日 島立遺跡群埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 7月6日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月19日 昭和59年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 10月1日 昭和59年度県営は場整備事業に伴う島立南栗遺跡他発掘調査委託契約の変更。
- 昭和60年1月8日 島立南栗遺跡他埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 2月18日 島立南栗遺跡他埋蔵物の文化財認定通知。
- 2月19日 文化財保護事業執行状況調査。調査者は県教委文化課太田喜幸指導主事。

## 第2節 調査体制

団長：中島俊彦（教育長） 担当者：神沢昌二郎

調査員：太田守夫、西沢寿晃、三村壺、森義直、横田作重、吉田浩明

調査員補助：岩浪隆時、岡田健男、面手勝仁、川島恵理子、瀬川長広、滝沢智恵子、三沢元太

郎、三村竜一、山下泰永、山田真一、吉沢西己

事務局：平林竹夫、神沢昌二郎、百瀬清、熊谷康治、直井雅尚、高桑俊雄

協力者：赤羽和子、赤羽包子、池田祥子、井口喜六、市川今朝男、伊那史彦、伊藤清子、乾靖子、入山敦子、入山敦、石合英子、井口千佳、大出六郎、小沢ふじ子、大久保棟子、小澤文子、小沢れい子、大久保安子、乙黒昭七、小口妙子、上條喜子、上條茂子、上條豊子、上條良枝、上嶋明美、開橋八重子、鎌倉洋子、金琴順、北野友子、北野よ志子、桑井まさ、桑井益子、桑井しげの、久保田敏治、小林清志、坂下しげる、佐藤一郎、清水すみ子、神保宏絵、柴田尚子、鈴木なつ江、鈴木ますみ、関原ゆみ子、高津なお美、竹下貞雄、滝沢弘子、高宮五十鈴、忠地美智子、高野昌英、鶴川登、塚田智喜み、床尾てるみ、中島新嗣、内藤達雄、中島治香、永田加津美、中村清勝、中島要、直井スガ子、西片美香子、服部千子郎、原幸子、平田美恵子、藤森久子、藤森政子、藤田敦子、藤森寿々子、藤森登志子、藤松栄一、穂刈松子、堀内いくみ、須澤二郎、松山菊江、前田清彦、宮沢法子、三原岳志、百瀬綾子、百瀬源作、百瀬綾代、百瀬武美、山田タカ子、山田美恵子、吉沢俊子、横井美和子、横内かつゑ、吉江和美、吉江章二、吉沢紀洋子、

### 第3節 作業日誌

南栗・北栗道路

昭和59年6月1日(金) 晴 発掘資材の運搬とテントの設置。

昨日の雨の爲の搬出できず重機入れられず。P.M.3:00ブルーザー到着。作業員：三沢元太郎他2名 市教委：高桑、熊谷

6月2日(土) 晴 プレハブ到着し組立てる。2ヶ所試掘、西50cm下黄褐色土、東70cm下砂層及び礫層。作業員：三沢他2名 市教委：高桑、熊谷

6月4日(月) 晴 重機による表土剥ぎ。住居址2軒検出。資材の整理・点検・修理。作業員：三沢他8名 事務兼原作業員(以下事務とする)：池田祥子 市教委：高桑、熊谷

6月5日(火) 晴 重機による表土剥ぎ。1地区3住検出。これ以上深く重機を入れる。4、5住検出。南栗公民館長、島立出張所長見学。作業員：三沢他9名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月6日(水) 晴 1地区6住以東及び西側検出作業。6～17住を検出。南側溝1を検出。礫を多量に含む。作業員：三沢他13名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月7日(木) 曇 風強し。1地区中央北部の検出作業続行。作業員：三沢他13名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷、神沢

6月8日(金) 曇 1地区中央検出作業継続。作業員：原川長広他8名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月9日(土) 晴 重機1地区へ入る。1地区南東部検出作業。作業員：三沢他9名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月11日(月) 曇 1地区東部検出作業継続。1地区検出作

業開始。重機本日にて終了。作業員：原川他19名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月12日(火) 晴 本日より遺構を掘り始める。1地区1、2、3、4、5住掘り下げる。溝1、2にトレンチを入れる。基準点設定始める。作業員：原川他27名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月13日(水) 小雨のち曇 1地区1～5住掘り下げる。調査員：三村徹 作業員：原川他28名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月14日(木) 晴 1地区6住掘り下げる。1～5住掘り下げ。2住より鋼製砂留出土。調査員：三村 作業員：原川他30名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月15日(金) 晴 1地区7住掘り下げ。1～6住掘り下げ。2住にピット掘る。50住検出困難なため、1住との切合部分のみで調査を止める。作業員：原川他29名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月16日(土) 晴 1地区1～7住掘り下げ。1、3住土層図作成。1、2住平面図作成。作業員：三沢他26名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月18日(月) 晴 1地区3住柱穴掘り下げる。4住掘り下げる。遺物多し。50住平面図作成。5、7住土層図作成。6住掘り下げる。溝3の一部を掘る。作業員：三沢他26名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月19日(火) 晴 1地区平面図作成、写真撮影。4～7住

掘り下げる。8～11住掘り下げ開始。作業員：原川他27名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月20日(水) 曇 I地区12住掘り下げ。4～7住掘り下げ継続。5、7住平面図作成。作業員：原川他24名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月21日(木) 曇 I地区13、18、19住掘り下げ開始。6、10住土層断面図作成。11、12住掘り下げ継続。5住穴掘り下げる。作業員：三沢他25名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月22日(金) 小雨のち曇 I地区14、16、24、25、31住掘り下げ開始。11、12、13住掘り下げ継続。8住土層図作成。作業員：中島治善他23名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月23日(土) 雨 雨の為発掘中止。図面整理。市教委：高桑、熊谷

6月25日(月) 雨 雨の為発掘中止。図面整理。市教委：高桑、熊谷

6月26日(火) 雨 雨の為発掘中止。図面整理。松本市教育長、次長、課長、係長視察。作業員：伊勢史彦 市教委：高桑、熊谷

6月27日(水) 小雨のち晴 I地区28、29住掘り下げ開始。24、25、31住掘り下げ継続。4、5住写真撮影。作業員：三沢他20名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月28日(木) 晴 I地区21、40、52住掘り下げ開始。29住掘り下げる。13、16、18、19住土層図作成。6、10住平面図作成。1、3、7、50住写真撮影。I地区東半分再検出。作業員：三沢他40名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月29日(金) 曇 I地区23、32、33窟穴1の掘り下げ開始。29、40、52住掘り下げ継続。4、14、24、25、28、31住土層図作成。溝3、6を検出。作業員：三沢他40名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

6月30日(土) 晴 I地区15住掘り下げ開始。9、12、21、23住土層図作成。18、19住平面図作成。作業員：三沢他33名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

7月2日(月) 晴 I地区26、34、46住、窟穴2、3掘り下げ開始。32住掘り下げ継続。15住中に53住を検出し掘り下げる。29住土層図作成。12、24、25、26住平面図作成。作業員：三沢他40名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

7月3日(火) 晴 I地区39、46住掘り下げ開始。15、33、34、53住掘り下げ継続。4、8、9住平面図作成。32、39、40住土層図作成。作業員：三沢他34名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷、関沢

7月4日(水) 晴 I地区35～38住掘り下げ開始。15、34、46住掘り下げ継続。窟穴7～10掘り下げる。作業員：三沢他39名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷、関沢

7月5日(木) 晴のち雨 I地区22住掘り下げ開始。33、35、36、46住掘り下げ継続。窟穴5、6、11掘り下げ開始。11、37住建物土層図作成。14住、窟穴8平面図作成。雨の為発掘中止。作業員：三沢他30名 事務：池田 市教委：高桑、熊谷

7月6日(金) 雨 雨の為発掘中止。図面整理 市教委：高桑

7月7日(土) 晴夕立ち I地区41、42住掘り下げ開始。7、11、22、33、35、36住、窟穴6の掘り下げ継続。38住土層図作成。作業員：三沢他29名 事務：池田他1名 市教委：高桑

7月9日(月) 曇のち晴 I地区建物土1、2再検出・半掘。建物土3、4再検出。7、11、41、42住掘り下げ継続。溝5にトレンチ本入れる。35、46住土層図作成。II地区再検出。作業員：三沢他37名 事務：池田他1名 市教委：高桑

7月10日(火) 晴 I地区建物土3、4、6、7の再検出。半掘。42住掘り下げ継続。33住土層図作成。作業員：三沢他31名 事務：池田他1名 市教委：高桑

7月11日(水) 曇 I地区43、44、51住掘り下げ開始。15、53住土層図作成。作業員：三沢他36名 事務：池田他1名 市教委：高桑

7月12日(木) 晴 I地区43、44住掘り下げ継続。55住検出・掘り下げ。26、36、41、42、51、52、54住土層図作成。作業員：三沢他32名 事務：池田他1名 市教委：高桑

7月13日(金) 曇 I地区17住掘り下げ開始。44、51、52住掘り下げ継続。17、21、26、32、41、42、51、52、54住の断面撮影。17、34、55住土層図作成。15、53、55住平面図作成。島立小学校6年生・高岡中学2年生クラブ見学。作業員：三沢他36名 事務：池田他1名 市教委：高桑

7月14日(土) 曇 I地区ビット、土壌検出。作業員：三沢他35名 事務：池田他1名 市教委：高桑

7月16日(月) 晴 I地区ビット半掘。作業員：三沢他38名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月17日(火) 曇 I地区ビット半掘作業継続。上越農市園見学 作業員：三沢他29名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月18日(水) 雨 雨の為発掘中止。テントにて図整理・土層図作成。午後建物土4の土層図作成。真教委依頼の電気探査見物にて始まる。作業員：三村竜一他1名 市教委：高桑

7月19日(金) 晴 I地区46住掘り下げ継続。建物土5、7、8土層図作成。I地区ビット土層図略図作成。II地区57住検出・掘り下げ。作業員：三沢他32名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月20日(土) 晴のち雨 昨夜の雨の為午前中発掘中止。午後2時頃より雨の為土層図洗い。I地区ビット土層図略図作成。56住土層図作成。作業員：三沢他31名 事務：池田他1名 市教委：高桑

7月21日(土) 曇のち雨 午後雨の為発掘中止。I地区ビット土層図略図作成・掘り下げ。窟穴4を半掘・土層図作成。図・遺物の整理。作業員：中島新樹他34名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月23日(月) 晴 21、22日の雨の為溝内の水の汲み出し。II地区再検出。III地区へ重機を入れる。58～63住検出。IV地区重機

にて表土削ぎ。作業員：三沢他35名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月24日(火) 晴 I地区道溝内流入土除去作業。28、29住平面図作成。平板測量順次行方。II地区47-49、57住。墓穴13-16掘り下げ開始。島立小学校教諭15名見学。作業員：三沢他34名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月25日(水) 晴 I地区平板測量。17、31、51、52住平面図作成。II地区道溝掘り下げ。III地区58-63住掘り下げ開始。IV地区重機にて表土削ぎ。夕立あり。作業員：三沢他35名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月26日(木) 曇 I地区11、16、56住。墓穴10平面図作成。II地区道溝掘り下げ継続。土層図作成。III地区58-63住掘り下げ継続。IV地区重機にて表土削ぎ。夕立あり。作業員：三沢他30名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月27日(金) 晴 I地区13住・墓穴1平面図作成。II地区道溝の土層図作成。III地区58-63住掘り下げ継続。V地区重機及び人力による供出。作業員：三沢他35名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月28日(土) 晴 I地区20、21住平面図作成。II地区道溝の土層図作成。V地区墓穴29より掘り下げ開始。VI地区重機にて表土削ぎ。作業員：三沢他40名 事務：池田他2名 市教委：高桑

7月30日(月) 晴 I地区32住・建物址10・墓穴2平面図作成。II地区土層図作成・写真撮影。III地区土層図作成。V地区道溝掘り下げ継続。VI地区供出作業。基準軌の遺状高度を出す。作業員：横川他35名 事務：池田他2名 市教委：高桑、神沢

7月31日(火) 晴 I地区34、35住・墓穴6平面図作成。III地区土層図作成。V地区道溝掘り下げ継続。作業員：三沢他41名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月1日(水) 晴夕立 I地区ビッド掘り下げ・36-38住平面図作成。III地区土層図作成。IV地区重機にて削平。VI地区92-96住掘り下げ開始。土層洗い。作業員：三沢他34名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月2日(木) 晴のち曇 III地区土層図作成。IV地区供出作業。VI地区92-95住掘り下げ継続。作業員：三沢他34名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月3日(金) 晴曇 I地区22、23、39、43住。墓穴5平面図作成。III地区写真撮影。IV地区64、68、69、71、73住。墓穴17掘り下げ開始。V地区墓穴の土層図作成。博物館学芸員現場に来る。作業員：三沢他39名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月4日(土) 晴 I地区建物址9土層図作成。III地区各住居址内精査。IV地区65、67住掘り下げ開始。64、69、73住。墓穴17掘り下げ継続。VI地区掘り上げ。作業員：三沢他39名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月6日(月) 晴 III地区写真撮影供出物取り上げ。IV地区72、78住掘り下げ開始。64、65、67、69、73住掘り下げ継続。作業員：三沢他35名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月7日(火) 晴 I地区40住平面図作成。IV地区76、77住掘り下げ開始。72、73、78住掘り下げ継続。V地区供打ち。墓穴18、19平面図作成。作業員：三沢他35名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月8日(水) 晴 I地区33、41、42、46、54住平面図作成。II地区平面図作成。IV地区70、81、82住掘り下げ開始。64、65、72、76、78住掘り下げ継続。69、71住。墓穴17土層図作成。作業員：三沢他36名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月9日(木) 晴 I地区写真撮影。II地区平面図作成。IV地区66、74、75、79、80住掘り下げ開始。81住掘り下げ継続。65、67住土層図作成。V地区土層図作成。墓穴24、25、26、27平面図作成。作業員：三沢他36名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月10日(金) 晴 I地区墓穴11、12平面図作成。住居址カード精査及び写真撮影 作業員：中島他31名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月11日(土) 晴 I地区カード精査・写真撮影。4、44住再度掘り下げ。II地区遺物取上げ供出精査。作業員：中島他32名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月17日(金) 晴 I地区建物址4平面図作成。II、III地区全体図作成。IV地区84住掘り下げ開始。75、79、80住掘り下げ継続。作業員：三沢他34名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月18日(土) 晴 I地区全体図・建物址2、3、7、8平面図作成。IV地区75、77、79、80、84住掘り下げ継続。70、72住土層図作成。作業員：中島他25名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月20日(月) 晴 I地区全体図・建物址1、5、6平面図作成。IV地区87住掘り下げ開始。79、80、82、84住掘り下げ継続。作業員：三沢他26名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月21日(火) 晴 I地区全体図作成。IV地区ビッド掘り下げ開始。風強く午後作業中止。電気探査結果検討会(於あがの森文化会館) 作業員：三沢他31名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月22日(水) 曇 発掘中止。I地区全体図作成。土層洗い。風強し。作業員：三沢他4名 市教委：高桑

8月23日(木) 晴 I地区建物址9、11平面図作成。IV地区ビッド掘り下げ継続。64、65住平面図作成。作業員：三沢他26名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月24日(金) 曇 I地区20住掘り下げ開始。4住ビッド掘り下げ・カード精査。44住掘り下げ継続。跡1トレンチ掘り下げ開始。II地区南北トレンチ・V地区東西トレンチ土層図作成。萩原健氏見学。作業員：三沢他28名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月25日(土) 晴 IV地区76、77、81、84住土層図作成。V地区敷水後再検出・ビッド掘り下げ開始。東西トレンチ土層図作成。作業員：三沢他26名 事務：池田他2名 市教委：高桑

8月26日(日) 晴 I地区全体測量。II地区南北・V地区東西トレンチ土層図作成。公民館主催遺跡見学会有り。作業員：山

田真一他4名 市教委：高桑、神沢  
8月27日(月) 雨 雨の為発掘中止。土器洗い及び接合。作業員：山田他5名 市教委：高桑  
8月28日(火) 晴 I・II地区溝の検出。IV地区64、66、82、87住土層図作成。V地区97住掘り下げ開始。作業員：三沢他28名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
8月29日(水) 晴 I地区44住土層図作成。II地区溝にトレンチ入れる。IV地区88住掘り下げ開始。79、80住土層図作成。V地区ビット掘り下げ開始。作業員：三沢他32名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
8月30日(木) 晴 I、II地区住居址切合部分のベルトをはずす。IV地区86住土層図作成。68、70、71、77、78住平面図作成。V地区97住土層図作成。作業員：三沢他29名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
8月31日(金) 晴 I地区44住、墓穴3平面図・建物址6土層図作成後写真撮影。IV地区建物址12、13掘り上げ・写真撮影。IV地区88住掘り下げ開始。V地区墓穴掘り下げ継続。作業員：三沢他32名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
9月1日(土) 晴 IV地区89住掘り下げ開始。88住掘り下げ継続。各住居カマド部調査。79、87住カマド・土層図作成。V地区全体写真撮影。墓穴29平面図作成。VI地区全体写真撮影。南東部深く土層観察。作業員：三沢他11名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
9月2日(日) 晴 土器洗い・接合 作業員：岩渕陸時他2名 市教委：高桑  
9月3日(月) 晴 IV地区住居址掘り下げ継続。73住土層図作成。79、80、81平面図作成。V地区建物址、墓穴掘り下げ継続。墓穴32、33平面図作成。風強し。作業員：中島他9名 事務：大久保安子 市教委：高桑  
9月4日(火) 晴 IV地区住居址掘り下げ継続。86住平面図作成。V地区建物址・墓穴掘り下げ継続。墓穴30、31、34、35、36平面図作成。東西西北側土層図作成。風強し。作業員：三沢他14名 市教委：高桑、関沢  
9月5日(水) 曇 IV・V地区全体測量。IV地区ビット観察。V地区墓穴20、21、22、23平面図作成。作業員：三沢他11名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
9月6日(木) 晴 IV地区82、83、84住平面図作成。全体測量。V地区建物址、墓穴平面図作成。97住平面図作成。作業員：三沢他10名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
9月7日(金) 曇 V地区墓穴平面図作成。VI地区遺構・土層図作成。溝平面図作成。作業員：三沢他9名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
9月8日(土) 曇 IV地区87、88住カマド測量。85住掘り上げ。V、VI地区ビット調査。作業員：三沢他7名 事務：池田他2名 市教委：高桑、関沢  
9月9日(日) 曇 土器洗い及び接合。作業員：岩渕陸時他1名 市教委：高桑

9月10日(月) 曇 IV地区75、89住掘り下げ。住居址カマド部測量。82住カマド土層図作成。85住平面図作成。V地区墓穴37平面図作成。作業員：三沢他6名 事務：池田他2名 市教委：高桑  
9月11日(火) 晴 IV地区75住切合部を灰函運搬り下げ。73、74、75、76住平面図作成。78住カマド土層図作成。VI地区写真撮影。作業員：三沢他5名 事務：池田他3名 市教委：高桑  
9月12日(水) 晴 テント・資材回収。遺物運搬。作業員：三沢他3名 市教委：高桑  
9月13日(木) 晴 IV地区75、77、80、81住カマド残部測量。75住ビット土層図作成。市教委：高桑、関谷  
9月14日(金) 小雨 VI地区カマド残部測量。92～94住遺物取上げ。市教委：高桑、関谷  
9月17日(日) 遺物・測量用具運送。すべて終了。市教委：高桑、関谷  
高岡中学校遷移・新村島立条道の通稱  
昭和59年10月22日(月) 晴 高岡中学校跡地重機にて表土剥ぎ。(以下高岡とする。) 市教委：直井、高桑  
10月23日(火) 晴 高岡重機にて表土剥ぎ。市教委：直井、高桑  
10月24日(水) 晴 高岡重機にて表土剥ぎ。ビットを認める。市教委：高桑  
10月25日(木) 晴 高岡重機にて表土剥ぎ。遺構検出作業。作業員：三沢元太郎他3名 市教委：高桑  
10月26日(金) 晴 高岡建物址1掘り下げ開始。作業員：中島新樹他12名 市教委：高桑  
10月27日(土) 晴 高岡建物址2掘り下げ開始。作業員：中島他18名 市教委：高桑  
10月29日(月) 小雨 高岡建物址3掘り下げ開始。雨のため発掘は午前中。作業員：中島他13名 市教委：高桑  
10月30日(火) 曇 高岡午後より測量調査のトレンチ検引。にわか雨あり。作業員：中島他2名 市教委：高桑  
10月31日(水) 晴 高岡建物址1、2の土層図作成。新村・島立条道の通称(以下条里とする)1トレンチ東部から重機を入れはじめる。(プルトーザー・バッファローの2台で11月7日迄作業をする事となる。) 作業員：三沢他5名 市教委：高桑  
11月1日(木) 曇 高岡建物址1、2掘り上げ。写真撮影。建物址3、4土層図作成。条里6、7トレンチ北部に重機入る。昨夜未明乗用車がコンテナハウスに突込み。ハウス・車大破。作業員：中島他20名 市教委：高桑  
11月2日(金) 雨 条里6トレンチ南部・3トレンチ東部に重機入る。作業員：堀内いくみ 市教委：高桑  
11月5日(月) 晴 高岡建物址3、4掘り下げ継続。条里2トレンチ東部、7トレンチ南側に重機入る。午後改良区・業者と三者会談。コンテナハウス再設置。作業員：中島他15名 市教委：高桑

11月6日(火) 晴 高綱建物址3、4掘り下げ撤去。桑里1、2トレンチ西部、5トレンチ北部に重機入る。作業員：中島他19名 市教委：高桑

11月7日(水) 晴 高綱建物址4平面図作成。桑里3トレンチ西部・4、5トレンチ南部に重機入る。1トレンチより土層図作成。作業員：中島他16名 市教委：高桑

11月8日(木) 晴 高綱建物址2、3平面図作成。桑里1トレンチ土層図作成。作業員：中島他9名 市教委：高桑

11月9日(金) 晴 高綱建物址1、堅穴状遺構1の平面図作成。桑里7トレンチ土層図作成。作業員：中島他12名 事務整理作業員：直井スガ子(以下事務とする) 市教委：高桑

11月10日(土) 晴 高綱全体図作成。一定終了となる。桑里6、7トレンチ土層図作成。本日で調査要員を除き、一般作業員は作業終了とする。調査員：太田守夫 作業員：中島他13名 市教委：高桑

11月12日(月) 曇 桑里2、6トレンチ土層図作成。調査員：森崎直 作業員：石合英子他6名 事務：直井 市教委：高桑

11月13日(火) 晴 桑里2、3、6トレンチ土層図作成。作業員：石合他6名 事務：直井 市教委：高桑

11月14日(水) 晴 桑里1、5トレンチ土層図作成。作業員：石合他8名 事務：直井 市教委：高桑

11月15日(木) 雨 桑里用の為10時で現場作業中止。小穴芳実、小穴第一氏見学。作業員：石合他5名 事務：直井 市

教委：高桑

11月16日(金) 晴 桑里2、5トレンチ土層図作成。本日から1トレンチ東部よりブレードザーで埋め戻し開始(業者)小穴芳実氏見学。作業員：石合他5名 事務：直井 市教委：高桑

11月17日(土) 晴 桑里3、4、5トレンチ土層図作成。トレンチ内の遺物取上げ作業開始。作業員：石合他5名 市教委：高桑

11月19日(月) 曇 桑里4、5トレンチ土層図作成。6トレンチ内遺物取上げ作業継続。作業員：石合他4名 事務：直井 市教委：直井、船谷、高桑

11月20日(火) 雨 雨の為現場作業中止。事務：直井 市教委：高桑

11月21日(水) 曇のみ晴 桑里写真撮影、トレンチ内遺物取上げ。作業員：石合他3名 市教委：高桑

11月22日(木) 晴 桑里1、2トレンチ内遺物取上げ。作業員：石合他3名 市教委：高桑

11月24日(土) 曇時々雨 桑里4トレンチ内遺物取上げ。作業員：石合他3名 市教委：高桑

11月26日(月) 遺物・図・用具等整理。現場撤去・運搬作業本日にて終了。市教委：高桑

11月27日以降 報告書作成に向けて次の作業を順次行なっている。遺物洗浄、注記、復元、整理、拓影、実測、トレース、図版整理、原稿執筆、校正等。



南栗・北栗遺跡 I地区発掘風景



南栗・北栗遺跡 III地区発掘風景



孤立桑里的遺構 調査風景



記念撮影

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 調査地の位置

島立地区は松本市の西方にあたり奈良井川と梓川の合流する河岸段丘の平地で、中世における小笠原氏の同族が所領した居館を島の館といったことなどがその地名に係わると云われる。地区内には野麦、仁科街道、千国道等があり、安曇・飛騨に通じる要衝の地に当たる。今回調査した南栗・北栗遺跡は島立地区の南東部に位置している。東下する久保川により栗林地区が南・北という地籍に分けられ、2遺跡として台帳に登録されている。調査はその両者にまたがるものであり、久保川添南側をI地区、南へII・III・IV、更に東へV地区を設定し、離れて市道高綱線際にVI地区を設けた。現在は北に北栗、南西に南栗の集落があり、水田として利用されている。また東には奈良井川が北へ向かい、西には仁科街道が南北に通じている。

高綱中学校遺跡は前述地区より西へ約1 Kmの地点市道際高綱中学校の南東側を、又島立条里的遺構はこの北東一帯を調査する事とした。これらの地区は島立と新村の中間に当たり、一面広い水田として島立地区の主たる農地である。西には南北に千国道が通じており、すぐ南隣の島立変電所敷地内からは以前高さ約2 m程の大きな石が出土し、これが条里的の基準となる石ではないかと推定され、付近の小字には「立石」という地名も数多く残り、古くより条里遺構として注目されている場所でもあった。

(高桑俊雄)

### 第2節 地形と地質

#### 1 南栗・北栗遺跡

##### (1) 位置と周辺の地形地質

本遺跡は松本市島立南栗集落北東、海拔595~600m、傾斜 $\frac{7.5}{1000}$ (E)の平たん面に位置し、周辺は水田地域である。地形上は広大な梓川扇状地はん澁原の扇端が、奈良井川により切られてできた段丘面上(段丘崖2~3 m)にある。

梓川扇状地は右岸に、波田面(波田礫層)・森口面(森口礫層)・上海波面(上海波礫層)・押出面の四段の段丘面をもっている。島立地区は最低位の沖積層に属する押出面形成後のはん澁原上であり、このはん澁原は北(現河床)へ向うほど新しいものと考えられる。

本遺跡とその周辺(南栗)は島立地区にあって、奈良井川のほか鎮川の影響を直接受けているところである。すなわち鎮川と梓川の旧扇状地はん濫原の接触点は、ほぼ三間沢川(山形)から鎮川の現河床(和田・島立・神林・笹賀の境)の線にあり、新はん濫原の接触点は、太子堂東、南和田、中、下和田南、南栗と考えられる。南栗地籍にはいはって堀川の線まで及んでいるとみる。昭和58年発掘の南栗遺跡は、鎮川の堆積物であった。鎮川はその後の浸食の復活で、南栗の南側に約1 Kmにわたって、高さ1 m前後の段丘崖をつくっている。このため、奈良井川東岸からみると、奈良井川の段丘崖と合せた地形は台地状に見える。南栗集落はこの地形面に広がっている。

島立地区の地下構造は、基盤岩類の上にはん濫原堆積物として、波田礫層(波田面)・森口礫層(森口面)・沖積層がのっていると考えられている。堆積物の厚さは100m以上といわれているが、現在まだはっきりつかめていない。

遺跡と直接関係をもつのは沖積層である。東筑摩郡松本市誌(自然編土壌)によると、島立地区の水田の土壌深度はほとんど60cm以上、土性は壤土となっている。しかしはん濫原の地層の例にもれず、遺跡のトレンチの範囲でも土壌深度は変化が著しい。

台地はその後の奈良井川の回春(浸食の復活)やせぎの流量の増加により、台地上の流れとはらいせぎ(いずれも東流)は崖端から浸食を深め、松本盆地中央部には珍しい谷地形をつくっている。

## (2) 遺跡の地形・堆積層と礫

本遺跡は梓川扇状地はん濫原の扇端が、奈良井川と鎮川に切られて段丘化し、東からは段丘上の台地、西からは扇状地の地形面に見えることは前に述べた。さらにこの台地面は、堀川をはじめとする東への流れによってつくられた浸食谷により、起伏のある地形面となっている。

本遺跡の発掘は、広い面積の中をⅠ～Ⅵ地区に分けて行なったため、連続性をみることは難しかった。微地形的には、発掘地区の中央を東西に通る道路を最高所とした尾根状の高まりで、北側にⅠ地区、南側にⅡ・Ⅲ地区が設定されている。Ⅳ地区は南へさらに一段下り、その南東に続く地区は段丘崖の崖端に近い。Ⅴ地区の対岸に浸食谷を挟んで段丘の突出があり、さらに浸食谷をはさんで上下段をもつ段丘がある。浸食谷をつくる流れは堀川とともに南栗集落がのる段丘地形をつくっているものである。Ⅰ地区の北には50cm幅の凹地があって、流れが東へ進むにつれ台地面を深く浸食し谷(1.5～2 m)をつくっている。また凹地は西に行くに従い、次第に平坦となり海拔600mの等高線を越えると消滅する。この流れは田中沢の分流で左岸に50m前後の小規模な段丘崖を二段つづけている。この凹地を北へ越えると、県道新田松本線で北栗集落へ向けて地形面は再び高くなっていく。北栗の奈良井川段丘面にもこうした起伏面や空谷がみられる。Ⅵ地区はこの凹地と県道間の奈良井川段丘の崖端にある。

本遺跡は広い面積にわたる上に、発掘地区やトレンチ間に距離があるので、共通した状況を示すことが少ない。共通した状況をあげると次のようである。

- 1 耕土(作土)の土壌深度が深い。東筑摩郡松本市誌によると土壌深度は60cm以上となっている。実際にどの地区でも表面から砂礫層に達するのに最低60cmである。土層の深いところでは1mを超える。
- 2 砂礫層の礫の大きさは各地区を通じ、新村の遺跡群、島立条里的遺構、南栗遺跡(58年発掘)より小さい。小礫のほか細礫や砂が多く、扇状地の扇端の堆積をあらわしている。
- 3 礫の種類は砂岩(硬砂岩)・チャート・粘板岩・けい岩・礫岩・花こう岩・安山岩で梓川水系の円礫である。
- 4 遺跡面(遺物包含層、遺構検出面など)は、深さ60~70cmで作土の褐色土層にある。次に各発掘地区の堆積の特徴をあげてみる。

#### I地区

東西に長く最も広い地区であり、土層が全域にわたり深い。土層は上から灰白色粘質土と斑鉄をもつ黄褐色粘質土(耕土)50cm、ローム質褐色土20cm、砂質ローム質褐色土(10cm)、以下黄褐色土である。また地区の中央やや南よりを、砂礫層が東西に蛇行して走っている(溝1)。幅は表土で3~3.5m、深さは東から2m、1m(+), 1.3m(+), 70cm(+), 70cm(+))であって、底面の土層までは2mである。堆積の仕方は土・砂・細礫の混成であったり、土層・砂層・礫層またはこれらの混成層の交指状の堆積である。このことからこの流れは自然流で扇端にあった静かな流れが、流速や流量の変化に応じて、いろいろな堆積を示したものと考えられる。流れの方向はほぼ西から東へである。

#### II地区

西側のトレンチII(第2図)の断面に、幅約10cm中央で厚い砂礫土層があらわれた。表土の下30cmからはじまり、厚さ60cm以下で底部の褐色土層に断面が碗状に重なっていた。上から(1)灰色の砂質土層30cm、(2)灰色の砂細礫混り土層30cm、(3)底部に鉄分の汚染層3cmで、両端に行くほど薄くなる。ここでも砂質土層と礫まじり土層が交指状に重なっていた。地形異常として中央やや北よりに、底部の褐色土層への落ち込み(巾90cm、深さ100cm)があり、内部に粗砂・細砂・微砂・腐植をもつ褐色粘土が交指状にまっていた。落ち込みは、上の(1)層は破壊されていないが、(3)層を引き下げたり、(2)層を切っていること、内部の堆積物が(1)層のものに近い砂質であることなどから、(1)層の堆積直前のもと思われる。なおこの落ち込みは他の方向へ延びていないようであり土壌とした。砂礫土層全体の広がりや方向は、トレンチがここだけなので推定の域をでないが、両端が南北にあることから、流れは西から東へ延びていたものと考えられる。ただ幅の広さや、碗状の形から一時期流れの滯水性が生じたものと思われる。

#### III地区

耕土(表土)下の一部に砂礫があるほかは、土層の厚い地区である。

#### IV地区

褐色土層が薄い砂礫層に覆われている地区である。面積の $\frac{3}{5}$ は耕土下に、厚さ50cm以下の薄い砂礫層に広がっている。面積の残り $\frac{2}{5}$ に当る南東部は土層がよく発達し、深さ2mを超える。地形異常として土層部分で、径およそ470~500cm、深さは検出面から210cmに及ぶ大穴が発見された(73住)。内部は厚さ10cm前後の粘土質土の互層で、植物質土壌の類いた層が挟まっていた。大穴に近い南東隅の土層は、表土40cmの下に褐色土層(ローム質)130cm、細礫を含む砂層20cm、再び褐色土層10cm(+)で2mを越え、後に述べるVI地区の土層に似ている。北西隅にもうけた小トレンチでみると砂礫層は幅3.5m、断面が皿状の堆積で中央近くの厚さは46cmである。礫は砂混りの細礫で、堆積の方向は土層部分との関係から西北西—東北東と考えられる。

#### V地区

IV地区と同じく褐色土層上に薄い砂礫層が部分的に覆っている。砂礫層は細礫・砂・土で、それぞれが上下層・漸移層となっている。北隅のトレンチV(第2図)の断面図でみると、厚さは30~50cmであるIV地区と違うのは褐色土層の浅い波状の凹地の数条を埋めた状態にみえる。凹地形を流れの方向とみると南南西—北北東で、ある時期の小流の数条と考えられる。いずれも耕土下40~50cmにみられるもので、南栗遺跡全体に共通した現象である。

#### VI地区

ここは以上の地区を離れた北東の奈良井川段丘崖すれすれの場所にある。すでに藤沢宗平氏により縄文遺跡地として指摘され、2mの地下より土器の出土をみたという段丘面の一部に当たっている。深掘地点の南東断面は、(1)表土(耕土)20cm、(2)灰白色土20cm(上部ほど灰白色の溶脱層、下部斑鉄)、(3)褐色土20cm(鉄・マンガン分が多くなる集積層)、(4)黄褐色土20cm(砂分が少ない)、(5)黄褐色土35cm(砂分が多い)、(6)砂質土8cm、(7)褐色土12cm(砂質)(8)黄色粘土123cm(+)の2mを越える堆積で、土性は壤土である。縄文中期の土器片の出土層は黄色粘土層である。

また地区の北西面の地表下60cmに粗砂と細礫による砂礫層があり、NE70°(西南西—東北東)の方向を示していた。

堆積層の礫については前に述べた通りであるが、92住カマドに使用されている石類は花こう岩・硬砂岩・安山岩で、径30×40cmの直方体がほとんどで、発掘地区外から運ばれた可能性が大きい。

#### (3) 遺跡の立地

すでにこの地域は、盆地中央での縄文時代遺物の出土地として知られている。また奈良井川段丘による台地面、梓川扇状地の扇端面として形成された地形面である。台地面は小流による浸食谷で起伏をもつが、居住地としての自然条件はすぐれている。梓川の自然流、後の用水せぎの発達、集落の発生や水田開発に深い関係をもったことは、多くの人びとの指摘するところである。

今回の調査で知ることのできた自然条件は、扇状地扇端の地層の堆積状態である。除土、トレンチなどによりあらわれた土層や流れと考えられる砂礫層の分布や存在状態から、表面の地形起伏や検土杖では観察できない地下構造を知ることができた。

・砂礫層の礫の大きさ・形からみると本遺跡の礫は小・細礫が中心で、多くの砂や砂層をともしない明らかに扇端の堆積状態を示していた。これに対し上流域の安塚古墳遺跡や秋葉原遺跡（いずれも押出面）では大・中礫の歪円礫、中流域の新村条里的遺構や島立条里的遺構では中・小礫の歪円礫が卓越していた。

また土層と砂礫の分布からは、安塚・秋葉原遺跡では混在することが多く、洪水性堆積もみられた。新村条里・島立条里的遺構では土層と砂礫層の横の分帯が明りょうとなり、基底の砂礫層の上に流れの状態が認められた。本遺跡では二層の横の分帯はさらに明りょうとなり、土層の幅・深さはともに増大している。砂礫層は蛇行の形をとり、おだやかな流れを思わせ、I地区を除いて一般に薄く、明らかに扇状地末端の堆積となっている。

地表面よりの土層の厚さは、新村条里・島立条里的遺構周辺では60~70cmで、基底の砂礫層の分布範囲が広いので、たいてい土層の下に砂礫層をみた。本遺跡では褐色土層の分布範囲が砂礫層より広く、またその層も厚い。褐色土層は砂質ローム質土壌である。土地のうびとは舌土と呼び、波田面・森口面にみられるロームの河川堆積物で、ロームと砂の混じった壤土である。

本遺跡の砂礫層は、褐色土層の中の小さい流れとして存在するらしく、洪水性やはん濫性の状況は認められない。I地区の砂礫層（主な自然流）以外は、地表面から60~70cmの地下に流れの形としてあり、土層が深さ1mを越え2mに達するところでは、やはり60~70cmに砂・細礫の薄い層として存在する。これはこの深さの堆積時に水の影響があったものと考えられるが、上流や中流にみられるような激しいものではない。またこの土層や砂礫層は土師器や須恵器の出土した遺構によって切られているので、地形面の形成は遺跡の成立以前で、当時も現在と余り変わらない環境にあったと考えられる。

縄文時代の遺物は、VI地区の褐色土層（地表からの深さ1.8~2.0m）でみられた。過去の資料でも同程度の深さの土層から、縄文時代中期・後期の遺物が報告されており、その分布は奈良井川左岸段丘面全体に及んでいる。当時の遺跡の面を単純に計算すると、現在より約2mほど低いことになり（堆積平均0.4~0.5mm/年速度）、奈良井川の河床とは1mほどの高度差になるが、河床面の上昇を考慮にいれば、現在の状態に近いものであったと考えられる。この地形面は奈良井川のはん濫も、梓川の新しいはん濫の影響（堂沢より北博木川沿いのはん濫は奈良井川左岸段丘を破壊している）を受けていない面である。地形分類や地形面の対比からみると、この地形面は上海渡面~押出面の形成時に扇状地の末端面としてできあがり、奈良井川の回春（浸食の復活）により、右岸宮淵本村とともに段丘化したものと考えられる。

## 2 島立条里的遺構

### 1 位置と周辺の地形地質

本遺跡は松本市島立永田集落の南沿い、高綱中学校の北東にあって、海抜600～605m、傾斜 $\frac{8}{1000}$ S Eの平たん地にのり、周辺はすべて水田地域で田中沢・境沢等によってかんがいされている。地形上は広大な梓川扇状地の末端に近く、扇状地性の沖積面上に位置する。

梓川は右岸に四段の段丘面をもち、この面を上より波田面・森口面・上海渡面・押出面（安塚・秋葉原遺跡がのる）と呼んでいる。波田面・森口面はロームに覆われていて、それぞれ洪積世後期中ごろ、後期末に形成されている。上海渡面・押出面は沖積世に属するもので、本遺跡は最も低位の押出面に続く沖積面にのっている。

遺跡から西へ向うと、押出面・森口面・波田面がつぎつぎにみられる（上海渡面はない）。この境界は段丘崖線<sup>escarpment</sup>で、下流で新しい面が形成されると、高位の面が低位の面にもぐるために、屋根瓦状の堆積となる。すでに筆者が和田村総合調査（東筑摩郡郷土資料編纂会文化部中間報告（昭和28年））でしたように、当時和田地区にあった「サイロ」や「いももろ」の地下内部で、50cm～2 mに及ぶローム層が粘土の下、あるいは砂礫にはさまれているのが発見された。島立地区の近くでは、下和田で砂礫層と互層をなしているのがみられた。

本遺跡及び島立地区は、押出面に続くはん濫原の堆積物である新村条里の発掘調査を概観して河流の移動によってできた新しい地形面を三区別してみた。

- 1 根石—安塚—南新一和田（押出面）
- 2 上新一北新一下新一島立南堂沢より南
- 3 樽木川沿い

これによると、本遺跡は2つの面にのっていることになる。

島立地区の地下構造は、基盤岩類の上にはん濫原堆積物として、波田砂礫層（波田面）・森口礫層（森口面）・沖積層がのっていると考えられている。堆積物の厚さは100m以上といわれているが、現在まだはっきりつかめてはいない。

遺跡と直接関係をもつのは、沖積層のはん濫原堆積物である。東筑摩郡松本市誌（自然編土壌）によると、島立地区の水田の土壌深度はほとんど60cm以上で、土性は壤土とされている。しかしはん濫原の地層の例にもれず、遺跡のトレンチの範囲でも土壌深度は変化は著しい。

### 2 遺跡の堆積層と礫

本遺跡の地形面は新村条里の遺構から続く面で、はん濫原堆積物は、土層・砂層・礫層あるいはこれらの混成層などさまざまである。東筑摩郡松本市誌（自然編土壌）では、本遺跡の地籍の土壌深度を島伏（40～60cm）の分布としているのが注目される。もちろん土壌深度は測定点での表面か

らの深さとなるから、平面的にすべて同じものとは考えられない。

実際に本遺跡の地層は複雑で、広い面積の全面に碁盤目状の深さ1mを越えるトレンチ(東西に4条、北より1・2・3・4。南北に3条、西より5・6・7)が設定され、地層の調査には好条件であるにもかかわらず、堆積状況の理解は難しかった。

一般に地層の上部は、耕土(作土)の灰黒色ないし灰白色の粘土で、下部は褐色ついで濃褐色に変わる、わずかに円礫を混えた砂質の土層である。耕土と褐色土の間は溶脱層に当り、統いて斑鉄が増して下部の土層になる。鉄・マンガンの汚染や集積は、濃褐色土の上部に多く、盤層(鬼板・鉄分)も一部にみられたが、新村条里の遺構ほど発達していない。砂礫層の浅いところは礫が直接汚染されている。最下層は砂礫層で、トレンチ2の中央に大礫が多かったが、他は小・中礫(径20×10、15×15、10×12cm)が目立った。また細礫や砂が混じるところから、小さい流れも考えられるが、トレンチが平面的に広げられていないのではっきりしない。

この堆積を填層位でみると、灰黒色土はA<sub>1</sub>層、灰白色土はA<sub>2</sub>層、褐色土はB<sub>1</sub>層、濃褐色土はB<sub>2</sub>層に相当すると考えられる。これらの層は最下部の砂礫層の深さによって、その厚さも40cmから1mに及んでいる。(第87図)

土器片などの遺物は、表面から60cm位の深さで発見されているが、土層中だけでなく、砂層・礫層の場合もあるので、遺跡の成立は地形面が形成された後と考えられる。そこで条里の遺構や小流をみつめるため、砂礫層の分布、深さ、土層との相互関係などを調査してみた。

これによると、遺跡内で最も土層の厚いところは、北東隅の永田集落寄り(トレンチ1・6・7)で、1mまたは1mを越えている。次いで最南端のトレンチ4であった。

また砂礫層の浅いところは、トレンチ1の西、2・3・6の中央～南部で、遺跡の大体中心部に当る。砂礫層からみた流れの方向はおよそN60～65°W(西北西)で、下新南(北新南)の方向からとなり、前に述べた地形面の2つの面に当たっている。また現地地形面上の低地の方向(鉄塔付近を通る)でみるとN60°Wである。また砂礫層中にも中央の鉄塔の南西に、N60°Wを示す厚い土層が挟まれているが、砂礫層と土層が相互併入しているところから、同時堆積のものと考えられる。前記の厚い地層も下部の砂礫層とは整合であり、左右の砂礫層とも相互併入のところもあるので、堆積には余り時間的間げきはなかったと考えられる。

ただ鉄・マンガンの汚染度は、浅い砂礫層の堆積部分が、厚い土層部分よりも高いのは、流れや溝の存在を思わせたが、遺跡の中や周辺を境沢・田中沢およびその分流が東西に流れていて、その影響も考えられ判断が難しい。実際にトレンチ1の西端や鉄塔の南側の強い汚染は、現在の流れの影響と判断された。

また地形異常としては、遺物の出土した付近に落ち込みが多くみられた。N60°Wの方向につながるものもあるが、トレンチが平面的に広げられていないので、自然のものか人為のものか確認ができなかった。

腐植物については、トレンチ3の西端に、耕土(30cm)と細礫まじり土層の間に挟まれて、帯状の黒褐色腐植層(約10cm)があったが、すぐわきを現在のせぎ(田中沢)が流れているので、この影響とみられた。現在のせぎの影響は、トレンチ5の北端(境沢)でも大きく、ルーズな砂層としてみられた。腐植土層は他ではみられなかった。

砂礫層の礫の形は円礫や歪円礫で、硬砂層を主としチャート・花こう岩に安山岩・ホルンフェルスがわずかにみられた。粘板岩はほとんど細礫であった。いずれも梓川水系の礫で、流れの方向とあわせ、梓川のはん崖原堆積物であることが証明される。

### 3 遺跡の立地

条里遺跡の発掘は、条里制の土地制度がその場所に実施されていたことの裏付けの遺構を発見することである。

条里制立地の自然条件としては、まず土壌の深さ、肥よく度、土性があげられるが、本遺跡の土壌は河川堆積物の砂質ローム質土壌で、60cmを越える厚さをもっている。また肥よくな壤土で保水性透水性に富み、今日でも稲作の一等地である。

次に条里制の土地割に必要な平たんな地形面は、扇状地の末端に当り $\frac{7}{1000}$ の傾斜で、その条件を満たしているといえる。

また水田開発に最も深い関係をもつ水利(取水・導水・排水のかんがいの仕組み)は、新村条里的遺構と同様に梓川本流に近く、その自然流利用の適地であり、わずかな土木技術でも導水の可能性をもっている地域である。

条里遺構の発掘としては、自然堆積中に人為的な状態であるせぎ・あぜ等を発見し、その土地割や方位を知ることである。そのためには自然堆積中の地形異常に着目する必要がある。

今回の発掘ではその発見に努力したが、決め手になるものがみつからなかった。(太田守夫)





- 印発掘地点  
 ○ 昨年度発掘地点
- 1 南栗遺跡
  - 2 高綱中学校遺跡
  - 3 北栗遺跡
  - 4 三ノ宮遺跡
  - 5 新村・島立条里的遺構
  - 6 梶海渡遺跡
  - 7 下神・町神遺跡
  - 8 和田町遺跡
  - 9 秋葉原遺跡
  - 10 安塚古墳群
  - 11 新村遺跡
  - 12 島内遺跡群
  - 13 下二子遺跡
  - 14 くまのかわ遺跡
  - 15 神戸遺跡群
  - 16 南荒井遺跡
  - 17 太子堂遺跡
  - 18 川西遺跡
  - 19 川西開田遺跡
  - 20 三間沢川左岸遺跡
  - 21 境御遺跡
  - 22 三夜塚遺跡

第3図 周辺遺跡

### 第3節 周辺遺跡

島立の遺跡については故藤沢宗平氏が詳細に調査しており<sup>(註1)</sup>。それによると大きくみると奈良井川左岸100mあまりの段丘面と、集落の中に分けられよう。しかし奈良井川だけが島立の遺跡の立地に影響を及ぼしたのではなく、むしろ西の梓川からの分流による何本もの堰の縁辺に遺物の出土が多く、今回の調査でも多数の溝址がそれを裏づけるものであろう。

まず南側をみると、栗林神社周辺では昨年度の調査で神社北側一帯から奈良期～中世までの住居址を検出、完成の佐波理碗等の遺物出土を見ている<sup>(註2)</sup>。この一帯は神社南西際、擬宝珠、及木殿にも同様の遺物が散布し遺跡はかなり広い範囲になるものと思われる。北栗お乳神社周辺では周囲の住宅造成の際に縄文中期後葉、平安期の土器が多量に出土しているのを聞いている<sup>(註3)</sup>。三ノ宮神社周辺では参道北、農協前、小学校校庭、出張所前などで須恵器を主とした遺物の出土をみており、他にも古墳期の甕・直刀らしきものの出土を聞いている。近隣地区に注目すると、南側神林堤海渡では平安期と思われる遺物の出土があり、鏡川を渡って神林下神に入ると、平安期を中心とした住居址、建物址等が113軒検出され奈良三彩の小壺を出土する下神・町神遺跡が目を見張る<sup>(註4)</sup>。西側は和田、新村地区になるが、点々と土師器、須恵器の出土のある遺跡がある程度で遺跡の分布密度は低い。しかし新村秋葉原、安塚では古墳期末の群集墳が検出されており<sup>(註5)</sup>、この地の開発が古いものであることを示している。

さて今回は本書に掲載できなかったが、VI地区で縄文後期、久保川悉いで縄文中期初頭土器を多量に採集している。近隣では該期の遺構、遺物、奈良井川上流左岸の笹賀地区で、牛の川、神戸、くまの川<sup>(註6)</sup>、川西開田、山形村の三夜塚遺跡に求める事ができる。(高桑俊雄)

註1 「松本市・塩尻市・東筑摩郡誌」第2巻 歴史上

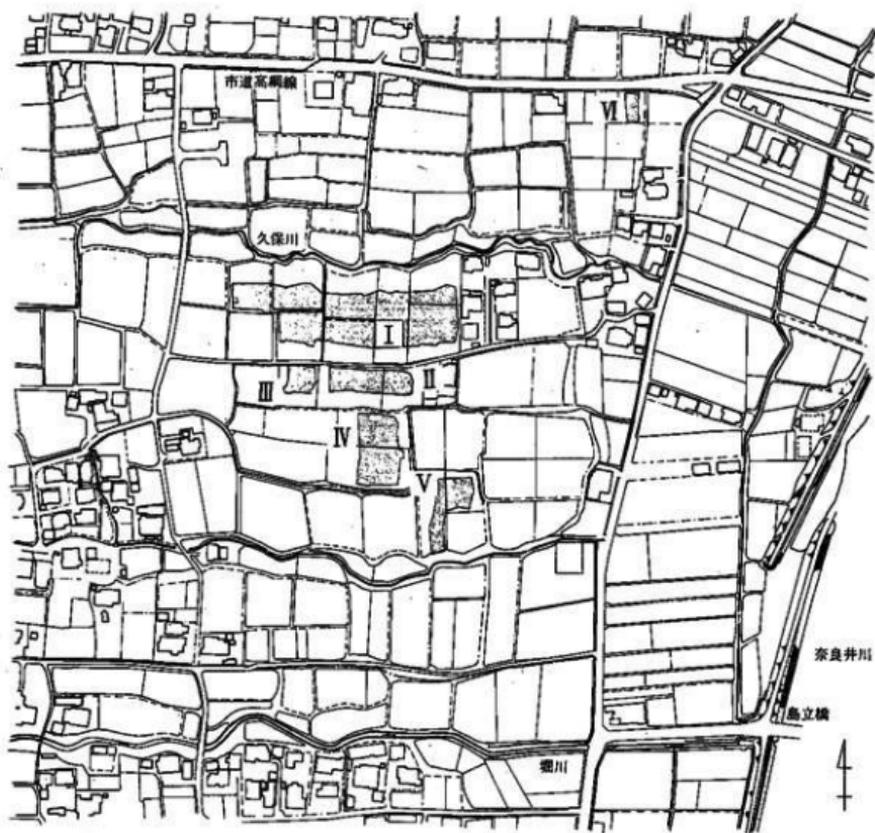
2 「松本市島立南遺跡」松本市教育委員会(1984)に詳しい

3 地元の中島要氏、後田同一氏が採集保管している

4 「松本市下神・町神遺跡」松本市教育委員会(1984)に詳しい

5 「松本市新村安塚古墳群」松本市教育委員会(1979)、「松本市新村秋葉原遺跡」同(1983)に詳しい

6 松本市教育委員会編各種報告「牛の川」(1956) 「神戸」(1955) 「くまの川」(1982)等参照



北条・南栗遺跡調査地 I~VI地区

0 50 100m

第4図 調査範囲

## 第3章 南栗・北栗遺跡

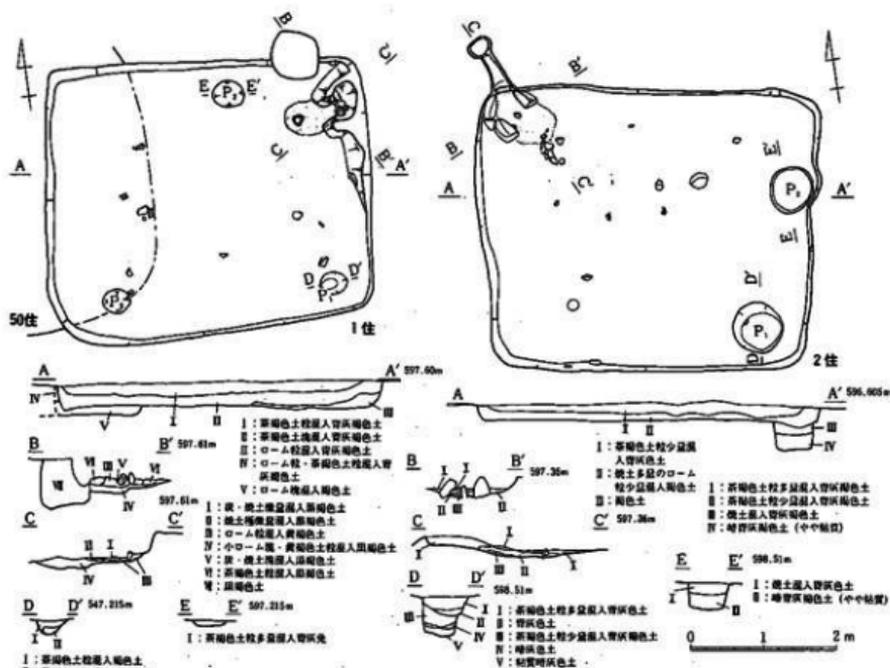
### 第1節 調査の概要

今回の調査において、実際に除土し、遺構検出を行なった実質面積は、I～VI地区で計9,056m<sup>2</sup>に達する。は場整備により破壊の恐れのある地区を選定した為、このように各々の地区が離れてしまった。検出面は集積層下部あるいはその直下の黄褐色土中で表土上面から50～60cmという深さであるが、II地区が他に比べ10cm程深い。遺構の覆土は平安時代末迄のものの中世以降のものとは明瞭に異なり、後者ほど灰白色を呈し、又検出面も若干浅い所にある。これは昨年の南栗と同様の傾向を示している。検出した遺構は住居址96、掘立柱建物址15、竪穴状遺構37、土壇19、ピット約700である。住居址は遺物より明確に分るものだけで古墳時代5、奈良時代12、平安時代68、他に中世のものがある。圧倒的に平安時代のもが多く、9世紀末～10世紀初頭を一番のピークとしているようである。掘立柱建物址は切合関係より奈良時代末～平安時代中頃を中心としている。竪穴状遺構には墓壇らしきものが多く含まれている。出土した遺物には土器、土製品、石器、鉄器、銭等があり、他に金環1点、銅製帯金具2点がある。土器には土師器、須恵器、陶器、磁器、土師質土器等があり、各器種が見られる。又縄文土器がVI地区深掘地点（中期後葉）と、未発掘の久保川添い（中期初頭）から出土、場所によっては歴史時代検出面下に異なる時代の生活面をもっている事がうかがわれた。土製品には紡錘車のおもり部、土鏝が、石器には砥石、硯、鉄器は和釘を中心として完形の鎌、鋤頭等があり、銭は計47点のうち43点が紐を通してピットの上に置いた状態で出土した。又金環は住居址から、帯金具の2点も住居址の床面及び壁際にあり伴出土器により良好な資料となりえよう。各地区のうちでV地区は遺構に変化の見られた場所である。ここは調査地の南東に位置し、東には奈良井川段丘崖が迫っている。中世の竪穴状遺構が20基あり周囲のピットも同時期の小さなものである。

以上のことから本遺跡は古墳時代末期から平安時代末期にかけて長時期集落として営まれ中世に至って一部を墓域として使用していたと考える。（高桑俊雄）

### 第2節 遺構

#### 1 住居址



第5図 第1・2・50号住居址

### 第1号住居址

位置 I地区最西端 50住を切る

規模 4.50×3.67m 平面形 長方形

主軸方向 N-90°-E ビット P<sub>1</sub>-39×30×

20 P<sub>2</sub>-44×36×7 P<sub>3</sub>-38×34cm

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直で茶褐色を呈す。床面はローム混じりの褐色土で平坦だがやや軟弱である。カマドは東壁の北端に設けられ石組粘土カマドである。カマド前の床面には焼土が薄く散布してみられた。尚、煙道は検出されなかった。

遺物は少なく、覆土〜床面にかけて土師器杯・埴等が散在してみられたのみである。出土土器より本址はⅡ期に位置づけられるものと思われる。

### 第2号住居址

位置 I地区西端1住東側 規模 4.56×3.86m

平面形 長方形 主軸方向 N-8°-E

ビット P<sub>1</sub>-70×69×55 P<sub>2</sub>-62×59×38cm

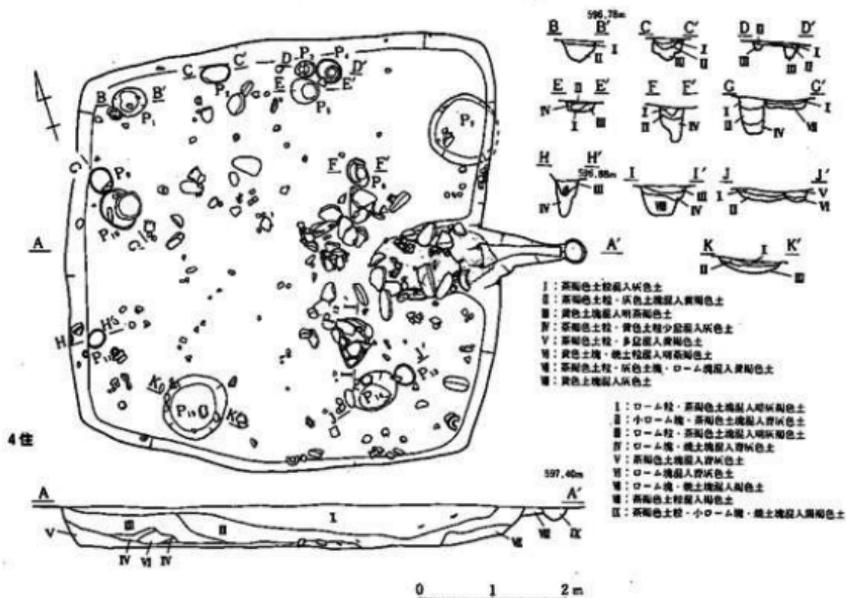
壁および床は褐色土で、床面は全般的に平坦で中央部は特に堅緻で良好であった。カマドは北西隅に河原石によって構築されており、袖石の間には支脚石がみられた。カマド前の床はあまり掘り込まれておらず焼土は薄く散布していた。

遺物は少ないが、灰釉碗、土師器杯・皿・埴・羽釜等の土器の他、釘・鎌先、北壁に密着して青銅製鈎帯が出土した。本址は出土土器よりⅡ期に位置づけられるものと思われる。

### 第50号住居址

1住床面精査中に検出されたが検出面が深いため1住との重複部分のみ調査をした。出土土器より本址はⅡ期に位置づけられるものと思われる。





第7図 第4号住居址

#### 第4号住居址

位置 I地区西側 規模 6.03×5.97m

平面形 方形 主軸方向 N-105°-E

ピット P<sub>1</sub>-47×39×30 P<sub>2</sub>-41×23×30

P<sub>3</sub>-30×24×12 P<sub>4</sub>-37×32×22 P<sub>5</sub>-39×

34×14 P<sub>6</sub>-40×27×47 P<sub>7</sub>-98×95×25

P<sub>8</sub>-35×30×50 P<sub>10</sub>-59×41×10 P<sub>11</sub>-27×

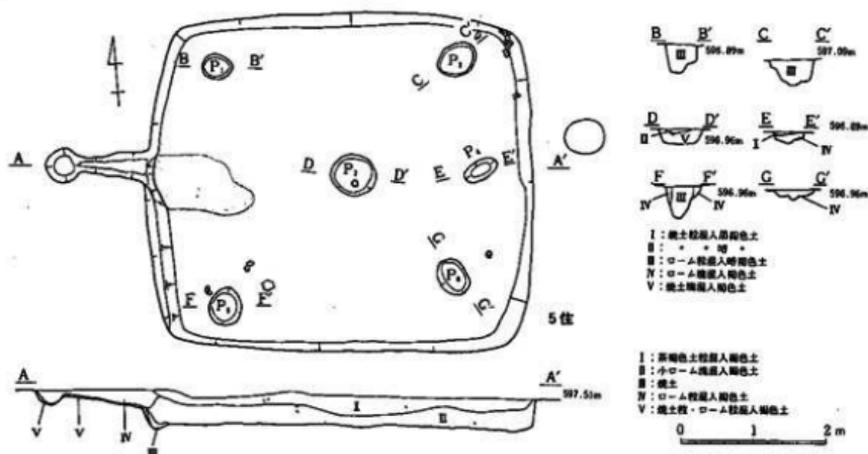
22×48 P<sub>12</sub>-68×42×40 P<sub>13</sub>-30×27×15

P<sub>14</sub>-65×51×14 P<sub>15</sub>-93×86×18cm

黄褐色土中へ掘り込まれる。検出面から床面迄は非常に深く、上層から下層まで多量の遺物と、人頭大の河原石が出土し、それらは遺構内に堆積したII、III層に多く含まれる。壁は、黄褐色から黄色を呈し直状をなす。床面は黄色土で中央部非常に固い。壁

際では固さは見られない。主柱穴は深さより、壁際  
のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>11</sub>、それと、カマド寄りに  
あるP<sub>8</sub>・P<sub>12</sub>と抱えたい。カマドは東壁中央に位置  
し、煙道を設けた石芯粘土カマドである。かなり強  
固に構築されている。焼土は、カマド内から両袖部  
にかけてかなり多量に見る事ができる。

遺物は、今回調査した住居址のうちで量において  
は最大を示す。前述の如く状況より遺構築絶後の埋  
没途時における廃棄行為の結果であろうと考える。  
本址のものとしては床面及び壁際よりの坏、灰釉瓶、  
四耳空の他、緑釉陶器片一片を検出している。緑釉  
は今回調査ではこの1片のみである。他には該期の  
器種のほとんどを見る。なおこのような遺物出土の  
状態は他には見られなかった。遺物より本址はX期  
となる。



第8図 第5号住居址

第5号住居址

位置 I地区西4住南側 規模 5.33×4.70m

平面形 正方形 主軸方向 N-84'-W

ピット P<sub>1</sub>-43×35×40 P<sub>2</sub>-57×46×36

P<sub>3</sub>-64×57×22 P<sub>4</sub>-50×27×16 P<sub>5</sub>-53×

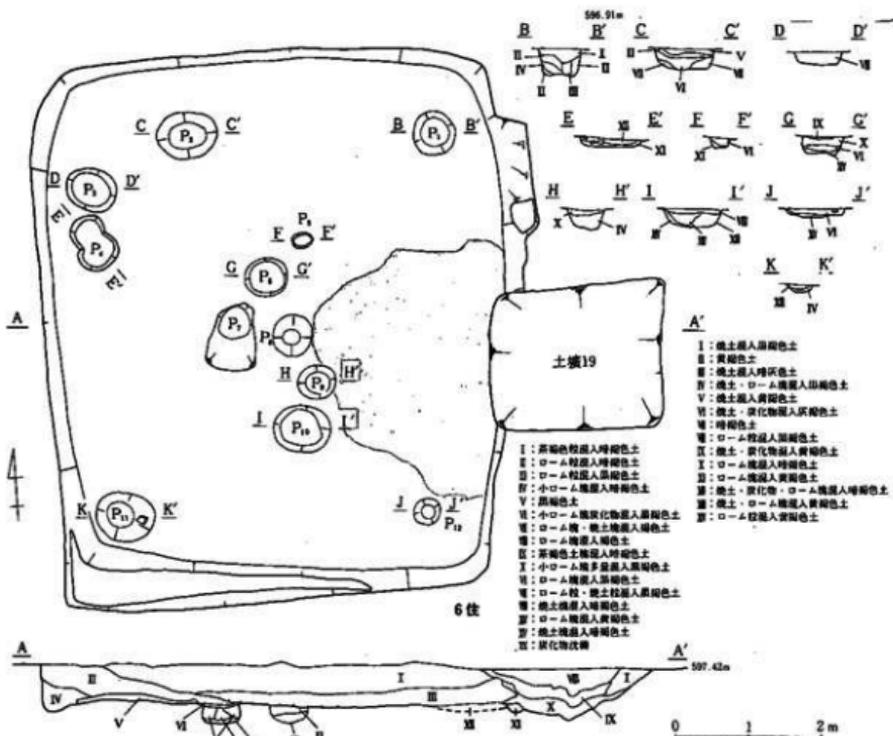
45×45 P<sub>6</sub>-54×39×15cm

黄褐色土中に掘り込まれ壁は直におちる。壁高は東壁が約40cm、南壁・北壁約36cm、西壁は約45cmを測る。覆土は褐色土であり、上層は茶褐色土粒、下層は小ローム塊の混入がみられた。床面は黄褐色土で、やや起伏があるものの良好な状態であった。ピットは6本検出されたが、そのうち、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>は主柱穴であると思われ、P<sub>4</sub>を除いて36-45cm

掘り込んである。また中央に位置するP<sub>1</sub>は、上層に焼土粒、下層に焼土塊を含み、土師器破片が数点出土していることから、火と関係のある施設であったものと考えられる。カマドは西壁中央に掘り込まれて構築されており、煙道は約1.4mを測る。袖は確認できなかったが、南側では壁がテラス状をなしており、袖の役割をしていたものとも考えられる。焼土はカマド前に薄く散布してみられた。

遺物はピット3内と北東隅に集中して出土している。その多くは土師器であり、他に須恵器高坏・坏がある。また、北東隅の壁には計16個の編物用石鍾が検出面から壁中位にかけて密着して出土した。

本址は出土土器からⅢ期に位置づけられるものと思われる。



第9図 第6号住居址・土坑9

第6号住居址

位置 I地区北西 土坑19に切られる

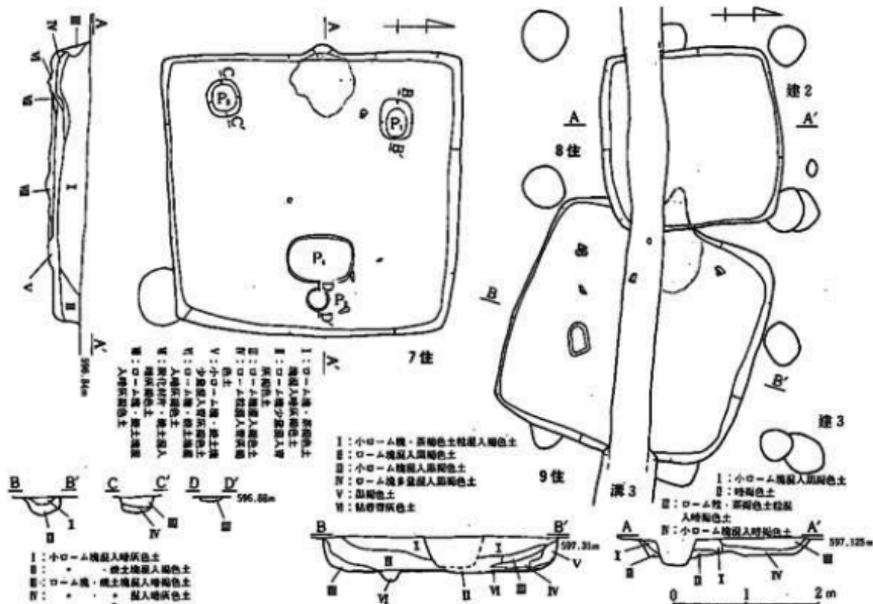
規模 7.50×6.64m 平面形 長方形

主軸方向 N-92°-E ビット P<sub>1</sub>-60×58×36  
P<sub>2</sub>-84×53×28 P<sub>3</sub>-70×57×18  
P<sub>4</sub>-77×42×12 P<sub>5</sub>-29×21×15 P<sub>6</sub>-58×52×25  
P<sub>7</sub>-96×54×25 P<sub>8</sub>-58×53×24  
P<sub>9</sub>-52×46×27 P<sub>10</sub>-80×64×25 P<sub>11</sub>-80×68×10  
P<sub>12</sub>-37×36×10cm

覆土は暗褐色を呈し、壁はほぼ直に落ちるが、東壁北側では張り出し部がありややならかに落ちる。また南壁西側には、床面より約50cmの高さで段が設けられている。同様の施設は29住にも認められ

る。床は黄褐色土でやや起伏をなし、あまり固くはない。床面上には、焼土・炭化物が一面に散布しており、東側では焼土が特に濃密であった。カマドは土坑19に切られている東壁中央にあったものと思われる。ビットは12本検出されたが、床面を正確に把握できなかったこともあり全てが同時に存在したものととは考え難い。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>あるいはP<sub>3</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>は位置から主柱穴かとも考えられるが、掘り込みが浅く疑問が残る。

遺物は覆土上層～床までに全体的に比較的多く出土している。土師器の破片が極めて多く、他に土師器杯・高杯、須恵器杯・高杯・長頸壺・蓋等がみられる。本址は出土土器よりIV期に位置づけられるものと思われる。



第10図 第7・8・9号住居址

第7号住居址

位置 I地区北西 規模4.00×3.84m  
 平面形 正方形 主軸方向 N-90°-W  
 ビット P<sub>1</sub>-54×44×25 P<sub>2</sub>-51×46×23  
 P<sub>3</sub>-32×31×6 P<sub>4</sub>-93×65×7 cm

やや小型の住居で壁はほぼ直に落ちる。一度深く掘って埋め直したように寝え、床面は軟弱であった。ビットのうち、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は位置から柱穴かと思われる。またP<sub>4</sub>は非常に浅いものであった。カマドは西壁中央に浅く掘り込まれている。遺物は、土師器優が主で、他に須恵器坏もある。土器からはIV~V期に位置づけられると思われる。

第8号住居址

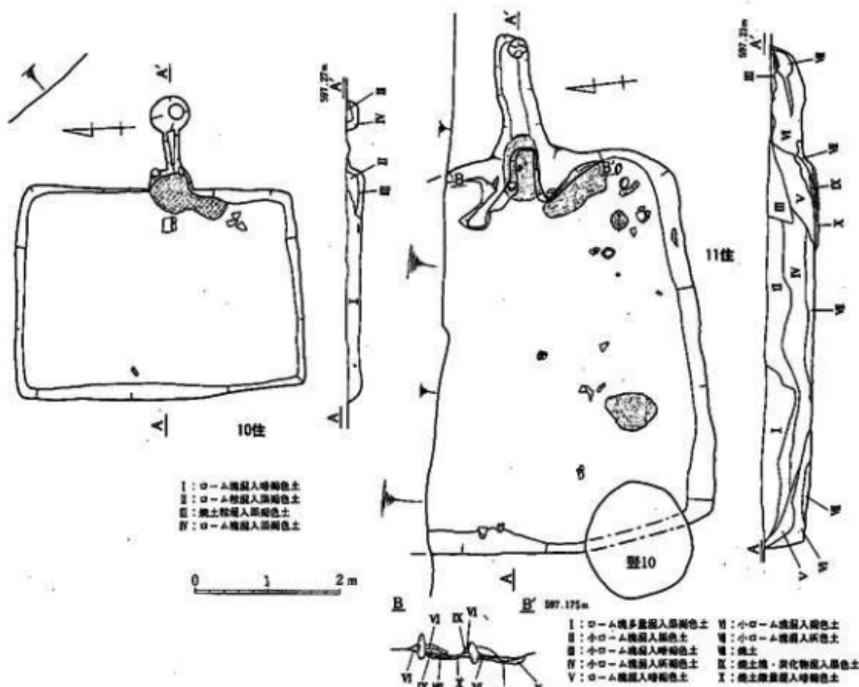
位置 I地区北西 9住を切る ビットなし  
 規模 2.47×2.47m 平面形 正方形

壁はややゆるやかに落ち、床面は堅靱な黄色土であった。カマドは検出されなかった。遺物は少なく時期設定はし難いがⅢ-X期に位置づけられよう。尚、本址は住居としてとらえるより竈穴状遺構としてとらえたほうが妥当だと思われる。

第9号住居址

位置 I地区北西 8住に切られる  
 規模 3.37×3.14m 平面形 正方形  
 主軸方向 N-73°-W ビットなし

壁はほぼ直に落ち込み、床は黄褐色土でやや軟弱であった。カマドは西壁中央を掘り込んで築かれている。焼土の厚さは約10cmであった。遺物は、土師器優の一括品と須恵器坏・長頸壺の破片が出土したのみである。本址は出土土器からIV期に位置づけられるものと思われる。



第11図 第10・11号住居址

第10号住居址

位置 I地区中央北端 規模 3.92×2.87m

平面形 長方形 主軸方向 N-87°-E

ピット なし

長方形の特徴あるプランをしている。壁はほぼ直に落ちるが部分的にややゆるやかに落ちる。壁および床面は黄褐色土である。カマドは東壁中央に掘り込まれて構築されており、煙道は細くくびれているが煙出口は径が大きく特徴的である。焼土はカマド内から南側床面にかけて散布して認められた。遺物は土師器甕が出土しているものの少なく時期設定は不明確であるがIII~IV期に位置づけられよう。

第11号住居址

位置 I地区中央北端 竪10に切られる 北側盛土

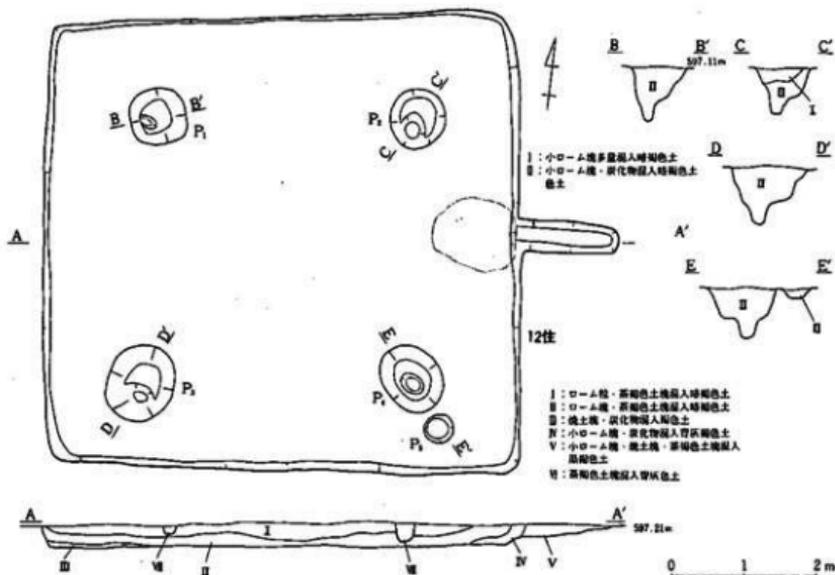
に隠れる 規模 5.50m×?

平面形 長方形 主軸方向 N-92°-E

ピット 不明

黄褐色土中に深く掘り込まれている。床面は堅緻な黄色土で特に中央部では良好であった。カマドは石芯の袖を持ち、煙道先には土師器甕3個体がほぼ完形でみられた。

遺物は床面に多く、特に南東隅に集中してみられた。須恵器杯・土師器杯・甕でありIII期に位置づけられる。



第12図 第12号住居址

第12号住居址

位置 I地区中央 規模 6.60×6.20m

平面形 長方形 主軸方向 N-85°-E

ピット P<sub>1</sub>-77×77×74 P<sub>2</sub>-79×77×62

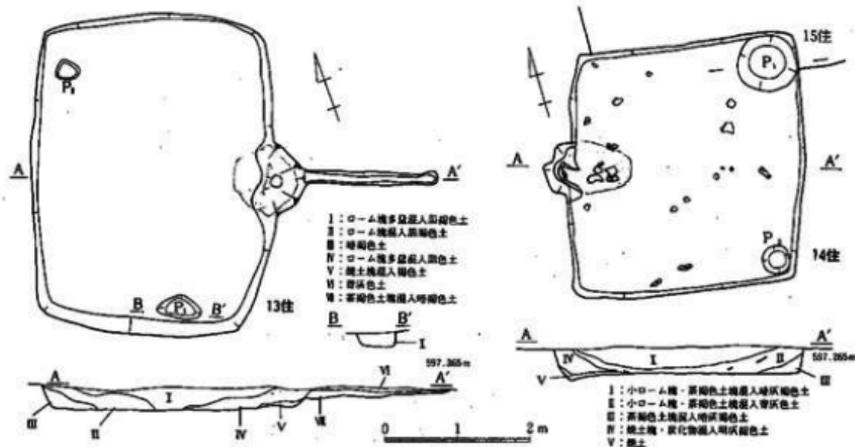
P<sub>3</sub>-107×91×81 P<sub>4</sub>-98×78×71 P<sub>5</sub>-40×  
40×14cm

黄褐色土中に掘り込まれ、壁は直に落ちる。床面は黄色土で、比較的堅硬である。カマドは東壁中央に位置し、煙道が構築されているだけであり、壁を特別掘り込む、袖をつけるなどの構造はもたず、焼土もカマド前にわずかに残るのみであった。又、煙道

先にあるピットは、本遺構に伴うピットではない。

本址には、計5つのピットがあるが、P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は、主柱穴と考えられる。それぞれ2段底で非常に深く、しっかりとしたピットであり、今回調査した柱穴を持つ住居の中でも、これほど明瞭な主柱穴のあるものは例がなかった。又、P<sub>3</sub>からは、炭化物・焼土が検出された。

遺物は、床面からの出土はほとんどなく、わずかに、覆土中より、土師器甕、須恵器杯・蓋・四耳壺等の小片が出土しただけであった。本址の時期はV期にあたる。



第13図 第13・14号住居址

第13号住居址

位置 I地区中央 規模 4.39×3.33m  
 平面形 不整形 主軸方向 N-95°-E  
 ビット P<sub>1</sub>-62×33×20 P<sub>2</sub>-31×27×11cm

カマド側がやや張る不整形のプランを呈す。黄褐色土中に掘り込まれ壁はややなだらかに落ちる。床面は茶褐色土粒が混入する黄色土で、やや起伏をなすものの良好であり、特に中央部は堅緻であった。カマドは東壁中央に壁を掘り込んで構築されている。極めて狭い煙道が2m弱のびるのが特徴的である。カマド内は浅く掘り込まれており泥土が約10cm堆積し、中央には石が1つ据えられていた。

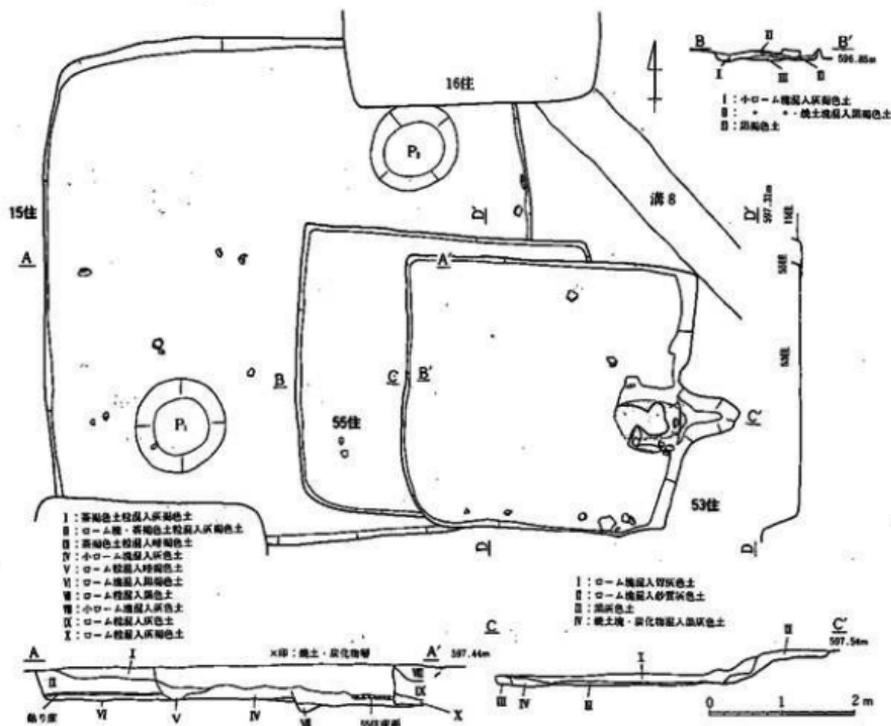
尚、本址からは土師器の壺がわずかに出土しているのみで時期を求めることはできない。

第14号住居址

位置 I地区中央 15号住を切る  
 規模 3.39×3.27m 平面形 正方形  
 主軸方向 N-85°-W ビット P<sub>1</sub>-83×82×15 P<sub>2</sub>-39×37×15cm

黄褐色土中に掘り込まれており、壁は直に落ちる。床面は堅緻な黄褐色土で全般的に平坦をなし良好である。カマドは西壁中央を掘り込み構築されている。短い袖を有し、狭口部からは急に立ちあがる。泥土の厚さは約10cmを測る。

遺物は多く、土師器杯・甕、須恵器杯・四耳壺・甕等がみられた。特にカマド内およびカマド前に集中して出土している。遺物から見ると本址はⅦ期に位置づけられる。



第14図 第15・53・55号住居址

第15号住居址

位置 I地区中央 14・16・55住に切られる

規模 6.93×6.75m 平面形 正方形 ビット

P<sub>1</sub>-197×77×32 P<sub>2</sub>-129×116×35cm

壁はほぼ直に落ち、床面は黄色土で固くはない。

遺物は床面より土師器甕、須恵器杯・蓋・甕等が出土しIV~V期に位置づけられる。

第53号住居址

位置 55住を切る 規模 3.90×3.67m

平面形 不整形 主軸方向 N-100°-E

ビット なし

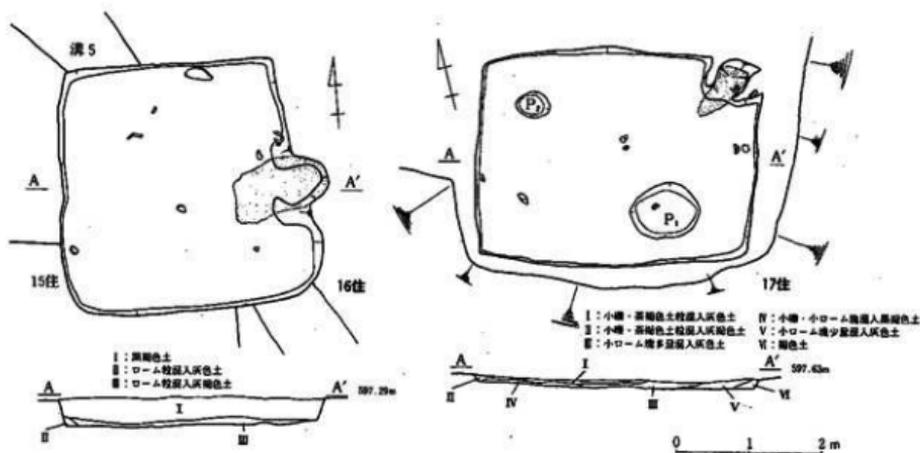
黄褐色土中に掘り込まれ、壁は直に落ちるが東側ではややゆるやかである。床面は堅緻な黄褐色土で平坦をなす。カマドは石芯の袖をもち、焚口部から斜めに立ちあがっている。遺物はカマド周辺より土師器甕が多量出土している他、須恵器杯・甕等がみられ、VII期に位置づけられる。

第55号住居址

規模 3.90×3.88m 平面形 正方形

ビット 不明

床面は堅緻な黄色土の貼床である。遺物には須恵器杯・甕、土師器甕等があり、V~VI期に属する。



第15図 第16・17号住居址

#### 第16号住居址

位置 I地区中央やや北寄り 規模 3.60×3.40  
m 平面形 方形  
主軸方向 N-91'-E ビット なし

15住と溝5を切っている。壁は黄褐色で、比較的直に落ちこんでおり良好な状態である。床面は黄褐色を呈しており堅韌であるがやや起伏がある。カマドは東壁中央やや南寄りに位置し、粘土袖を設けている。

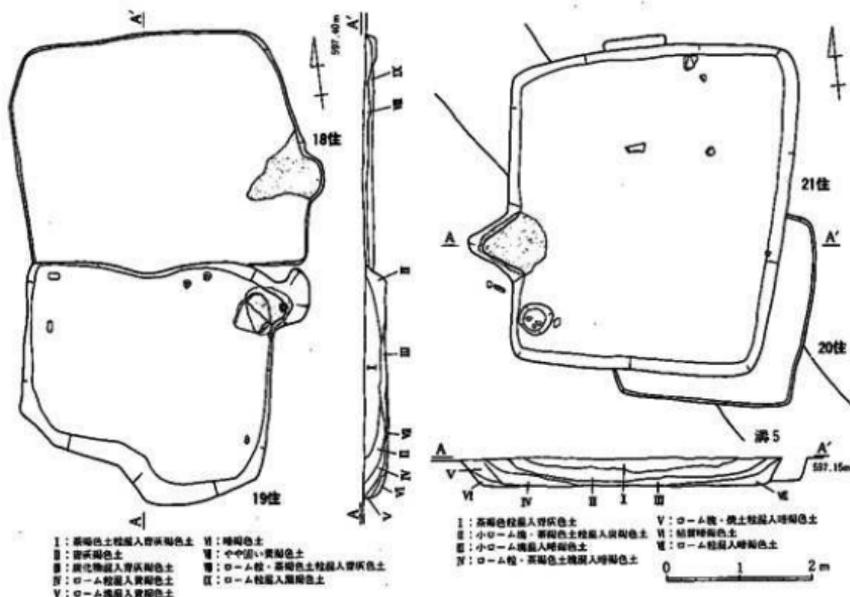
遺物には土器と鉄器がある。土器には土師器壺、須恵器杯、蓋等があるが少量である。鉄器は鋤頭がカマド北壁際より、鎌が床面中央北西寄りからいずれも完形で出土している。遺物からしてⅡ期に属する。

#### 第17号住居址

位置 I地区南側西寄り 規模 3.88×3.01m  
平面形 長方形  
主軸方向 N-18'-E ビット P<sub>1</sub>-97×77×  
32 P<sub>2</sub>-48×36×10cm

盛土際に検出され、周辺を拡げて調査した。壁床ともに黄褐色を呈す。壁はほぼ直に落ち込む。床面は検出面より10cm程で、平坦だが共に軟弱であった。又、北東隅の床面の一部は小礫となっている。カマドは北壁東隅に位置し、住居址中心に向いている。両側に粘土の袖を設けている。

遺物は少ない。灰釉陶器碗・長頸瓶片を中心としており、他には土師器杯・埴等がある。遺物からしてⅡ期に属する。



第16図 第18・19・20・21号住居址

#### 第18号住居址

位置 中央やや西寄り 19住に切られる  
 規模 4.16×3.20m 平面形 不整形  
 主軸方向 N-94°-E ビット 不明

床面は検出面より浅く軟弱な黄褐色土である。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。

遺物は土師灰釉陶器破片等が少量出土した。遺物からしてⅡ期に属する。

#### 第19号住居址

規模 3.40×3.20m 平面形 不整形  
 主軸方向 N-96°-E ビット なし

壁・床とも黄褐色を呈す。カマドは東壁隅にある。カマド前の土器上に流れ込みの大石がある。

遺物は土師灰釉陶器破片等があり、Ⅱ期に属する。

#### 第20号住居址

位置 中央やや東寄り 規模 2.68×2.52m  
 平面形 隅張方形か

溝5を切り21住に大半を切られる落込である。床面は21住床より5 cm 高く軟弱な状態であった。

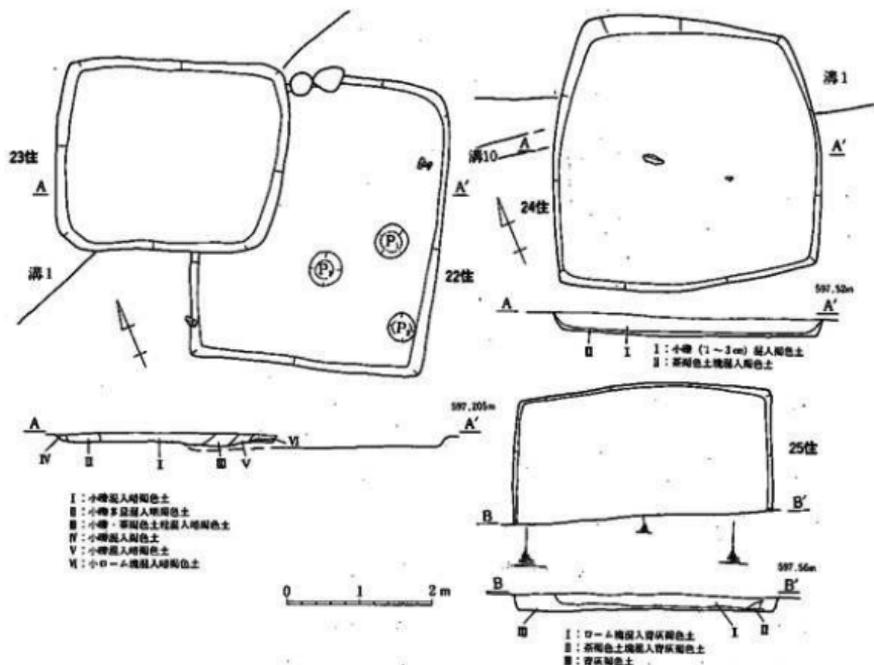
遺物は土師器環・甕小片にすぎない。遺物からしてⅦ期に属する。

#### 第21号住居址

規模 4.48×3.35m 平面形 方形  
 主軸方向 N-78°-W ビット-47×44×15cm

建物址4を切る。床面は黄色を呈す。カマドは西壁中央やや南寄りにある壁掘込カマドである。

遺物はすべてが少片で土師器甕、須恵器環・甕等が少量である。



第17図 第22・23・24・25号住居址

第22号住居址

位置 I地区中央南東 規模 4.03×3.39m  
 平面形 方形 ビット P<sub>1</sub>-47×43×12  
 P<sub>2</sub>-47×44×7 P<sub>3</sub>-39×38×18cm

床面は小礫混の黄色土で軟弱。遺物は土師器甕、須恵器蓋・甕片等が少量ある。VI~VII期に属する。

第23号住居址

規模 3.15×2.59m 平面形 隅丸方形

床面は22住と同じ。むしろ堅穴状遺構か。遺物は土師器杯、須恵器甕片等が少量あり、Ⅶ期に属する。

第24号住居址

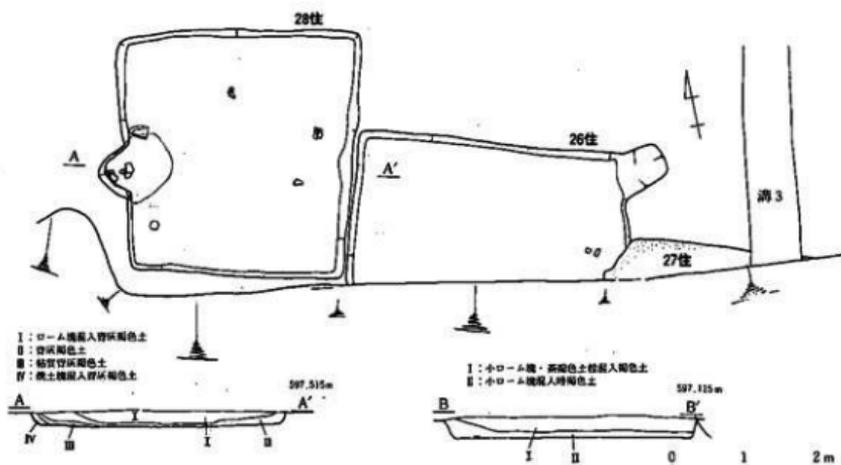
位置 I地区中央南西 規模 3.72×3.69m  
 平面形 不整形 ビット なし

床面は小礫を含む黄褐色土で比較的良好。遺物は土師器甕、須恵器杯・甕・長頸壺等が少量ある。遺物からしてⅦ期に属する。尚カマドは見当らない。

第25号住居址

規模 3.57m×? 平面形 方形か

遺物は土師器、灰釉陶器碗片等が少量出土した。遺物からしてⅦ期に属する。



第18図 26・27・28号住居址

#### 第26号住居址

位置 I地区南側中央 住居址南半分ほど盛土中、

27住にわずかに切られる。

規模 3.82m×? 平面形 方形

ビット なし

砂質黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。床面は黄褐色土で比較的良好である。カマドは検出範囲内では確認されなかった。住居址北東隅の突出部は、ゆるやかに検出面より住居址へ落ちこんでいる。その遺構が住居址に伴うものか断定することは困難であった。

遺物は、床面より土師器甕・小形甕、須恵器杯・甕・長頸甕が出土している。時期は、VII期にあたる。

#### 第27号住居址

砂質褐色土中に灰褐色の覆土を持つ遺構として検

出されたが、住居址の大部分が盛土中のため一部プランを検出したのみで、調査はしていない。

#### 第28号住居址

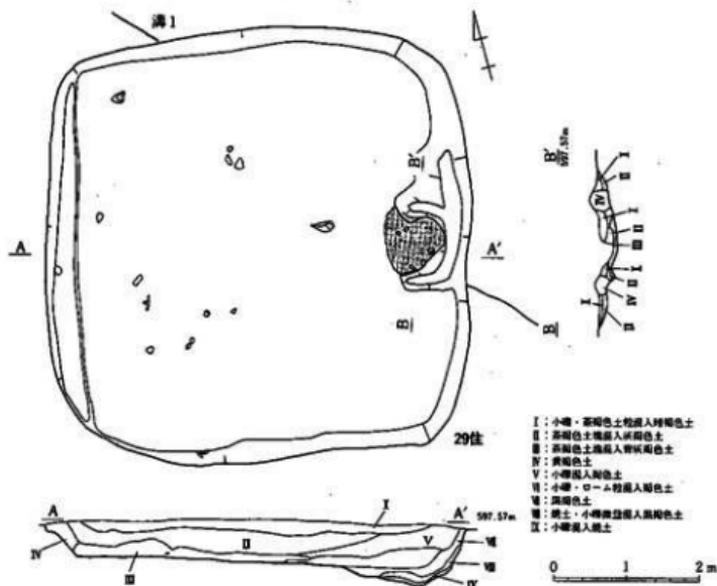
位置 同上 規模 3.44×3.07m

平面形 正方形 主軸方向 N-77°-W

ビット なし

砂質黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。床面は黄褐色土で、中央部は固くしまっているが、他は軟質である。カマドは西壁ほぼ中央に位置し、壁を掘り込んでおり両袖を持つ。北側袖のみ、石芯としている。又住居址南東隅、カマド北側に、炭化物がみられた。

遺物は、カマド内より土師器甕、須恵器甕が、又床面より土師器甕、須恵器杯・蓋・長頸甕・甕が出土している。本址の時期はVII期にあたる。



第19図 第29号住居址

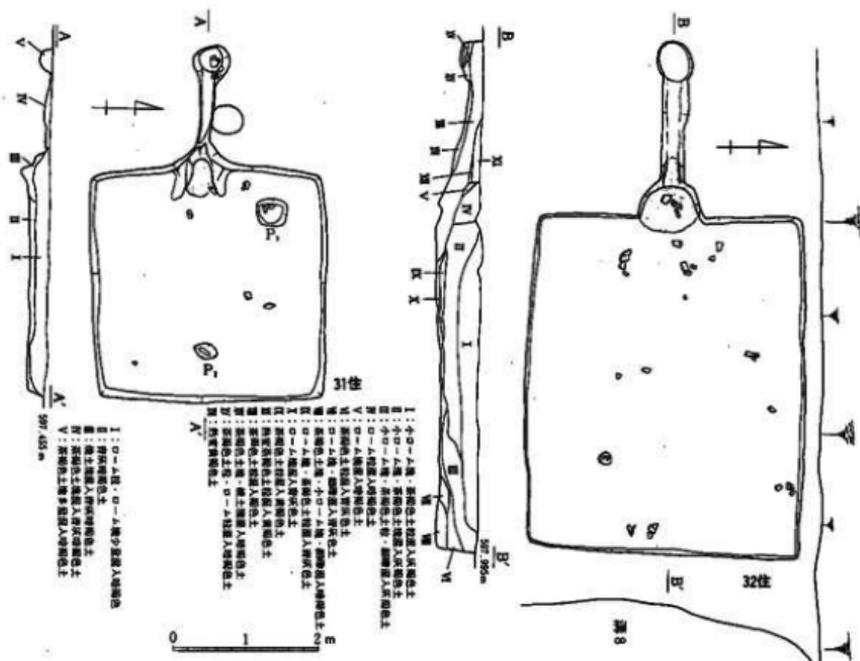
第29号住居址

位置 I地区中央南部 規模 6.37×5.91m  
 平面形 隅丸方形 主軸方向 N-106°-E  
 ビット なし

北東部が溝1上部に掘り込まれている為、この周辺の覆土中には特に礫が多く埋設時の影響を示している。プラン検出も困難であり、小礫の入る褐色土のやや軟弱な床面を追い確認した。壁は溝上の部分が礫を露出させており、一番高い東部で46cm、低い西側では34cmであった。この西壁には床面より約20cmのレベルでテラス状の平坦部が見られる。幅は約30cmと狭く、床面同様固さは見られない。カマドは東壁中央に位置している。周囲の壁が礫の為、

黄褐色土を用いて袖部をつくっている。焼土は当初全く検出できず、カマド断面作成時によりやく検出した。焼土の量は狭い範囲ではあるが比較的厚く、最厚部で約25cmであった。このことより使用時の火床は周囲より20~25cm程低く設けられ、又、高い壁の状況、袖部に焼土が見られない点から、あるいは煙道を設けて使用していたのではないかと推察する。ただ煙出部分も溝1中にあったものとする、廃棄され、埋設時に礫の流れ込み等によって大きく破壊されてしまったものであろう。

遺物は覆土上層より下層まで一様に出土した。比較的多く、カマド内より土師器壺、床面からは土師器壺・坏・小形甕・甕、須恵器坏・蓋・甕等である。これらより本址の時期はⅧ期とする。



第20図 第31・32号住居址

第31号住居址

位置 I地区中央 規模 3.26×3.23m  
 平面形 正方形 主軸方向 N-79'-W  
 ビット P<sub>1</sub>-42×37×10 P<sub>2</sub>-34×21×12cm

小形の住居址である。壁、床面とも黄褐色を呈す。壁はほぼ直に落ち込む。床面はほぼ平坦で比較的良好である。カマドは西壁中央に位置し粘土袖を設ける。煙道跡には本社より古いビットを検出した。

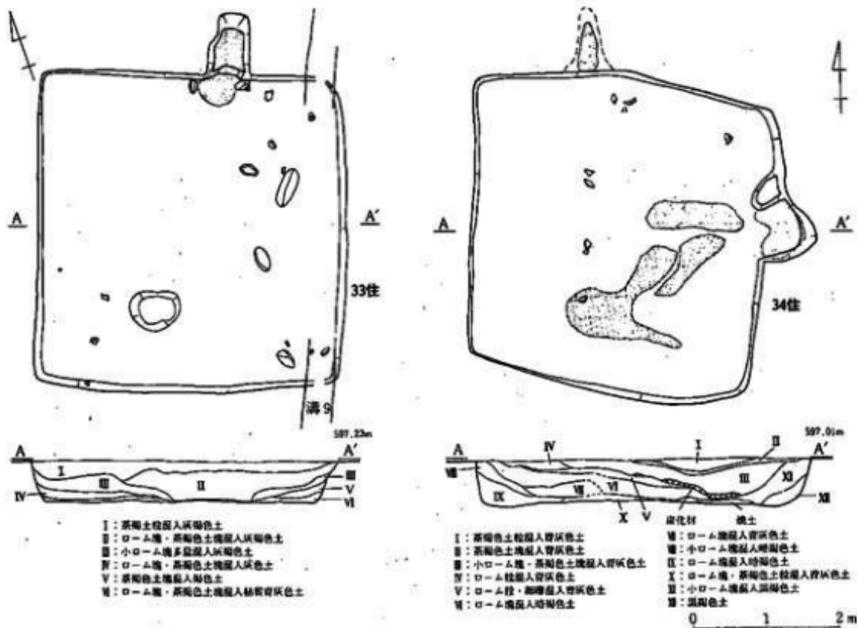
遺物は煙出部から土師器甕が出土しており、他に床面より須恵器杯等がある。遺物からしてVI期に属する。

第32号住居址

位置 I地区北側東寄り 規模 4.64×3.87m  
 平面形 長方形 主軸方向 N-88'-W  
 ビット なし

黄褐色土中に掘り込まれている。壁は直に落ち込んでおり良好な状態であった。床面は検出面より60cm程で堅硬である。カマドは西壁中央に位置し、長い煙道を持つ。

遺物はカマド付近より土師器・須恵器甕片が多く、杯等は少ない。遺物からしてVII期～IX期に属す。



第21図 第33・34号住居址

第33号住居址

位置 I地区南東 規模 4.39×4.24m  
 平面形 正方形 主軸方向 N-18°-E  
 ビット 70×52×40cm

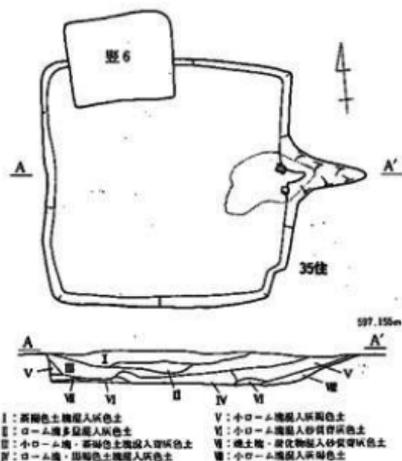
本址東部分は溝9に切られる。壁はほぼ垂直に落ち、圓い。床面も黄色土で堅固で平坦である。カマドは北壁の中央やや東寄りであり、カマドの両袖に一對の石があり、石芯であろう。カマド規模は巾60cm、奥行きは80cmである。床面には数個の石と1ヶのビットがある他は柱穴等はない。遺物はカマド内から須恵器杯片の他、土師甕片が多数出土した。この他床面から須恵器長頸壺・蓋などがあり、これらにより時期はVII期としたい。

第34号住居址

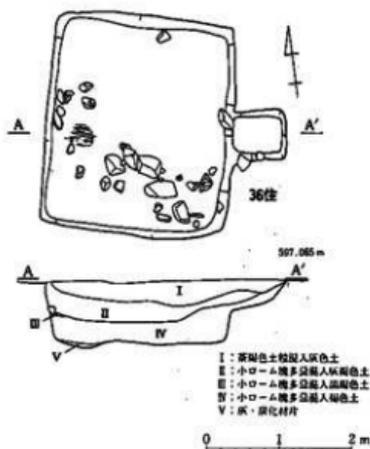
位置 I地区北東 規模 4.40×4.05m  
 平面形 正方形 主軸方向 N-94°-E  
 (II) N-3°-E ビット なし

壁は垂直に60cmと比較的高く、作り直しをしたためカマドは北壁と東壁にある。床面も二層にあり、上下ともほぼ良好でしっかりしている。上面は下面より10cm高い。中央より東側にかけて炭化材<sup>(1)</sup>が斜めに層をなして存在した。北壁のカマドは旧時のもので、煙道部分だけ残り、東壁のカマドは焚口が60cmと広い。出土遺物は須恵器、土師器の礎他で少ないが、これらにより本址の時期はVI期としたい。

(1) 藤原義氏氏分析によると、ニシンの炭化材、カバノ科の炭化片等の高炭素が多いとの結果である。



- I : 茶褐色土粒混入灰色土  
 II : ローム層多量混入灰色土  
 III : 小ローム塊・茶褐色土塊混入灰色土  
 IV : ローム塊・茶褐色土塊混入灰色土  
 V : 小ローム塊混入茶褐色土  
 VI : 小ローム塊混入砂質灰色土  
 VII : 黄土層・黄区物混入砂質灰色土  
 VIII : 小ローム塊混入茶褐色土



- I : 茶褐色土粒混入灰色土  
 II : 小ローム塊多量混入茶褐色土  
 III : 小ローム塊多量混入茶褐色土  
 IV : 小ローム塊多量混入茶褐色土  
 V : 灰・炭化材料

0 1 2m

第22図 第35・36号住居址

### 第35号住居址

位置 I地区東 竪6に切られる。

規模 3.46×3.43m 平面形 正方形

主軸方向 N-89°-E ビットなし

黄褐色土中に茶褐色土粒混入灰色の覆土を持つ遺構として検出された。壁はほぼ直に落ちる。床は黄色土で、堅硬である。カマドは東壁ほぼ中央に位置し、壁を深く掘り込み、煙道がのびており、袖はない。

遺物は、カマド付近を中心に、土師器小形甕、須恵器杯・甕等が出土している。本址の時期はVI期にあたる。

〔1〕陶磁器の分析によると、灰本材料種(イボ科)のアンチミアン等種の組成分の多いものの白色の灰であるとの結果をえた。

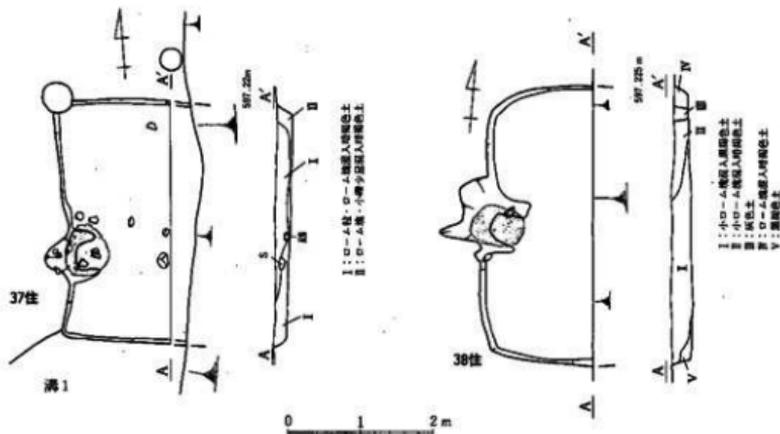
### 第36号住居址

位置 I地区北東隅 規模 3.03×2.62m

平面形 長方形 ビットなし

本址はI地区の他の住居より掘り込み面が高く鉄分を多く含む灰色土中に掘り込まれ、壁は直に落ちる。床面は、黄色土で、軟質である。プランの南側半分、覆土上層より中層にかけ、20~50cm大の火を受けた石が数多く見られた。又西側床面より白色の灰<sub>(1)</sub>が多量に検出されている。プラン東側突出部は、床面より一級高いが、土質等が同じため本遺構のものである。

遺物は、覆土から床面にかけ内耳土器片が多くみられた。又、口縁部肥厚の白磁碗の小片も出土している。尚、本遺構は、V地区竪29と類似する点が多い事から、竪穴状遺構の範疇と考えたい。時期は、中世である。



第23図 第37・38号住居址

#### 第37号住居址

位置 I地区東端 東半分は用地外  
 規模 3.33m×? 平面形 方形か  
 主軸方向 N-83°-W ビット 不明

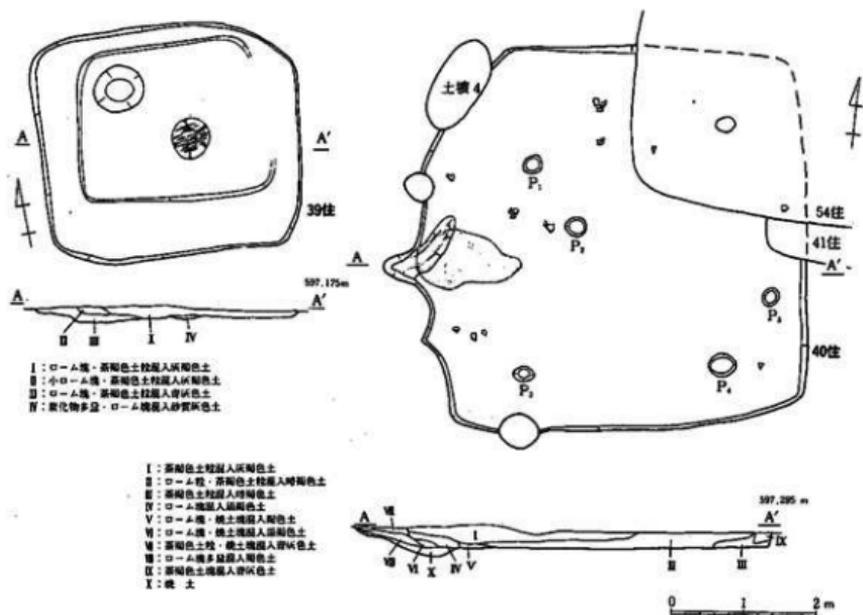
小形の住居址である。黄褐色土中への掘り込みであるが、南側は溝1上に乗っておりその部分は溝1の礫が覆土中に含まれている。壁は黄褐色を呈し、ほぼ直に落ち込むが軟弱である。床面は検出面より15cm程で平坦だが軟弱であった。カマドは西壁中央やや南側に位置する。粘土袖を設けているが、低くしっかりしたものではない。焚口部より壁に向かってゆるやかに傾斜している。遺物は少なく、土師器杯・甕、須恵器皿等が出土している。時期は遺物からしてI期に属する。

#### 第38号住居址

位置 I地区東端 東側用地外  
 規模 3.84m×? 平面形 隅丸方形か  
 主軸方向 N-94°-W ビット 不明

黄褐色土中に掘り込まれている。壁は直に落ち、床面は平坦である。共に黄褐色を呈し軟弱であった。カマドは西壁中央に不定形に掘り込まれて構築されている。粘土袖を設けているが37住と同様にしっかりしたものではなかった。北側には楕円形の石が立った状態でみられた。

遺物は比較的少ない。土師器杯・小形甕・甕が出土している。遺物からして37住と同様I期に属する。



第24図 第39・40号住居址

第39号住居址

位置 I地区東南端 規模 3.59×3.24m

平面形 正方形 ビット 70×63×20cm

他の住居址とは趣がやや異なるもので、壁は浅くゆるやかに落ち、やや固い黄褐色土の床があり、更に10cm程下って、2.6×2.2mの方形の落込みとなる。中央には径55cmの範囲で炭化物を多量に含む砂質灰色土があり、炭化物は完全燃焼したワラ状の物である。他に北寄りにビットがある。本址は一応住居址として扱ったが、青灰色土層の存在から、中世の竅穴状遺構とも考えられる。遺物は須恵器片等多少の出土はあったがいずれも覆土からであり、流れ込んだものと思われる。

第40号住居址

位置 I地区東中央、54・41住、土壇4に切られる。

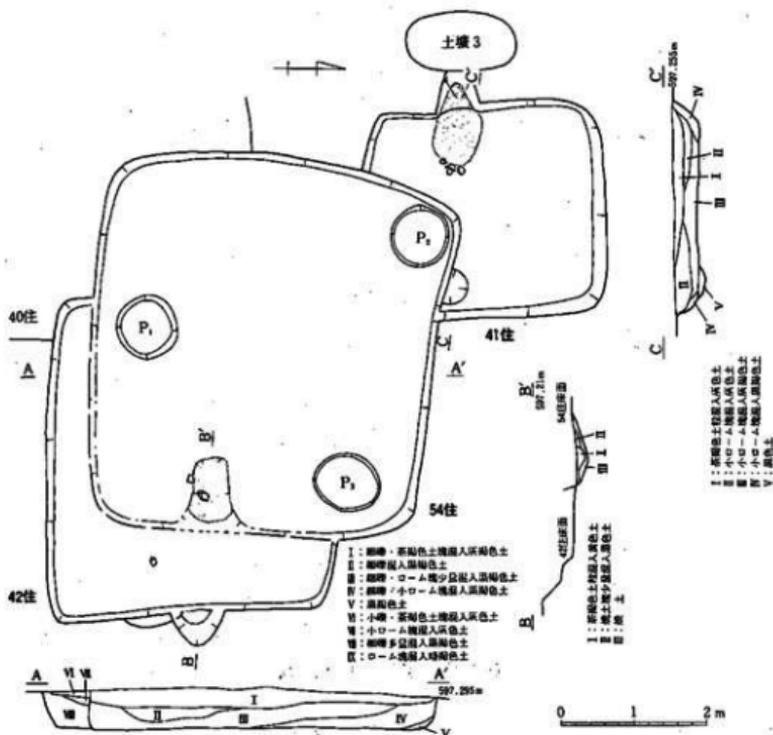
規模 5.36×5.29m 平面形 ほぼ正方形

主軸方向 N-95°-W ビット P<sub>1</sub>-30×27×

10 P<sub>2</sub>-30×27×22 P<sub>3</sub>-30×22×21.5

P<sub>4</sub>-39×34×7 P<sub>5</sub>-27×23×7.5cm

54住、41住との切り合いでプランがつかみにくく、本址の床面を検出した時点でようやく54住、41住の切り合いを捉えた。床面は褐色土で水平ではあるが軟弱である。カマドは西壁中央にあるが、片袖状で異形であり、その前面には1.5m×80cmの範囲に焼土があった。ビットの中には灰色土を含んだものもあり本址に伴わないと思われるP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>などもある。時期については出土土器からI-II期としたい。



第25図 第41・42・54号住居址

第41号住居址

位置 I地区中央東寄り 規模 4.44×4.02m  
 平面形 正方形 主軸方向 N-94°-W  
 ビット なし

壁は直に落ちる。床は黄色土で軟質。カマドは壁を掘り込み構築。遺物は覆土上層より須恵蓋片多く出土。時期はVI期にあたる。

第54号住居址

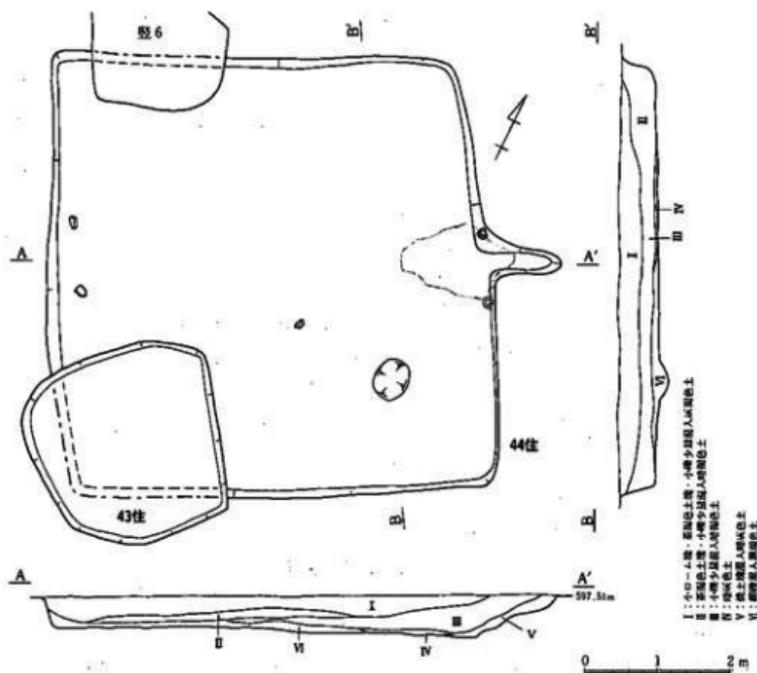
壁はなだらかに落ち床は黄色土で軟質。カマドは壁を掘り込み構築。遺物はカマド付近より土師器甕等出土。時期はV~VI期である。

規模 5.19×4.77m 平面形 長方形  
 主軸方向 N-94°-E ビット P<sub>1</sub>-88×85×57 P<sub>2</sub>-85×80×47 P<sub>3</sub>-94×79×42cm

第42号住居址

規模 3.31×2.96m 平面形 正方形  
 主軸方向 N-88°-E ビット なし

壁は直に落ちる。床は黄色土、42住と同色で床の段差もなく切り合い検出困難。カマド甕土検出面を床とした。土師坏・甕より時期はIX~X期である。



第26図 第43・44号住居址

第43号住居址

位置 I地区東南 44住を切る

規模 2.66×2.54m 平面形 不整形

ピット なし

44住上にあるが、プランはわかりにくかった。壁は直に落ち込み、壁高は低く20cmである。床面は黄褐色土でしっかりしていない。ピット、甕土、カマドもなく遺物も僅少であるので、堅穴状遺構と考える。本址の時期は出土遺物からみてVI期と考えている。

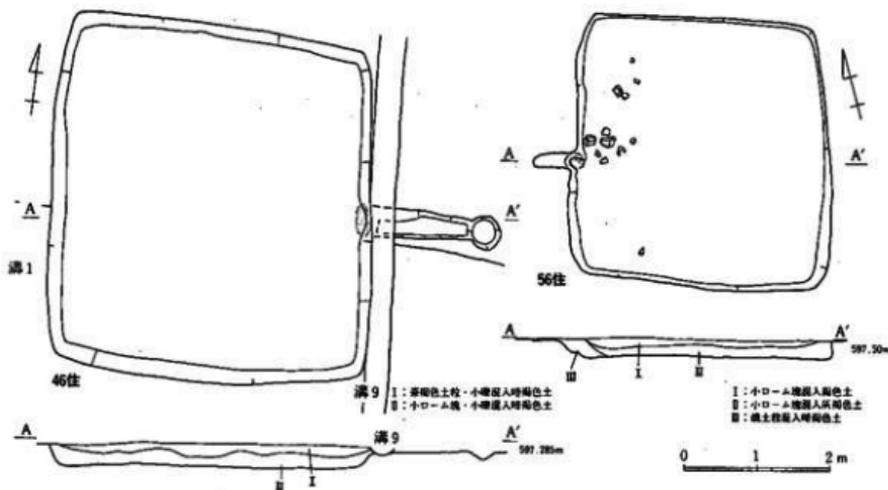
第44号住居址

位置 I地区東南、43住、竪3に切られる。

規模 6.20×6.03m 平面形 正方形

主軸方向 N-99°-E ピット56×47×23cm

溝1上にあり、プランが明瞭に出ず、当初2軒かとも思われた。壁はほぼ垂直に落ち、床面は判然とせず、細砂礫を含む黄褐色で僅かに東側に傾斜する。カマドは東壁中央にあり、煙道は1mである。カマドの両側には意識的に置かれたように須恵器の坏が1対あった。カマドの南側1.5mには浅いピットがあるだけで、他に柱穴等はない。43住よりは10cm低い。また床面の細礫は溝1にあるためであろう。遺物は前記坏の他須恵器、土師器壺片等で、これらから時期をV期に位置づけたい。



第27図 第46・56号住居址

#### 第46号住居址

位置 I地区東側44住北東 溝1を切り溝9に切られる 規模 4.87×4.45m  
 平面形 正方形 主軸方向 N-90°-E  
 ビット なし

北側で黄褐色土中に、南側では溝1の砂利層に掘り込まれており、覆土中には溝1の小礫の混入が多い。特に南東隅からカマド近くにかけて多量の礫が流れ込んでいた。床面は黄褐色で平坦ではあるが小礫が多量に混入し良好な状態とはいえなかった。カマドは東壁中央に設けられている。煙道は溝9に切られているものの比較的良好な状態で検出されたが袖は確認されなかった。カマド焚口部は特に掘りくぼめられている様子は窺えず、黄土もわずかに認められた程度である。

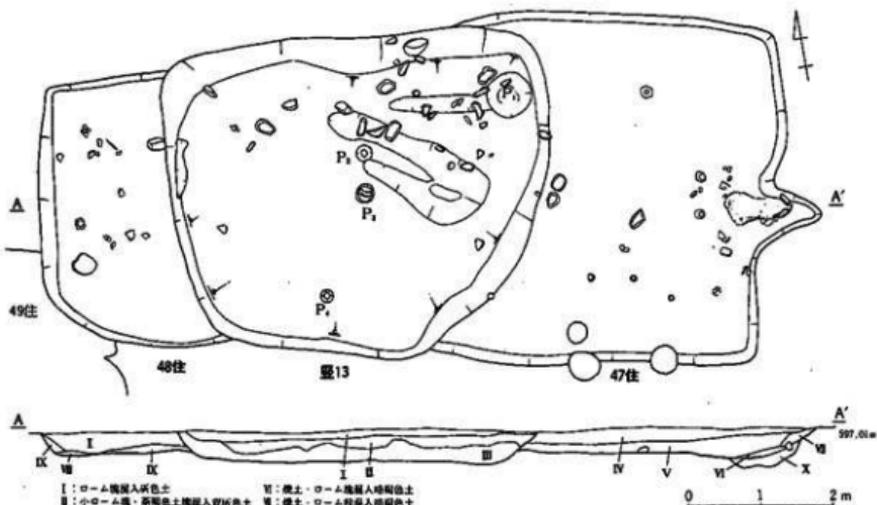
遺物には須恵器・甕・壺、土師器等がありVII期に位置づけられる。

#### 第56号住居址

位置 I地区中央南側 規模 3.70×3.52m  
 平面形 正方形 主軸方向 N-70°-W  
 ビット なし

黄褐色土中に掘り込まれており、覆土もほぼ同色を呈するため検出は困難であった。壁はほぼ直に落ち特に北側で顕著であり、壁高は約25cmを測る。床面は褐色土であり、固くはないが平坦であった。カマドは西壁中央に設けられている。幅の狭いカマドで煙道は焚口部から一旦斜めにたちあがってからのびている。またカマド北側には短かい袖状のものが見受けられたが、積極的に袖と見なせるものではなかった。

遺物には須恵器・甕、土師器等があり、特にカマド周辺には土師器等が集中してみられた。本址は遺物からV~VI期ごろに位置すると思われる。



I: ローム地層人埴色土  
 II: 小ローム地層・赤褐色土塊混入埴色土  
 III: 赤褐色土塊混入埴色土  
 IV: 赤褐色土塊混入埴色土  
 V: 小ローム地層少量混入埴色土

VI: 埴土・ローム地層人埴色土  
 VII: 埴土・ローム地層人埴色土  
 VIII: 小ローム地層人埴色土  
 IX: ローム地層人埴色土  
 X: 埴土少量混入埴色土

第28図 第47・48号住居址、竪穴状遺構13

#### 第47号住居址

位置 II地区北東部 西側を竪13に切られる

規模 4.85m×? 平面形 方形

主軸方向 N-108°-E ビット 不明

黄褐色土中に掘り込まれ壁は黄褐色を呈しほぼ直に落ち込む。東側に本址を切るビットがある。床面は堅緻な粘質黄褐色土で良好な状態であった。カマドは東壁中央、壁を掘り込み石2ヶが左右に配されている。

遺物は土師器杯・壺が多く、他に土師器甕、須恵器杯・甕・四耳壺・長頸壺・短頸壺等が出土している。時期は遺物からみてIX期に属すると思われる。

#### 第48号住居址

位置 II地区中央やや東寄り 規模 3.84m×?

平面形 不整形方形か ビット 不明

覆土は47住と同色暗褐色土である。南西部で49住を切り、東半分は竪13に切られている。壁・床面は

共に黄褐色土で軟弱である。

遺物は少ない。覆土下層及び床面より土師器杯・壺・甕・羽釜、須恵器杯・甕・壺が出土している。遺物からみて、本址はIX-X期に属する。

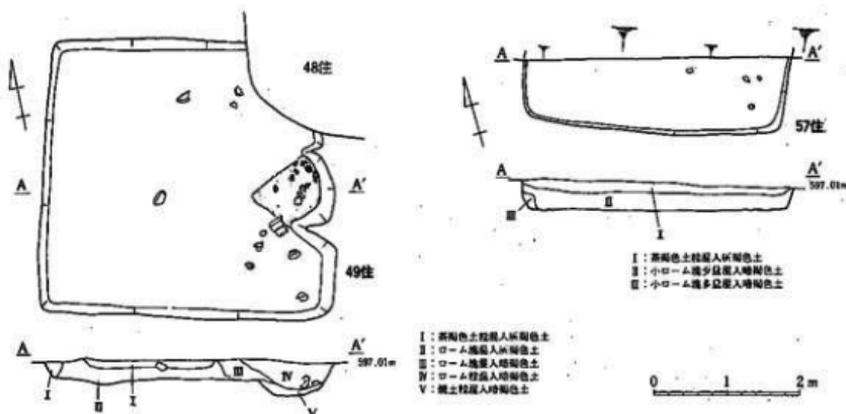
#### 竪穴状遺構13

位置 中央やや東寄り 規模 5.40×4.20m

平面形 楕円形に近い ビット P<sub>1</sub>-66×66×30 P<sub>2</sub>-24×18×10 P<sub>3</sub>-14×22×20 P<sub>4</sub>-18×16×26cm

覆土は概して礫を含む灰色土である。床は緩傾斜し、床面は中央部がやや凹み非常に堅緻である。覆土中の石は落ち込んだものと思われる。

遺物は他の竪穴状遺構に比べ多いがほとんどが47、48住のものと思われる。土器片と他には中国龍泉窯製のぎ蓮弁の青磁碗1片と北宋銭等が出土している。灰色土の覆土・遺物からして中世に属すると思う。



第29図 第49・57号住居址

第49号住居址

位置 II地区中央東側 北東隅を48号住に切られる  
規模 4.12×3.81m 平面形 方形  
主軸方向 N-108°-E ビット なし

壁は黄褐色土であり、ほぼ直に落ち込む。南壁中央から北東隅にかけて1cm大の小礫が混入している。床面も同色でありやや固く、特に中央部では比較的良好な状態であった。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。本址構築の際に壁の一部を袖として利用できるように作られている。この様な傾向は他の住居址にも窺うことができるが、そのうちでも一番顕著なものであった。又、カマド前は深く落ち込んでおり黄土が厚く地覆していた。

遺物はカマド内から土師器甕、カマド前およびカマド南際からは土師器内黒塊、杯が5個体埋出土している。カマド周辺の覆土中層から床面上にかけて土師器杯・埴類を中心として比較的多い。その他に

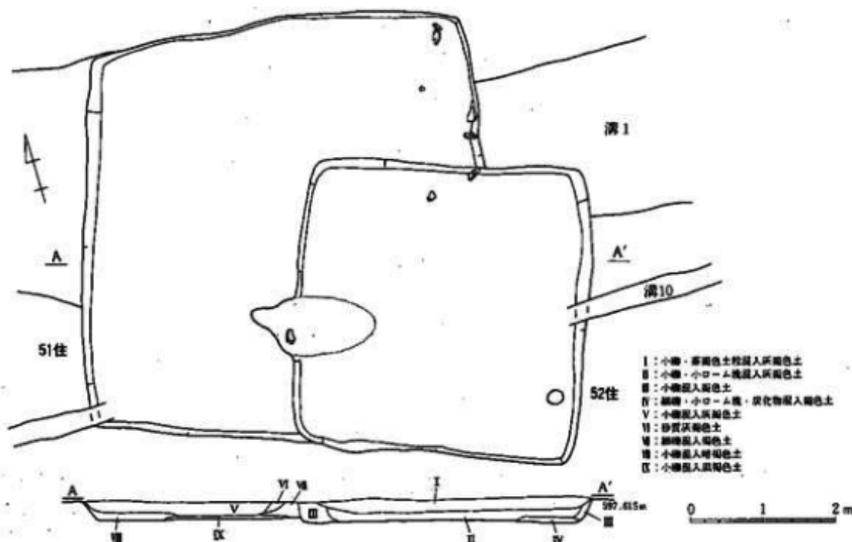
は土師器皿・小形甕、須恵器四耳壺・壺が出土している。遺物からして本址はIX期に属すると思われる。

第57号住居址

位置 II地区北側東寄り 規模 3.67m×?  
平面形 方形か ビット 不明

北側に生活道路があり本址は南側 $\frac{1}{3}$ 程度しか検出調査できなかった。黄褐色土中に掘り込まれ、暗褐色のきめ細かな土が落ち込んでいる。壁・床面とも黄褐色を呈し、壁は直に落ち良好である。床面も平坦で堅固な状態であり、比較的良好である。東側床面上に甕土がみられ、北側は盛土中に広がる様子からカマドは東壁にあるものと思われる。

遺物は少ない。土師器杯・埴・甕、須恵器長頸壺・壺片が出土している。以上の遺物からして本址はIV期に属すると考えられる。



第30図 第51・52号住居址

第51号住居址

位置 I地区中央南西寄り 52住・溝10に切られ、

溝1を切る 規模 5.72×5.47m

平面形 方形 ビット なし

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。又、東・西壁で溝1を切った面は小礫が混入する。床面は、ローム塊混入黄色土で比較的堅緻である。カマドは当初、石が東壁やや北側にあり袖つきのカマドであると予想されたが、焼土・掘り込みも見あたらず不明であった。

遺物は、住居址北東部より、口縁部に特徴のある須恵器鉢が出土。その他覆土下層から床面にかけて、須恵器杯、土師器甕が出土している。本址の時期はⅢ期である。

第52号住居址

位置 同上 51住・溝1を切る 規模 4.06×3.90m

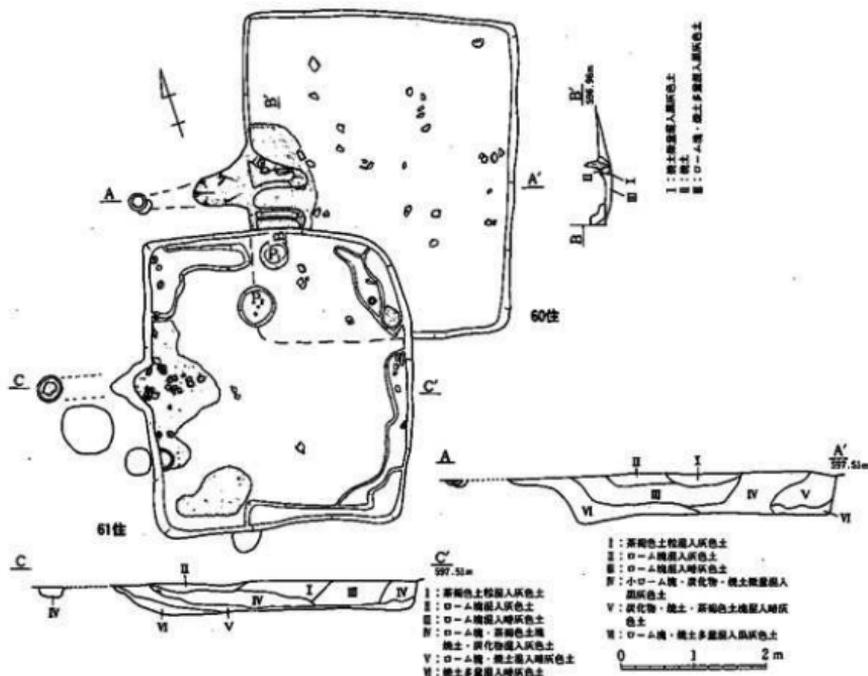
平面形 正方形 主軸方向 N-76°-W

ビット なし

黄褐色土中に小礫混入黒褐色の裂土を持つ遺構として検出された。壁はほぼ直に落ちる。床は黄色土で比較的堅緻である。カマドは西壁中央やや南よりに位置し、壁を浅く掘り込み、袖はない。

遺物はほとんどなく、須恵器杯、土師器小形甕・甕がわずかに出土しただけであった。本遺構の時期は、Ⅶ期にあたる。





第32図 第60・61号住居址

第60号住居址

位置 III地区北東寄り、南西隅を61住に切られる  
 規模 4.43×3.76m 平面形 長方形  
 主軸方向 N-66°-W ビット なし

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。

床面は黄色土で比較的良好である。カマドは、西壁中央に位置し壁を掘り込み、煙道がのびており、両袖を持つ。北側袖は石芯としているが、南側袖は石を用いてはならず、不明確であった。

遺物は比較的多く、住居址全域にわたって覆土上層から床面にかけ須恵器杯・蓋、土師器甕等が出土している。又住居址南東部より砥石、煙出口に、完形の須恵器蓋が裏がえして出土している。時期はVII期にあたる。

第61号住居址

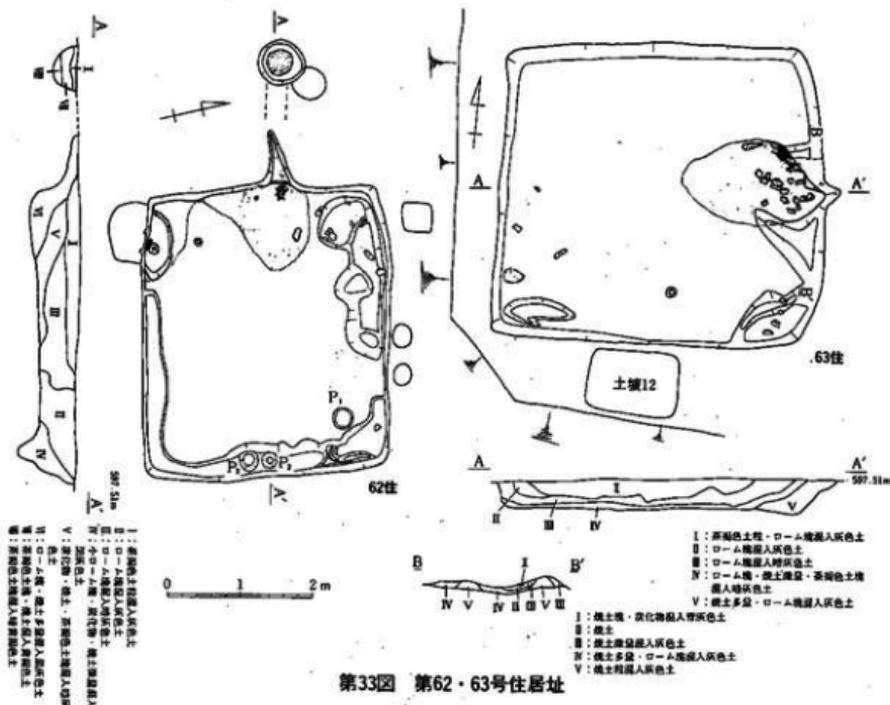
位置 III地区中央東寄り、60住・建13を切る  
 規模 4.10×3.69m 平面形 長方形  
 主軸方向 N-69°-W

ビット P<sub>1</sub>-39×38×12 P<sub>2</sub>-52×51×15cm

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。

床面は黄色土で良好である。浅い周溝が東・南・北に検出された。カマドは西壁中央に位置し、壁を掘り込み煙道は浅い。住居址東側北寄りと周溝内に、鏡土がみとめられた。

遺物は、北西床面×地点より青銅製袴帯が、北東側より土師が出土している。その他にカマド付近から土師器杯・甕・小形甕、須恵器杯・蓋等多量に出土している。時期はVII期にあたる。



第33図 第62・63号住居址

第62号住居址

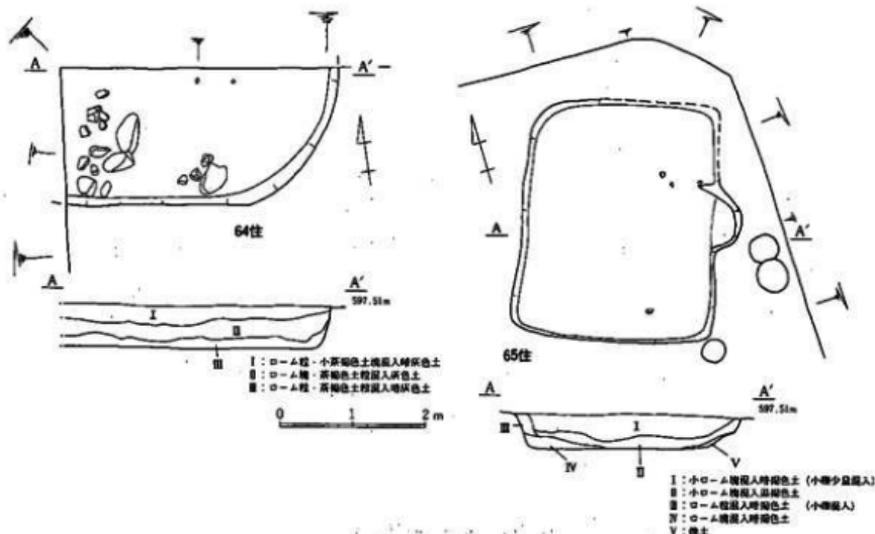
位置 III地区南東隅 建12を切る 規模4.02×3.19m 平面形 長方形 主軸方向 N-77°-W ビット P<sub>1</sub>-29×28×7 P<sub>2</sub>-21×22×20 P<sub>3</sub>-28×26×24cm

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。床面は黄色土で堅緻である。又、周溝が東・南・北に検出された。カマドは西壁中央に位置し壁を掘り込み煙道がのび煙出口が建物址13の柱穴を切る。南西隅の周溝は深く落ち込み多量の焼土を含んだ黒灰色土であり、火と関係のある施設と考えられる。遺物は南東隅周溝内より土製紡錘車が、南西隅周溝からは土鍾が出土している。その他の遺物は覆土下層から床面にかけて比較的多く、土師器杯・壺・甕・小形甕、須恵器杯・蓋・短頸壺・甕等が出土している。時期はVI期にあたる。

第63号住居址

位置 III地区南西隅 規模 4.49×4.12m 平面形 正方形 主軸方向 N-85°-E ビット なし

黄褐色土中に掘り込まれ、壁はほぼ直に落ちる。床面は黄色土でやや軟質である。カマドは、東壁中央に位置し、壁を浅く掘り込んでおり、両袖をもつ。煙道は見あたらなかった。住居址南東隅に落ち込みがある。遺物は床面上には少なく、カマド内からカマド前にかけて土師器甕が、南東隅落ち込みから、須恵器甕片・坏が出土しているのみで、その他の遺物は、覆土下層より、須恵器杯・蓋・短頸壺・四耳壺等の出土をみる。時期はVI期にあたる。



第34図 第64・65号住居址

#### 第64号住居址

位置 IV地区北西隅 $\frac{3}{4}$ 程は盛土中・規模・平面形  
主軸方向・ビット 不明

覆土は灰色土で壁はほぼ直に落ち床面近くで急に内側に入る。検出された部分から推定して平面形は隅丸方形ないし楕円形と思われる。床面は全体的によい状態で把えることができ、平坦で堅緻な黄褐色砂質土である。床面には赤い鉄分が沈殿しており、南壁際に河原石が並べられたような状態でみられた。

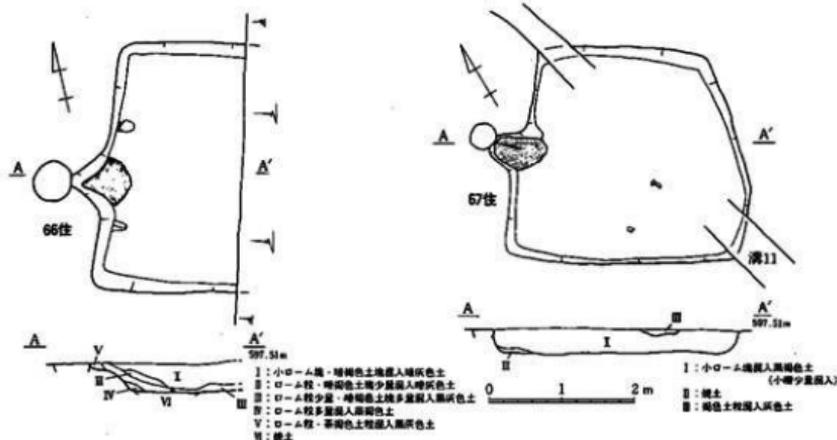
遺物は非常に少なく、土器片と銅銭がある。土器は覆土上層より青磁の高台部が出土している。銭は北宋銭・元豊通宝である。灰色土の覆土、遺物、銭からして時期は中世に属すると考えられる。なお本遺構は他の住居址とは異なり、堅穴状遺構と分類した方がよいと思う。

#### 第65号住居址

位置 IV地区北東隅 規模 3.24×2.68m  
平面形 長方形 主軸方向 N-107-E  
ビット なし

壁はほぼ直に深く落ち込み、黄褐色を呈し小礫が混入している。北東隅の一部はプランが良くわからなかった。床面も黄褐色であり平坦で固く良好である。カマドは東壁中央を掘り込み、北側は壁の一部を内側に少し出して袖の役割をはたしている。黄土がカマドの部分のみに比較的狭い範囲で見られた。煙道などは見当らなかった。

遺物は少ない。覆土下層東側よりいわゆる甲斐型の土器器坏が出土している。その他には覆土上層から下層にかけて須恵器坏・蓋・短頸壺・甕・四耳壺、土器器坏等が認められた。時期はV期からVI期である。



第35図 第66・67号住居址

#### 第66号住居址

位置 IV地区北東 東側盛土に隠れる

規模 3.50m×? 平面形 方形か

主軸方向 N-76°-W ビット なし

黄褐色土中に掘り込まれ覆土は暗灰色を呈し検出は容易であった。壁はほぼ直に落ちる。床は堅緻な黄色粘質土で全般的に平坦で良好である。カマドは西壁中央に掘り込んで構築されている。南側には袖石として用いられたと思われる石が1つあったが、北側に袖は確認できなかった。またカマド前部は浅く掘り込まれ黄土の堆積がみられる。

遺物は少なく、カマド北側から出土した宍形の土師器小形甕の他、須恵器甕、土師器杯・甕片がみられる。遺物から本址はⅦ期に属すると思われる。

#### 第67号住居址

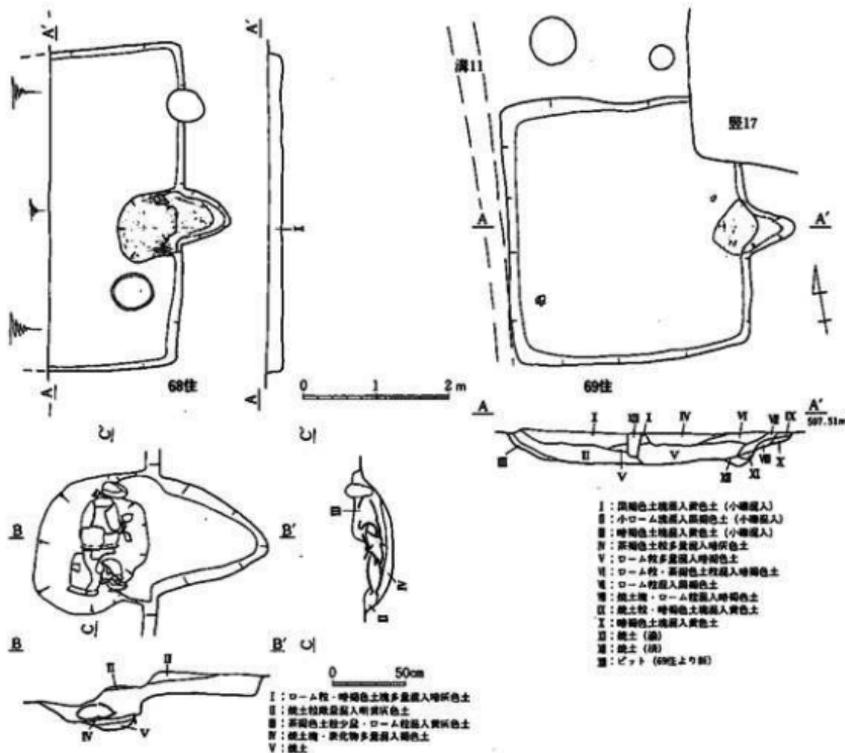
位置 IV地区北東 溝11に切られる

規模 3.31×3.03m 平面形 不整形方形

主軸方向 N-63°-W ビット なし

北側は砂利層に掘り込んであり、そのため覆土中には小礫が混入し特に混入が多かった北東隅ではプランの検出が困難であった。不整形方形としてとらえたが、むしろ方形を呈す住居であったと考えられる。壁はほぼ直に落ち、床は黄色土でほぼ平坦でありしっかりしている。カマドは壁中央を楕円形に掘り込んで構築されており、北側には短い袖が確認できた。黄土はカマド内で厚さ10cmを測るものの全重量は少ないものであった。

遺物は須恵器杯・甕、土師器甕片がわずかに出土しているのみである。遺物から見て本址はⅦ期に属する。



第36図 第68・69号住居址

第68号住居址

位置 IV地区西側やや北寄り、西約半分が盛土中  
 規模 4.50m×? 平面形 方形か  
 主軸方向 N-90°-E ビット 59×52×10cm

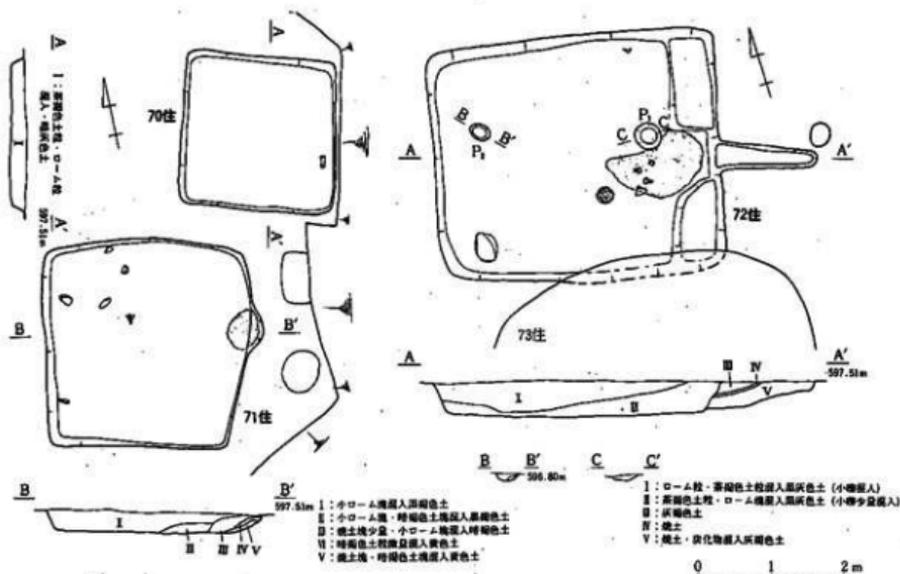
壁はほぼ直に落ち込む。床面は黄褐色土、軟弱ではあるが平坦をなす。カマドは東壁中央に位置し石芯の短かい袖をもつ。焚口部からは2個体の甕が入りこの状態で出土した。その下には多量の焼土と炭化物が見られた。甕内部の土は覆土と同色であり、カマド際にあったものが遺構廃棄時以降に転倒したものであろうと考える。

遺物は非常に少なく、覆土下層から出土した須恵器蓋が主なものである。遺物から見てII期に属する。

第69号住居址

位置 IV地区東側やや北寄り、竪17に切られる。  
 規模 3.63×3.32m 平面形 方形  
 主軸方向 N-98°-E ビット なし

壁、床とも黄褐色土を呈し、明瞭で固く良好である。カマドは東壁中央に壁を掘り込んである。遺物は少なく覆土上層～床面まで見られ、須恵器杯・蓋・甕、土師器杯・甕・小型甕がありVII期に属する。



第37図 第70・71・72号住居址

#### 第70号住居址

位置 IV地区中央東端71住北  
 規模 2.19×2.10m 平面形 正方形  
 ビット なし

壁はややゆるやかに落ち、床はやや軟弱な黄色土である。カマドは検出されなかった。遺物は覆土中層からの須志器長頸壺頸部のみであり、III-IV期に位置づけられる。尚、本址は堅穴状遺構としてとらえるほうが妥当であろう。

#### 第71号住居址

位置 IV地区中央東70住南 規模 2.85×2.26m  
 平面形 方形 主軸方向 N-102°-E  
 ビット なし

壁はほぼ直に落ち、床面はやや軟弱な黄色土である。カマドは東壁中央を浅く掘り込んで構築されているが、袖・煙道は検出されなかった。

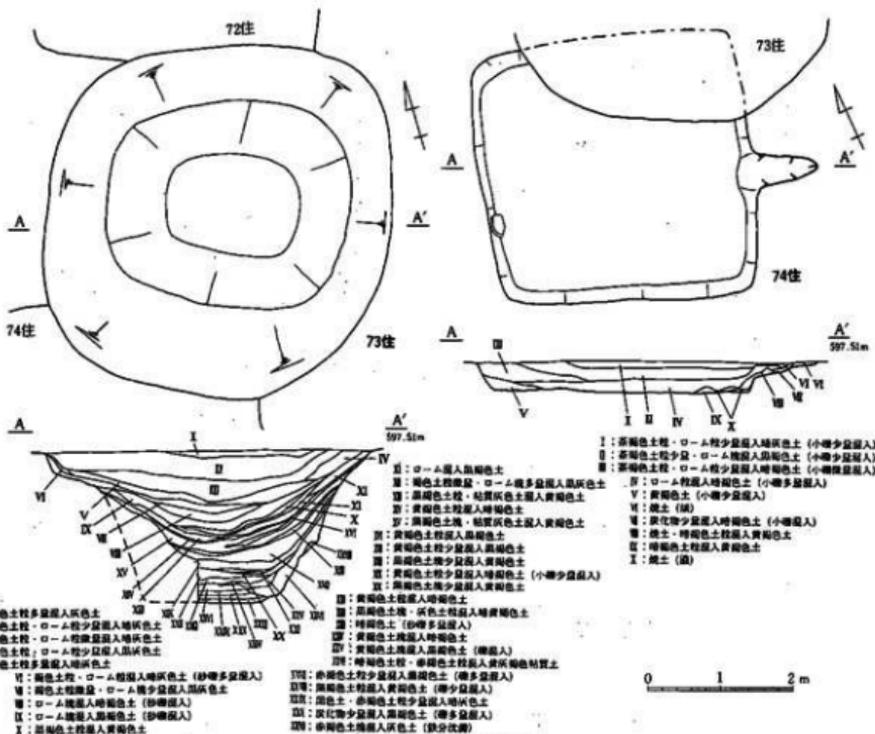
遺物は覆土中層南側を中心に出土して土師器である。少量のため不明確ではあるがIV期以前に位置づけられるものと思われる。

#### 第72号住居址

位置 IV地区南東 73住に切られる  
 規模 3.96×3.32m 平面形 長方形  
 主軸方向 N-103°-E ビット P<sub>1</sub>-37×36×30  
 P<sub>2</sub>-30×21×14cm

砂利層に掘り込んであり覆土中には小竈がはいっている。壁はややゆるやかに落ちるが、東壁では幅約50cm、高さ約30cmにわたってベッド状になっている。床はやや軟弱な黄色土で平坦である。カマドは東壁中央に構築されており、ベッド状のものが袖の役割をしている。

遺物はカマド前に集中し須志器杯・壺・甕、土師器杯・甕等がみられる。また北壁東寄りから鉄製品が出土している。本址はVI期に属する。



第38区 第73・74号住居址

第73号住居址

位置 IV地区南東 72・74住を切る

規模 4.94×4.73m 平面形 不整形円形

ピット なし

当初、灰色土を含むVII層までを覆土としてとらえていたが、底面が安定しないためトレンチを入れて南東側を掘り下げた結果、検出面より210cmを床面としてとらえた。断面はスリパチ状を呈して、覆土は上層が灰色、中層以下は黄褐色土と黒褐色土の互層が基本になっている。床面は黄色で平坦をなすようである。遺物は小形の土師質土器が上層から、縄文土器小片が下層から得られたが共に流れ込みと考える。本址は検出時住居としてとらえたが調査結果より住居とはし難い。その性格は不明であるが、覆

土上層の灰色土は他の中世の遺構に共通にみられたものであり近世までは下らないと思われる。

第74号住居址

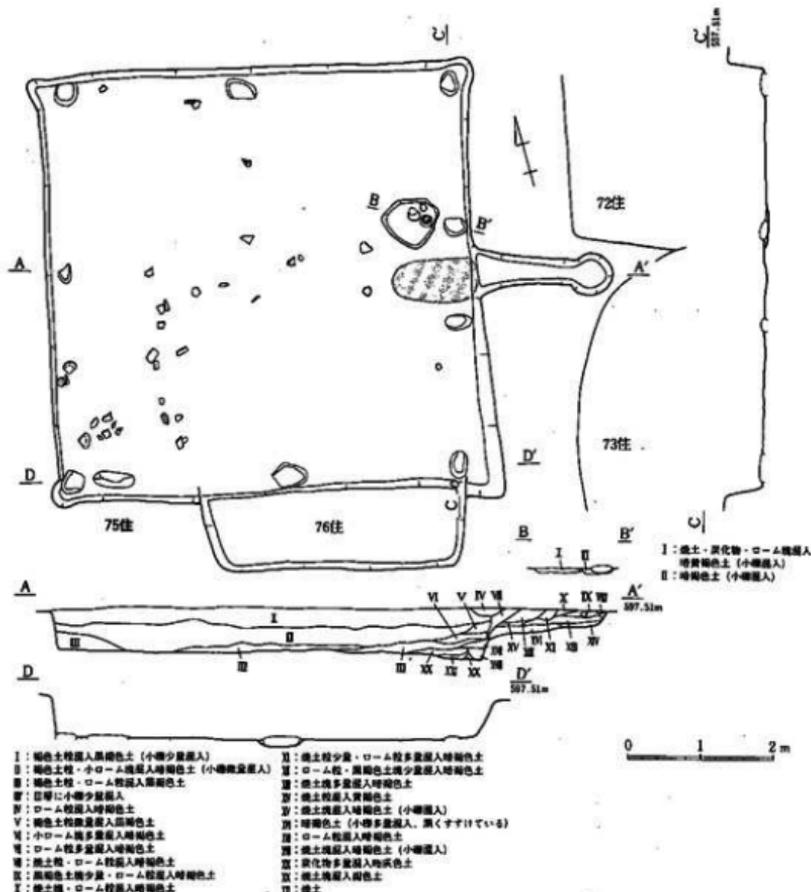
位置 IV地区南東 73住に切られる。

規模 3.77×3.60m 平面形 正方形

主軸方向 N-109°-E ピット なし

砂利層に掘り込んであり覆土には小礫が混入する。壁はややゆるやかに落ち、床面は小礫が混じる黄褐色土で平坦をなす。カマドは東壁中央に設けられており、特に煙道内に焼土の散布が認められた。

遺物は須恵器長頸壺、土師器甕片等が出土しているが数は少ない。遺物から見て本址はV-VI期に属する。



第39図 第75号住居址

第75号住居址

位置 IV地区中央南側 76住にきられる

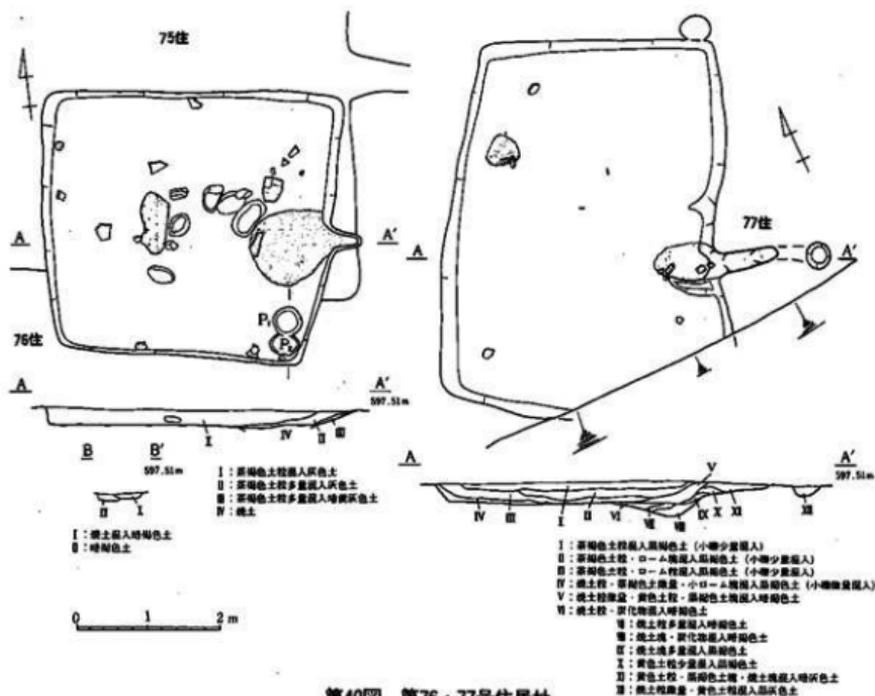
規模 5.98×5.85m 平面形 正方形

主軸方向 N-96°-E ビット 71×67×15cm

方形の大形住居で四隅が丸く突出する特徴を有す。掘り込みは深く壁は直に落ちる。床面は黄色粘質土の貼床で平坦をなし、特に中央部は堅緻であった。また四隅および各辺の中央壁際には比較的平坦な丸石が掘り込まれて配置されている。カマドは東壁中央に設けられている。袖は検出されなかったが

比較的しっかりした構造であり、煙道内には焼土塊が多量に散布しており、煙出口には須恵器破片が数点みられた。

遺物は覆土上層～床面まで全体的に多量出土しており、須恵器杯・蓋・盤、土師器杯・小形甕・甕等がみられる。特に床面上では南西側に破片が散在している他、ビット上面からは完形の坏類が重なって出土した。また文字の書かれた紙および漆が付着した須恵器杯がそれぞれ出土している。その他には北壁際より鎌の出土があった。遺物から本址はV期に位置づけられる。



第40図 第76・77住居址

第76号住居址

位置 IV地区中央南側 75住を切る  
 規模 4.02×3.62m 平面形 不整形  
 主軸方向 N-101°-E ビット P<sub>1</sub>-41×40×  
 9 P<sub>2</sub>-42×30×8 cm

東側および南側は砂利層に掘り込んであるが周辺の他の住居と違い覆土への礫の混入は少ない。壁はほぼ直に落ち、床は小礫が多量に混じる堅緻な黄褐色土で平埴をなしている。尚、中央の覆土中には7つの大石が含まれていた。カマドは東壁中央に設けられておりカマド前の床面には焼土が広く散布している。焼土は中央床面にも薄くみられた。

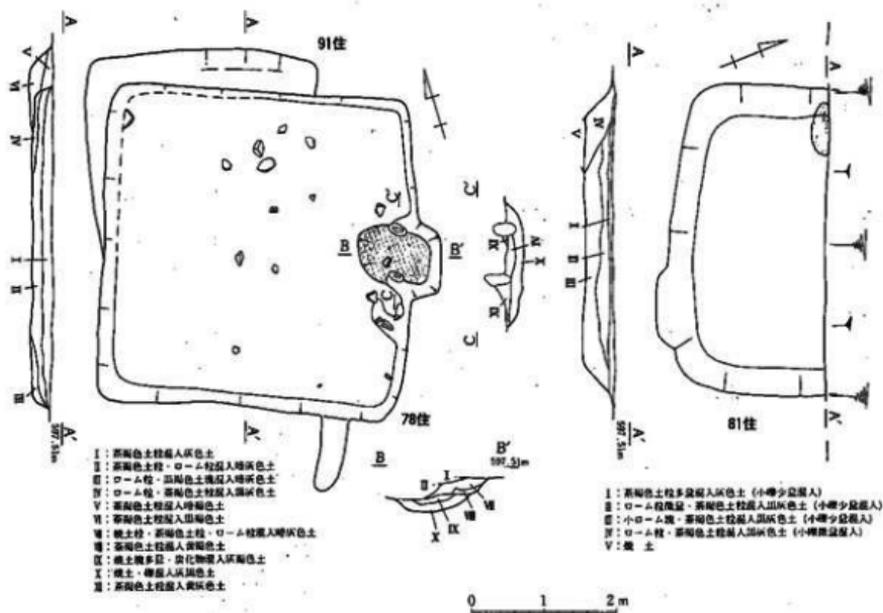
遺物は覆土下層～床面にかけて出土し、須恵器長頸壺・杯・甕、土師器杯・埴・甕、灰胎碗がみられる。本址は遺物よりX期に位置づけられよう。

第77号住居址

位置 IV地区中央南端 南側盛土に隠れる  
 規模 5.19×3.63m 平面形 長方形  
 主軸方向 N-123°-E ビット なし

砂利層に掘り込んであるため覆土中には小礫が混入する。壁はややゆるやかに落ち、床は黄色土でやや起伏をなしている。カマドは東壁中央に構築されている。南側にはしっかりとした粘土袖が確認できたが、北側にはやや短かな袖状のものが見受けられたが判然としなかった。焼土はカマド内に厚く堆積している他、北西側床面にも少量確認された。

遺物は主として覆土下層～床面にかけて土師器杯・甕・瓶把手が出土している他、北西側の覆土中層(X地点)から金環が出土している。遺物から本址はI期に属する。



第41図 第78・81・91号住居址

第78号住居址

位置 IV地区最西端 91住を切る  
 規模 4.29×4.29m 平面形 正方形  
 主軸方向 N-104°-E ビット なし

床面は黄褐色土で平坦ではあるが、やや軟弱である。カマドは東壁中央に位置し、カマド両側には礎があり、芯材として用いられたものと思われる。床面には10~20cm あまりの礎が散在している。柱穴はない。本址の北側には砂利を含む溝があり、ために本址覆土では北側に小礎が多く混入し、南にいくに従って減少する。遺物は床面よりも覆土中・下層の方が多く、須恵器、土師器杯・甕等が出土している。本址の時期は出土遺物によりVII~VIII期と推定される。

第81号住居址

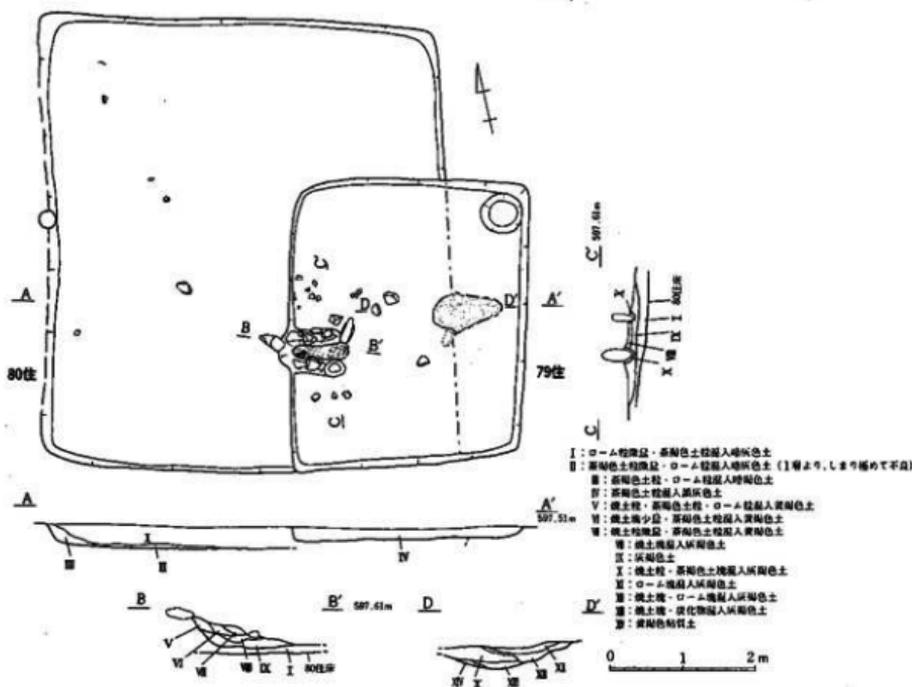
位置 IV地区最北端 規模 4.25m×?  
 平面形 方形か 主軸方向 N-67°-W  
 ビット なし

壁はゆるやかに傾斜し、西壁中央に礎土がある。床は小礎を若干含む堅緻な黄色粘質土である。遺物は須恵器甕片等少量であるが、期的にはV~VI期とみたい。

第91号住居址

位置 IV地区最西端 78住に切られる  
 規模 不明 平面形 方形か ビット 不明

西・北二辺を残すのみで、遺物も少ない。切り合いの関係、遺物によりV~VI期と思われる。



第42図 第79・80号住居址

第79号住居址

位置 IV地区中央西側 西側80住を切る  
 規模 3.96×3.29m 平面形 長方形  
 主軸方向 N-82°-W ビット 57×55×17cm

東壁はゆるやかな落ち込みを示す。西側の $\frac{2}{3}$ 程が80住の覆土の上に設けているため床面は不明瞭であり、80住覆土のローム粒が見られる所を床面として扱った。床面は軟弱である。西壁中央寄りに石組みカマドが構築されている。煙道等は見当らなかった。

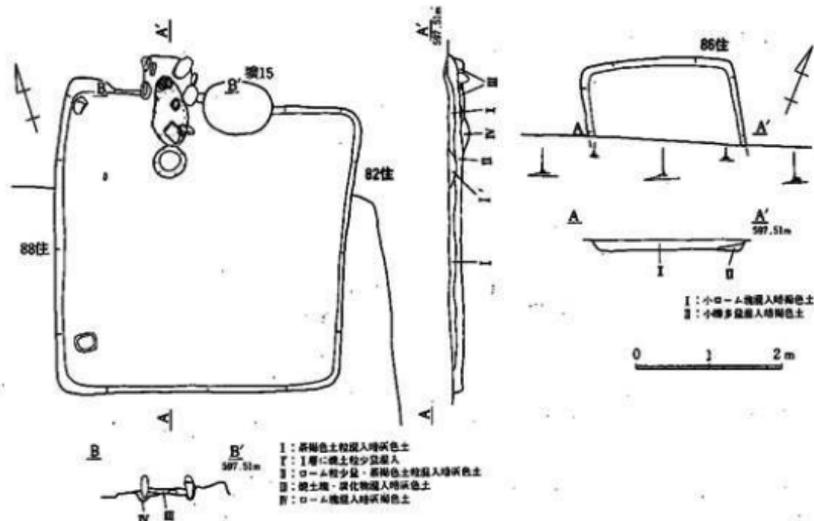
遺物はカマド付近に多く、土師器杯・壺・甕、須恵器長頸壺・甕、灰釉碗・瓶等が出土している。時期はIX期からX期である。

第80号住居址

位置 IV地区中央西側 東側を79住に切られる  
 規模 6.12×(5.52)m 平面形 方形  
 主軸方向 N-84°-E ビット なし

壁は直に落ち込んでいる。西側上面検出がやや困難であった。床面は黄褐色土を呈し平坦である。カマドは東壁中央やや南寄りに位置し、煙道があったものと推察するが、79住に切られており、明確には分らない。

遺物は覆土中層から下層にかけて比較的多く土師器杯・甕、須恵器杯・甕等が出土している。時期はVIII期に属する。



第43図 第82・86号住居址

#### 第82号住居址

位置 IV地区西南部 88住を切る 土壌15に切られる  
 規模 4.07×4.00m 平面形 正方形  
 主軸方向 N-7°-E ビット 45×42×8 cm

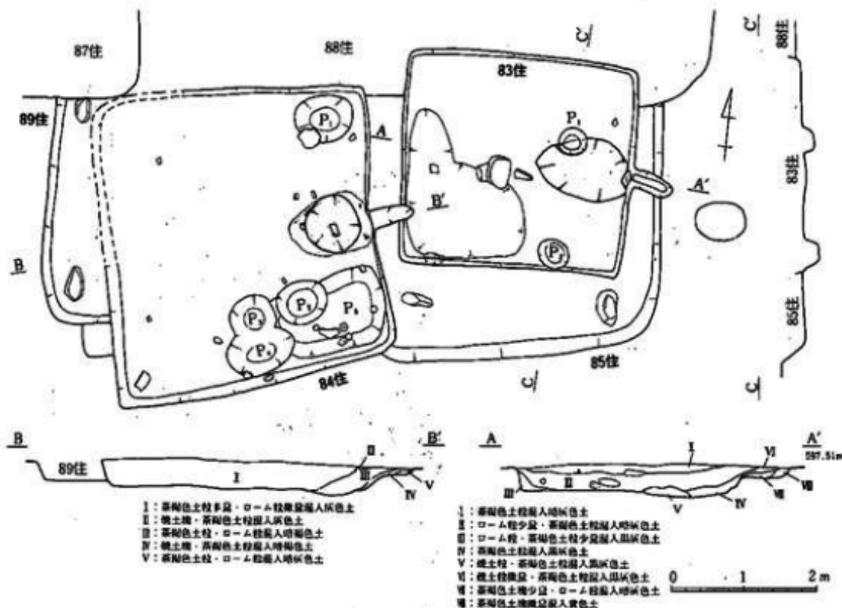
壁はほぼ垂直で、その高さは20cmである。床面は黄褐色土で平坦であるが、やや軟弱である。カマドは北壁やや西寄りであり、礫の散乱状況からみて、石組みカマドではないと思われる。カマド前にビットがあるが浅く、カマド使用にはさして邪魔にならない深さである。カマドの東側には95×80cmの穴が本址を切っているが、この穴の性格は不明である。遺物は覆土上層から須恵器のすり鉢底部が検出されたが、これは明らかに流れ込んだものであり、本址に属さない。他に覆土下層から床面までの間で、

土師器、須恵器杯・壺片などの他、灰軸皿・短頸壺片等が出土している。本址の時期はこれら出土遺物によりX期とみたい。

#### 第86号住居址

位置 IV地区最南端 規模 2.14m×?  
 平面形 方形か ビット 不明

発掘区域南端のため排土の山により、北側半分あまりしか調査ができなかった。壁は、ゆるやかにおち、その高さは13cmと浅い。床面は黄褐色土で軟らかい。柱穴・ビット・カマド等はなく、また遺物も全くないので、住居址というより堅穴状遺構とした方が良いのかも知れない。従って本址の時期は不明である。



第44図 第83・84・85・89号住居址

第83号住居址

位置 IV地区南西 85・88住を切り84住に切られる  
 規模 3.16×2.93m 平面形 正方形  
 主軸方向 N-103°-E ビット P<sub>1</sub>-39×37×  
 13 P<sub>2</sub>-41×40×13cm

床は黄褐色粘質土の堅硬な貼床である。遺物は主としてカマド近くから出土し、土師器環・埴・甕、須恵器甕等がありIX期に位置づけられる。

第84号住居址

位置 83・85・88・89住を切る 平面形 正方形  
 規模 4.14×3.76m 主軸方向 N-85°-E  
 ビット P<sub>1</sub>-80×64×32 P<sub>2</sub>-71×59×34  
 P<sub>3</sub>-62×60×36 P<sub>4</sub>-97×66×36 P<sub>5</sub>-?×  
 100×14cm

床は堅硬な黄褐色土である。遺物は覆土上層から多く、特に南側のビット群に集中していた。須恵器環・甕、土師器環・埴・甕等がありX期に属する。

第85号住居址

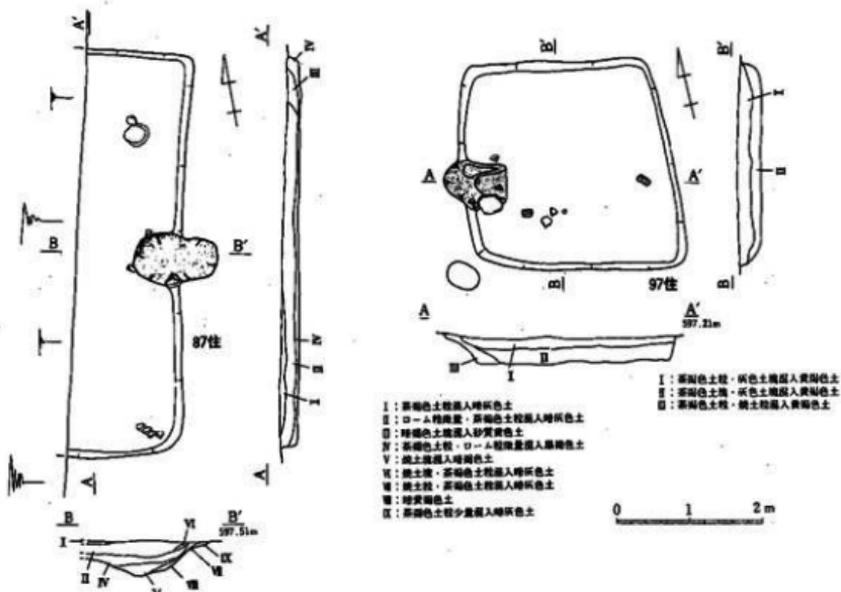
規模 不明 平面形 隅丸方形か

床面は黄色土で軟弱である。南東隅・北東隅の床面には大石があった。遺物には須恵器甕、土師器環・甕等がありIV期に属する。

第89号住居址

規模 不明 平面形 不明

床面は黄色土で軟弱である。西壁際には大石がみられる。遺物は少なく不明確であるが、切り合い関係も考慮に入れるとVIII-X期と思われる。



第45図 第87・97号住居址

第87号住居址

位置 IV地区西側南、西側 $\frac{1}{2}$ 以上盛土中 88住を切る  
 規模 5.55m $\times$ ? 平面形角のはった方形  
 主軸方向 N-102°-E ビット 不明

検出面より住居南東隅を中心に焼土がみられた。壁はほぼ直に落ちる。床は黄褐色でやや固く南側に焼土がひろがる。カマドは東壁にあり、壁を楕円形に掘り込み構築され、袖はない。又、住居址南東隅床面より、約10cm程の大ぶりの石が、あたかも配列されたかのように出土している。この石は、他の住居から出土している罎物用石籠に比べ大ぶりだが、同じ用途の物と考えたい。

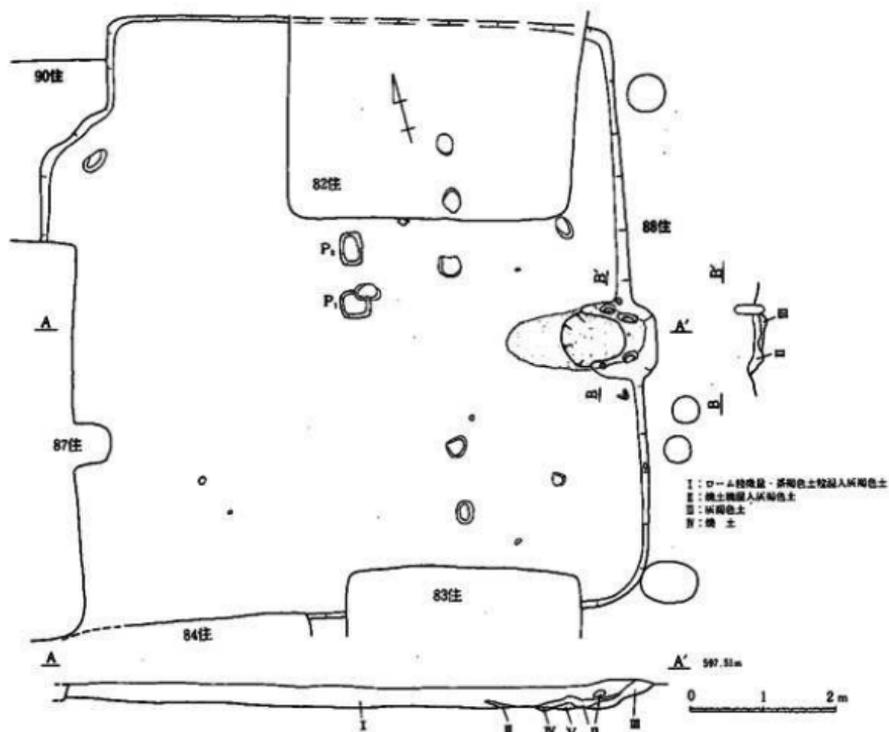
遺物は覆土中層より主に出土し、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・四耳壺・甕、灰釉碗・皿のそれぞれ小片がみられた。時期は、X期にあたる。

第97号住居址

位置 V地区北西 規模 2.95 $\times$ 2.89m  
 平面形 不整形方形 主軸方向 N-81°-W  
 ビット なし

小形の住居址である。壁はほぼ直に落ち込んでいる。床面は黄褐色を呈し平坦である。カマドは壁を浅く掘り込んでおり、両袖を持つ。南側袖は石芯としているが、北側袖は石を用いてはおらず、不明確であった。

遺物は全般的に少なく、カマド前床面より土師器小形甕が充形で出土している。その他、カマド内より須恵器杯・蓋片が、住居址中央東より須恵器杯が出土している。時期は、V期にあたる。



第46図 第88・90号住居址

#### 第88号住居址

位置 IV地区南西 85・90住を切り82・83・84・87

住に切られる 規模 8.20×8.15m

平面形 不整形 主軸方向 N-96°-E

ピット P<sub>1</sub>-42×36×? P<sub>2</sub>-45×30cm×?

大形の住居で検出時には数軒の重複が考えられたが最終的に一軒の住居としてとらえた。床は堅緻な黄褐色で平坦をなし、西側にいくに従い床面はすこしずつ上昇しているようである。カマドは東壁中央に設けられており石芯の袖をもつ。

遺物には須恵器杯・蓋・礎・壺、土師器杯・甕等があり、床面よりも覆土中において多く出土した。

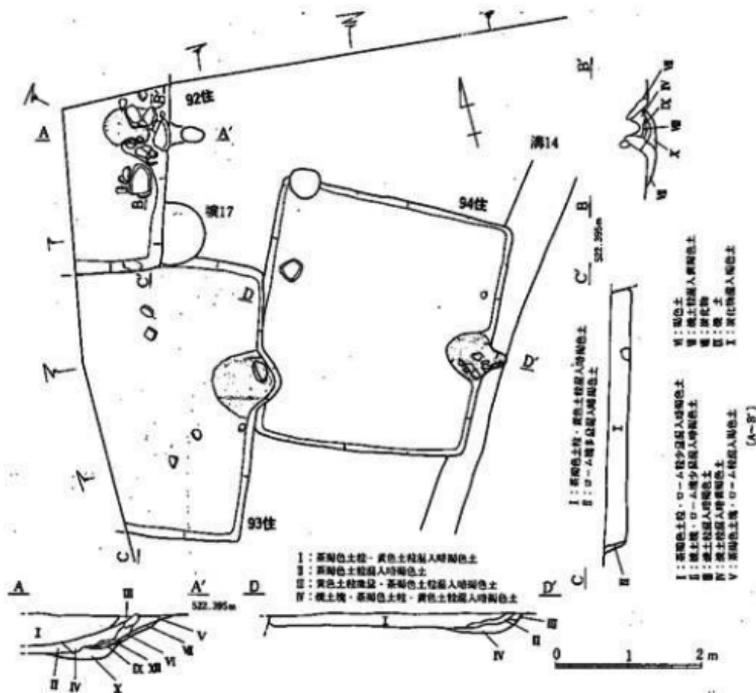
またカマド南際より鋤頭が出土している。本址は遺物から見るとIV-V期に位置づけられる。

尚、本址のカマドより2m東に土師器甕が2点横位で出土した。そのレベルは住居の検出面より10~15cm高く周囲に焼土が散布していた。付近の住居よりも古く既に破壊された住居のカマドとして考えられる。土器はIII期に属するものである。

#### 第90号住居址

位置 87・88住に切られる 西側盛土に隔れる

プランを確認したのみで掘り下げ調査は行なわれなかった。



第47図 第92・93・94号住居址

第92号住居址

位置 VI地区北西 93住を切る

規模 不明 平面形 方形か ビット 不明  
 主軸方向 N-107°-E

壁は直線的に内傾し、床面はやや軟弱な黄褐色土であった。カマドは壁を丸く押し出した形をとっている。遺物は須恵器杯・蓋・甕、土師器杯・甕等がありVI-VII期に位置づけられる。

壁は内傾して落ち、床面はやや軟弱な黄色土であった。カマドは石組で煙道は壁より20cmと短い。カマド内および北壁より灰釉碗・段皿、土師器皿等が出土している。本址はV期に位置づけられる。

第94号住居址

位置 93住に切られ溝14を切る

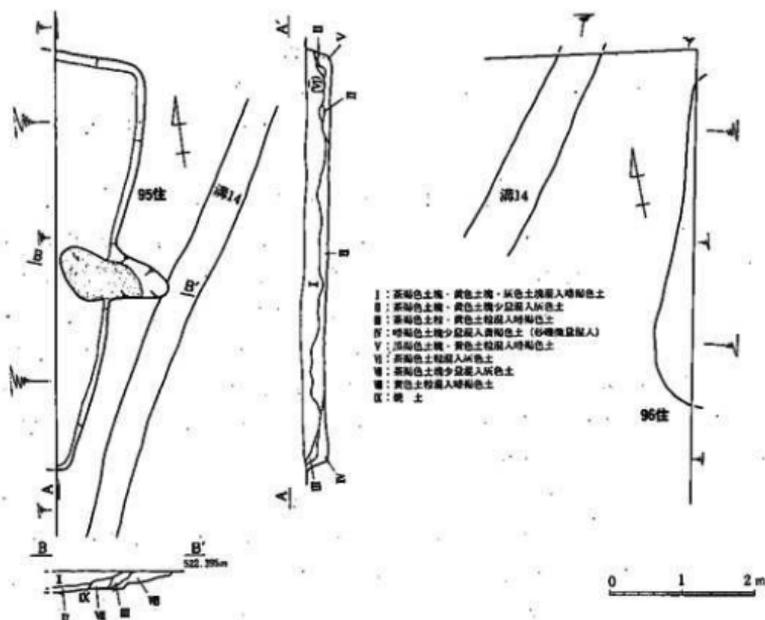
規模 3.51×3.29m 平面形 正方形  
 主軸方向 N-119°-E

第93号住居址

位置 92住に切られ94住を切る

規模 3.99m×? 平面形 方形か  
 主軸方向 N-128°-E ビット 不明

壁は直に落ち、床は堅緻な黄褐色であり小礫が少量混入していた。遺物はカマド内から土師器碗片がまともに出土した他、須恵器杯・蓋・甕、土師器杯等を出土しVI期に位置づけられる。



第48図 第95・96号住居址

第95号住居址

位置 VI地区南西 西側盛土に隠れる

規模 5.77m×? 平面形 不明

主軸方向 N-115°-E ビット 不明

VI地区の他の住居址と同様に砂質黄色土中に掘り込まれている。東側しか調査していないので全容はつかみにくいが、壁は斜めに落ち35cmを測る。床面は軟質で粘性をもった黄色土である。カマドは東壁中央にあり黄土は薄くひろがる。煙道は形を整えておらず僅かに溝14を切っている。

遺物は少なく須恵器の杯・蓋・壺片、土師器壺片

等が出土したにすぎない。本址の時期は出土土器から推してVI~VII期とみたい。

第96号住居址

位置 VI地区北東 東側盛土に隠れる

規模 不明 平面形 不明 ビット 不明

溝14の東側2mあまりのところに位置する。盛土に隠れ、西側プランを検出したのみである。北側からVI~VII期に属する土師器壺片がまとめて出土している。

## 2 掘立柱建物址

今回の調査で検出された掘立柱建物址は、I地区11棟、III地区2棟、V地区2棟の計15棟である。これらについて、建物の規模・柱穴の掘り方・集落内での建物の位置および企画性等について窺えることを簡単にふれたい。尚、建1・12は調査区域外へさらに続くことも予想されたが残存部だけについて考えていく。

15棟の建物址を規模別に分類すると、1間×1間が1棟(建11)、2間×1間が3棟(建9・10・12)、2間×2間が2棟(建1・13)、3間×1間が1棟(建6)、3間×2間が6棟(建3・4・7・8・14・15)、3間×3間が2棟(建2・5)となる。面積は全て30m<sup>2</sup>以下であり、特に建10・11は小形であった。また、建物の構造から総柱式と側柱式に分類すると、総柱式は4棟(建1・2・4・15)だけであり、側柱式が多い。柱間寸法はほぼ1.5~2.2mで、各建物址によって異なる。今後、仔細な検討が必要であろうが、全柱穴に柱痕が観察できた建7では桁行が1.8~2.0m、梁行が2.0~2.1mを測る。また柱痕の径は20cm程のものが多かった。なお参考に、主柱穴が最も良好に確認された12住および、柱の礎石が確認された75住(共にV期)の柱間寸法を求めたところ前者は3.6~3.7m、後者は2.4~2.9mであった。柱穴の掘り方は全て坪掘で、平面形には主として方形のものや円形のものみられる。方形のものは建4・7・8・9・10で全てI地区の中央からやや東側に位置する。また柱穴の規模は、概して方形のものの方が大きいことが窺える。

次に集落内における建物の位置関係を見た場合、建1・11を除き全ての建物址が重複あるいは接していることが注目される。特にI地区中央やや東側には建4~8の5棟が集中している。これらの主軸方向はほぼ、建4・7がN-10°-Eに、建5・7・8がN-85°-Wになっており、ある程度の企画性が読みとれる。また周辺には建物址として把握することはできなかったが、多数の良好なピットが検出され、柱痕をもつものもみられた。おそらく継続して建物があったと考えられ、集落において建物が一定の位置を占めていたことが窺える。

最後に住居址との切り合い関係によってある程度時期が求められる建物址についてふれたい。建2・3は共にIV期以前に位置づけられ、周辺の5・6・10・11住と同時期に属すると思われる。おそらく今回検出された建物址の中で最も古いものであろう。建4はVII~VIII期以前に位置づけられ、遺物はV・VI期ごろの様相を呈している。周辺の建物址も出土土器からその前後に位置づけられると思われる。建12・13は共にVIII期以前に位置づけられ、遺物はVI期以前の様相を呈している。III地区にはV~VIII期の住居址が検出されているが、そのいずれかと同時に存在したことは間違いないであろう。

以上、検出された掘立柱建物址について概観してきたが、資料的制約等から十分な分析・検討ができなかった。松本平では近年、掘立柱建物址の検出例が多くなってきており<sup>(1)</sup>、それらも含めて今後の課題としたい。

(山田 真一)

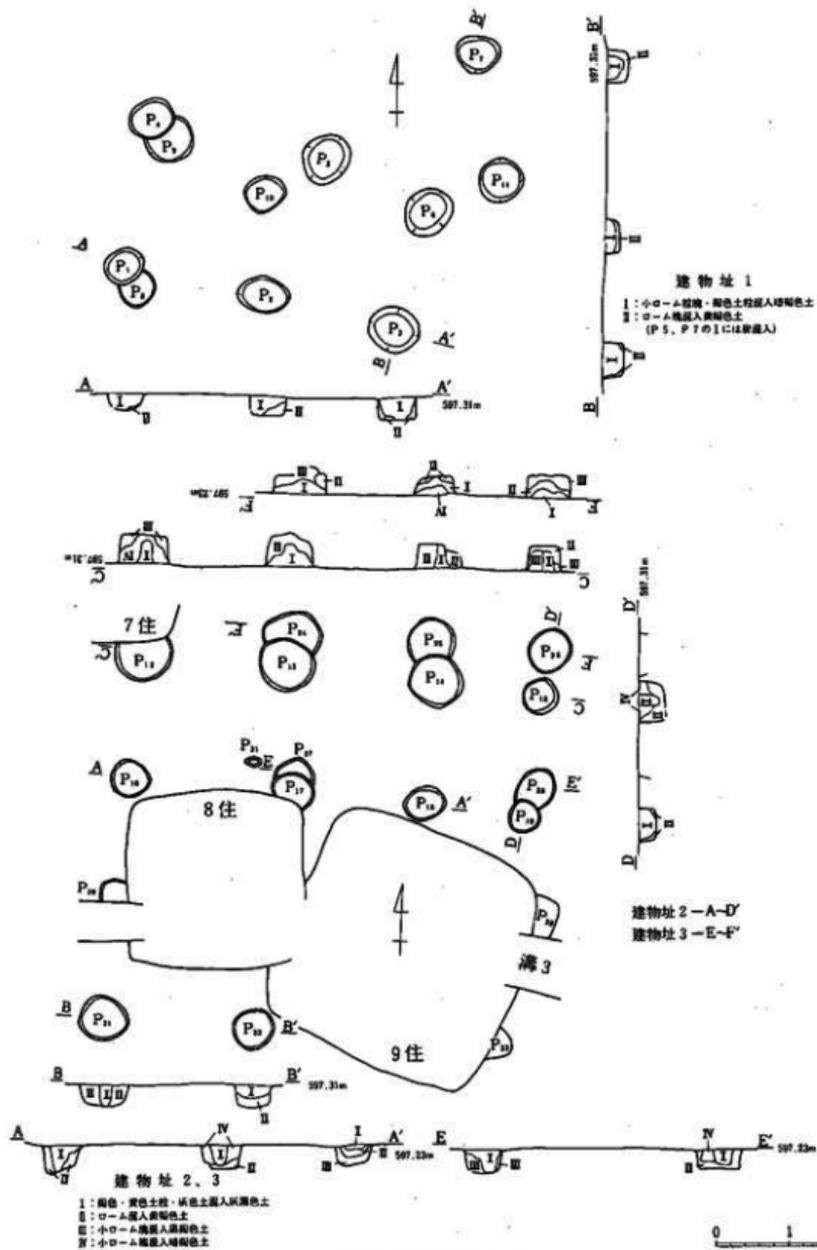
註(1) 1983年に調査された松本市下神湯跡では35棟が検出されている。

表1 南栗・北栗遺跡掘立柱建物址一覽表

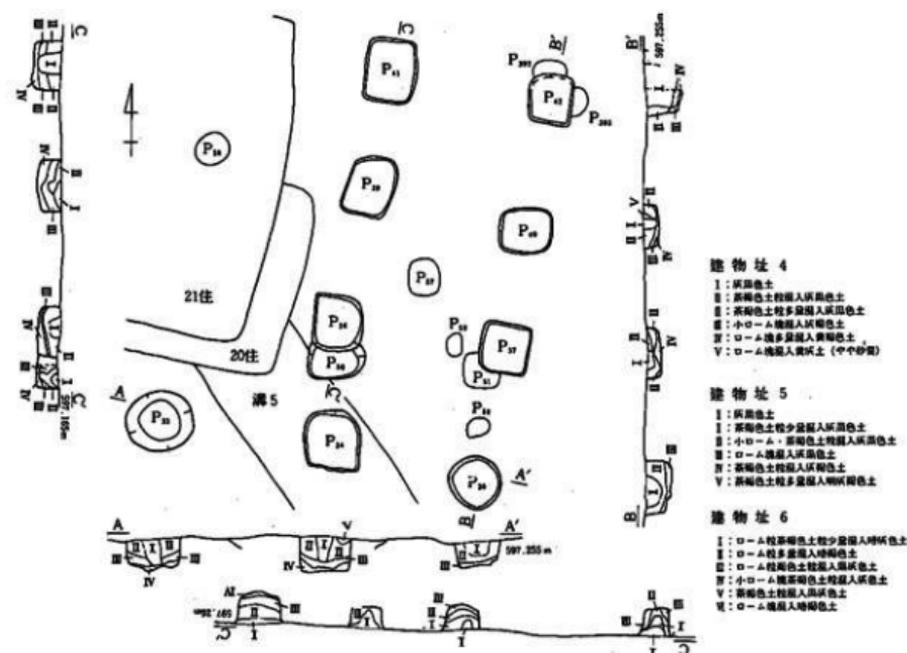
番号	平面形	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴 直径 (cm)			柱穴 平面形	柱穴番号	遺物址所見	
					底	径	厚さ				
1	方形	N-10°-E	(2間)×2間 3.9×3.8	桁 1.7~2.8 梁 1.7~2.0	1	56	48	24	円形		1地区北端、6柱の北側に位置する。 P <sub>1</sub> ~P <sub>7</sub> までを柱列として把握した。P <sub>8</sub> ・P <sub>9</sub> はそれぞれP <sub>2</sub> ・P <sub>4</sub> の柱で直しと考えられる。 P <sub>10</sub> ・P <sub>11</sub> は柱列からややずれているが、柱1と関係あるものとして把握した。 掘立柱の建物になると思われ、柱穴の掘り方は円形である。 遺物はI期以前に属する土師器類が出土している。
					2	73	51	26	楕円形		
					3	71	62	34	円形		
					4	65	58	29	〃		
					5	70	62	35	〃		
					6	70	61	27	〃		
					7	61	58	31	〃		
					8	(54)	50	21	〃		
					9	66	(60)	27	〃		
					10	57	49	24	不整形		
					11	61	60	16	円形		
2	長方形	N-85°-W	3間×3間 5.5×5.0(4.8)	桁 1.5~2.1 梁 1.6	12	72	(72)	38	〃	柱底あり	1地区中央やや北西に位置する。柱8を切り、7柱・8柱・9柱・梁8に切られる。 掘立柱の建物で、柱穴の掘り方は円形である。 柱底は灰褐色を呈し、比較的良好に観察できた。 遺物は土師器類が出土している。切り合い関係からI期以前に位置づけられる。
					13	79	71	45	〃		
					14	76	78	33	不整形	柱底あり	
					15	50	49	36	〃	柱底あり	
					16	55	51	35	円形		
					17	61	(50)	32	不整形	柱底あり	
					18	60	48	28	〃		
					19	47	46	24	〃		
					20	(54)	45	19	?		
					21	69	62	30	不整形	柱底あり	
					22	59	58	31	円形		
3	方形	N-4°-E	3間×2間 3.8×3.5(3.4)	桁 1.8 梁 1.8~1.8	24	82	(62)	37	不整形		柱8・8柱・9柱・梁8に切られる。 掘立柱の建物で、柱穴の掘り方は円形である。 切り合い関係からは、柱2と同様I期以前に位置づけられる。
					25	(69)	65	26	円形		
					26	65	60	30	〃		
					27	55	(47)	38	?		
					28	(62)	50	26	楕円形		
					29	/	/	/	?		
4	長方形	N-11°-E	3間×2間 5.7(5.4)×4.5	桁 1.7~1.9 梁 2.0~2.8	33	92	88	45	円形	柱底あり	1地区中央やや東側に位置する。梁8を切り21柱に切られる。尚、20柱との切り合い関係は確認できなかった。 掘立柱の建物で、柱穴の掘り方は主として方形である。 P <sub>20</sub> は21柱床面下に柱底のみ検出された。 柱底は比較的良好に観察でき、灰褐色を呈し、観察してしまりは不慮であった。 遺物はI・II期ごろに属する須恵器・土師器が出土している。 切り合い関係からはI・II期以前に位置づけられる。
					34	98	87	49	方形	柱底あり	
					35	75	71	38	不整形		
					36	90	85	32	〃		
					37	69	60	18	方形		
					38	49	42	/		柱底のみ	
					39	84	65	38	不整形		
					40	74	68	21	長方形	柱底あり	
					41	88	72	37	〃	柱底あり	
					42	62	60	30	方形		
					5	方形	N-86°-W	3間×3間 5.5×5.3(5.3)	桁 1.6~2.2 梁 1.7~1.8	50	
60	62	57	28	〃						柱底あり	
61	63	60	45	〃						柱底?あり	
62	64	55	46	〃							
63	58	57	32	円形						柱底あり	
64	64	60	42	〃							

番号	平面形	主軸方向	基 礎 (m)	柱間寸法 (m)	柱 穴 尺 寸 (m)				柱 穴 平面形	柱穴備考	建 物 址 所 見					
					北	東	南	西								
5					66	55	50	51	円形	遺物は1・2期ごろに位置づけられる須石層 坪・皿・鏝、土師器断片が出土している。						
					67	60	60	46	"							
					68	54	49	39	"							
					69	54	50	37	"							
					70	75	82	44	不整形							
					71	85	81	9	円形							
					72	35	80	10	"							
					73	88	38	19	"							
					74	25	24	9	"							
					81	39	35	15	"							
					6	方形	N-7°-E	3間×1間 4.4×4.4	距 1.8-1.6 間 4.4		75	68	68	45	不整形	壁に切られる。 銅柱式の建物で、柱穴の廻り方は主として円 形である。 柱礎は灰褐色を呈し、土は主として灰褐色を呈す。 遺物は1~2期に位置づけられる土師器・ 小形銅などが出土している。 隣、P <sub>22</sub> -P <sub>23</sub> は比較的しっかりしており、 隣らあるいは建6と関係ある柱穴かとも思わ れる。
76	58	(50)	58	方 形												
77	65	(56)	47	不整形						柱礎あり						
78	84	(64)	48	円形						柱礎あり						
79	77	55	58	"						柱礎あり						
80	47	42	40	円形						柱礎あり						
81	59	49	35	不整形						柱礎あり						
82	68	57	34	円形												
88	60	(57)	38	方 形												
84	55	(58)	?	円形												
85	70	60	24													
7	長方形	N-85°-W	3間×2間 3.7×4.1(4.8)	距 1.8-2.0 間 2.0-2.1						92	67	65	89	不整形	1地区中央や北東側に位置し壁に切られ る。 銅柱式の建物で、柱穴の廻り方は方形である。 柱礎は全ての柱穴に確認できた。灰褐色を呈 し、土には茶褐色土粒あるいはローム等の 混入がみられる。 遺物には須石層坪・皿・鏝、土師器断片がみ られた。	
										98	86	81	87	長方形		
					94	78	66	34	方 形	柱礎あり						
					95	66	(66)	33	"	柱礎あり						
					96	78	58	45	長方形	柱礎あり						
					97	85	(50)	52	"	柱礎あり						
					98	78	66	51	方 形	柱礎あり						
					99	70	66	41	不整形	柱礎あり						
					100	75	42	40	長方形	柱礎あり						
					101	70	70	58	方 形	柱礎あり						
					8	長方形	N-84°-W	3間×2間 5.0×3.7	距 1.5-1.8 間 1.7-2.0	103	75	67	68	不整形		壁7を切る。 銅柱式の建物で、柱穴の廻り方は方形である。 遺物には須石層坪・皿・鏝片がみられた。
104	71	49	39	長方形												
105	74	60	41	不整形												
106	98	65	57	長方形												
107	54	48	56	"												
108	72	65	58	不整形												
109	61	60	63	方 形												
110	50	44	37	"												
111	65	48	20	長方形												
112	75	56	58	不整形												
9	方形	N-3°-E	2間×1間 3.4×3.1(3.0)	距 1.3-1.9 間 3.0-3.1						137	72	62	46	"	1地区北東に位置し、壁10と重複している。 銅柱式の建物で、柱穴の廻り方は方形である。 柱礎は灰褐色土で、土は主として灰褐色であった。 遺物には須石層断片が出土している。 隣、壁10との関係関係は把握できなかった。	
					138	75	58	44	"	柱礎あり						
					139	80	64	55	"	柱礎あり						
					140	87	70	50	円形	柱礎あり						
					141	(96)	(68)	(83)	長方形							

番号	平面形	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (m)				柱穴 平面形	柱穴備考	植物土所見
					高さ	長さ	幅	深さ			
10	方形	N-2°-E	2間×1間 2.6×2.6	桁 1.2~1.4 梁 2.6	142	(98)	95	(84)	不整形	柱9と重複している。 P <sub>101</sub> および東西にやや長い平面形を示すP <sub>102</sub> 、 P <sub>103</sub> をP <sub>104</sub> -P <sub>105</sub> -P <sub>106</sub> に対応する柱列としてとらえた。 假柱式の建物で、柱穴の廻り方は方形である。 P <sub>102</sub> とは全部で、土層断面図に現われた柱9の柱穴とは別の柱穴が確認されている。 遺物には土器断片がある。	
					148	69	51	37	"		
					144	80	67	41	長方形		
					145	66	54	44	不整形		
					146	74	66	41	方形		
11	長方形	N-33°-E	1間×1間 1.2×1.2(1.1)	桁 1.8 梁 1.1~1.2	147	44	40	44	円形	1地区中央北側、層2の南面に位置する。 廻り方はP <sub>100</sub> を除き円形である。 遺物の出土はない。	
					148	90	44	40	"		柱痕あり
					149	43	30	26	円形		
					150	42	34	32	長方形		
12	方形	N-10°-E	2間×1間 3.8×4.8	桁 1.8~2.0 梁 2.1	164	75	71	48	円形	1地区南側に位置し、42柱に切られる。掘土のため確認できないが、さらに南側に柱列が敷く可能性があり。 假柱式の建物で、柱穴の廻り方は円形である。 P <sub>120</sub> の底には径約50cmの平坦な石が据えられている。 遺物は非難以前に位置づけられる須恵系土器・土師系土器等が出土している。 切り合い関係からは層2以前に位置づけられる。	
					145	69	60	36	不整形		
					146	76	69	49	方形		
					148	70	64	38	円形		底に石あり
					149	(70)	60	34	"		
13	方形	N-16°-E	2間×2間 3.8×3.8	桁 1.8 梁 1.8	150	55	54	50	方形	1地区中央やや南側、41柱・42柱に切られる。 假柱式の建物で柱穴の廻り方は円形と方形がみられる。 遺物は非難以前に位置づけられる須恵系土器・土師系が出土している。 切り合い関係からは層2以前に位置づけられる。	
					151	53	50	40	"		
					152	54	47	36	不整形		
					153	(50)	48	21	不整形		
					154	48	40	36	方形		
					155	(57)	51	20	不整形		
14	長方形	N-8°-E	3間×2間 4.8×4.2(4.1)	桁 1.5~1.6 梁 1.9~2.1(4.2)	169	78	61	58	円形	1地区南側に位置する。 假柱式の建物で、柱穴の廻り方は円形である。 掘土は暗灰色~黄褐色を呈し、1地区に多い沖世に属する遺物の灰色を呈す層土とは区別される。 尚、P <sub>140</sub> ~P <sub>143</sub> は、全て柱14の柱穴と重複しており、柱穴として用いられた時期があったものと想われる。 遺物の出土はない。	
					150	81	71	58	"		
					151	90	78	47	"		
					152	85	72	28	長方形		柱痕あり
					153	68	58	38	円形		
					154	87	78	46	不整形		
					155	85	72	49	円形		
					156	78	74	42	"		
					157	62	78	55	方形		
					158	?	?	46	円形か		
					159	?	?	54	"		
					160	?	?	46	"		
					161	66	(63)	33	円形		
					162	80	(75)	51	"		
163	72	(57)	49	"							
15	方形	N-10°-E	3間×2間 4.0×4.8	桁 1.1~1.5 梁 2.8	164	78	78	87	不整形	1地区北側、柱14の北に位置し、層18を切り壁状に切られる。 假柱式の建物で、柱穴の廻り方は円形である。 掘土は暗灰色~黄褐色を呈し、1地区に多い沖世に属する遺物の灰色を呈す層土とは区別される。 尚、P <sub>150</sub> の北側には柱穴が検出されなかったことから、P <sub>150</sub> ・P <sub>151</sub> は底で2間×2間の建物であったとも考えられよう。	
					165	66	47	16	"		
					166	45	45	26	"		
					167	65	62	31	"		
					168	75	70	34	円形		
					169	?	?	48	?		
					170	87	79	29	円形		
					171	86	72	39	不整形		
					172	76	67	45	"		
					173	82	64	30	"		
					174	82	68	29	円形		
					175	108	56	87	"		



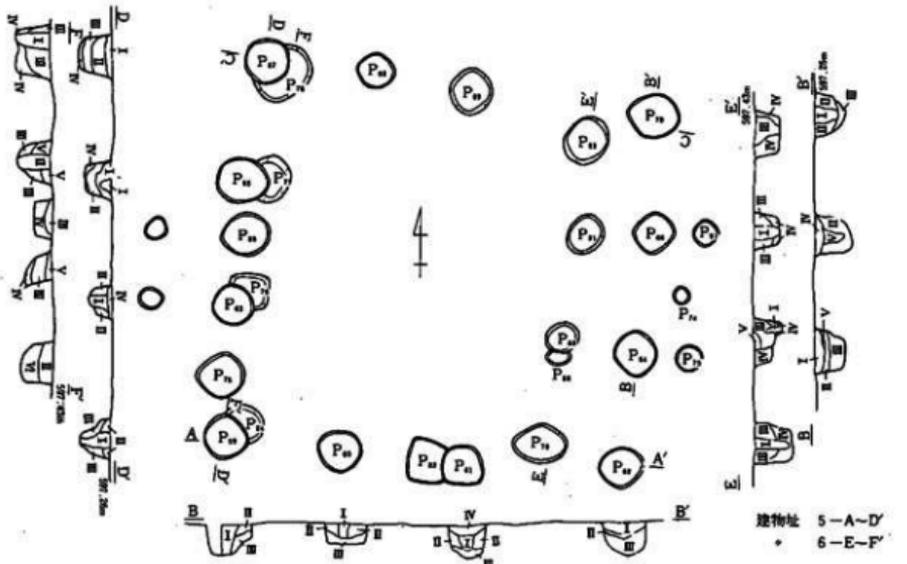
第49図 建物址1~3



- 建物址 4
- I: 灰褐色土
  - II: 茶褐色土较多混入灰褐色土
  - III: 茶褐色土较多混入灰褐色土
  - IV: 小口-A 陶器入灰褐色土
  - V: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土
  - VI: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土 (中砂质)

- 建物址 5
- I: 灰褐色土
  - II: 茶褐色土较多混入灰褐色土
  - III: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土
  - IV: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土
  - V: 茶褐色土较多混入灰褐色土

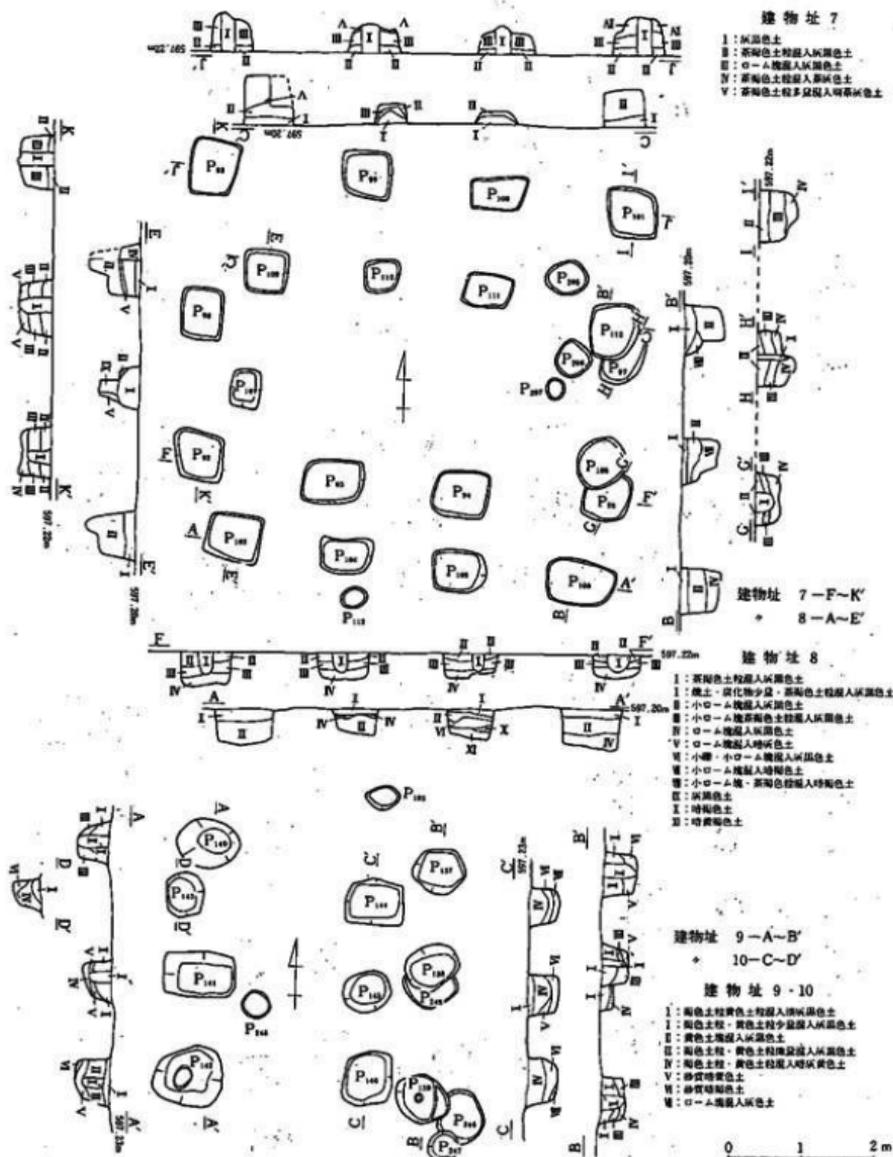
- 建物址 6
- I: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土
  - II: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土
  - III: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土
  - IV: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土
  - V: 茶褐色土较多混入灰褐色土
  - VI: 小口-A 陶器较多混入灰褐色土



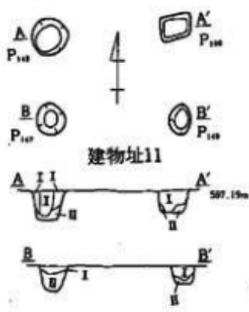
- 建物址 5-A-D  
 6-E-F

第50图 建物址 4 ~ 6





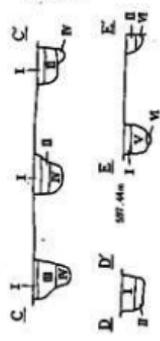
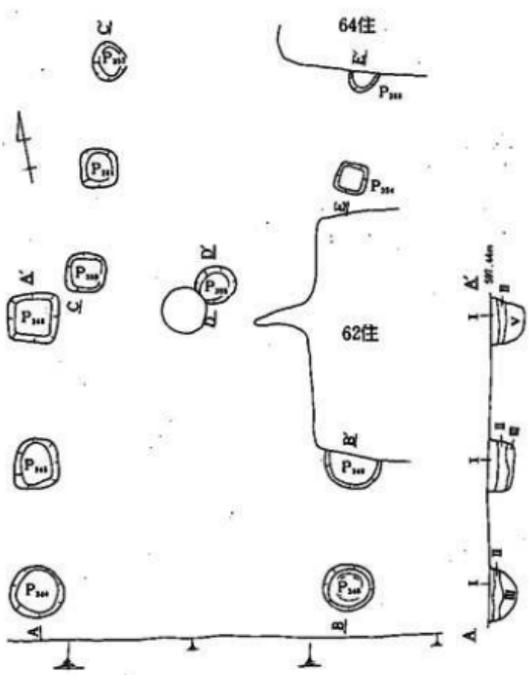
第51圖 建物址 7 ~ 10



建物址 11  
 I: 赤褐色土  
 II: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土  
 III: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土  
 IV: 赤褐色土

建物址 13

- I: 赤褐色土
- II: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土
- III: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土
- IV: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土
- V: 赤褐色土
- VI: 赤褐色土



建物址 12-A-B'  
 \* 13-C-E'

建物址 12

- I: 赤褐色土
- II: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土
- III: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土
- IV: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土
- V: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土
- VI: 赤褐色土塊層入埋藏褐色土



第52圖 建物址 11 ~ 13



### 3 堅穴状遺構・土壌

堅穴状遺構は当初、検出時において覆土が灰色を呈し規模の大きいものを扱えた。しかし発掘調査が進行するに従い、堅穴状遺構と土壌とを明確に区別することができず、結果的には土色以外何ら変わりのないものを区別して扱ってしまった。一覧表では便宜上、堅穴状遺構と土壌を分けて掲載したが、ここでは上記の理由によりまとめて記述していく。(遺構名は検出時につけたものを踏襲し、堅穴状遺構は以下堅 No.として記述する。)尚、詳細については一覧表に記載する。

今回の調査で確認された堅穴状遺構・土壌はI地区23基、II地区4基、III地区1基、IV地区4基、V地区21基、VI地区2基で総計55基を数える。I地区・V地区に多く、特にV地区では密集していた。規模をみると最大が堅13(540×420cm)で、最小は土壌16(85×69cm)であった。最も多いのは長径が100~150cmのもので16基を数える。覆土中に焼土がみられるものは13基あり、概して長径が120cm前後の小形のものに多い。また比較的大形のものの中にはピットを持つものもあり4基を数えている。

次に特徴的であった堅1と堅29について簡単にふれたい。

堅穴状遺構1——規模は510×360cmと大形である。覆土は青灰色を呈し上~下層にかけて拳~人頭大の石が計20個見られた。床面は堅緻な黄色土で、西側と南東部は高くなっており股状を呈す。遺物は山茶碗の小片と頁岩製の硯が出土している。遺物および覆土から中世に属するものと思われる。堅穴状遺構とするより、むしろ住居址として扱えられるものかもしれない。尚、堅1に類するものには堅13がある。

堅穴状遺構29——径2.96mの正方形を呈す。検出面から非常に深く、底面は軟弱な黄褐色土である。覆土中には多数の石があり、そのほとんどが火を受けていた。また中層~床面にかけては焼土・炭化物が層をなしてみられた。尚、炭化物の中には稲あるいはよし・すすきといった植物灰が認められた。遺物は内耳土器片が多数、刀子1点、石臼1点が出土している。また、覆土が灰色であることから中世に属すると考えられる。以上の状況等を考慮すると、火葬墓と考えることもできようが、火葬を行なった場合には少なくとも骨片は現在まで残る筈である。しかし骨は1片も出土しておらず、本遺構を火葬墓とするか否かは判断できない。尚、堅29と同様の性格を持つと思われるものに堅32~36があげられる。何れもV地区に位置する。

以上、堅1と堅29について概観してみたが、今回の調査で確認できた堅穴状遺構・土壌は多様なあり方を示し、その性格は一概には律しきれないものであった。その中で、堅穴状遺構が密集して確認されたV区は特殊な空間として位置づけられよう。尚、ここではふれなかったが、住居址としてとりあげたものの中にも堅穴状遺構として位置づけられそうなものもあった。(三村 竜一)

表2 鑿穴遺構一覽表

番号	位置	平面形	面積 (m <sup>2</sup> )	断面形	築造方向	遺物	所見
1	1地区 北	不整形	510×256	45	山形	山形、硯	通るを穿る。壁土層より下層まで約100cmの礫層あり。西・南側は一段と高い。西側は礫層の貫通土。
2	"	長方形	270×196	35	不整形	土器類、炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
3	"	不整形	250×180	20	なし	なし	4段と壁1を穿る。概ね段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
4	"	不整形	24	なし	なし	なし	壁1を穿る。断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
5	"	不整形	210×186	20	山形	炭灰層	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
6	"	不整形	140×120	82	方型	炭灰層、炭灰層、内瓦土層	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
7	"	中央円形	6	なし	なし	なし	断面より穿るに成り壁は概ね北向きに成る。
8	"	中央円形	150×58	8	不整形	炭灰層	5段を穿る。壁土層より下層まで約100cmの礫層あり。西・南側は一段と高い。西側は礫層の貫通土。
9	"	北不整形	41	不整形	なし	なし	1段の断面に似る。壁は中層やかに成る。中央側は低い。
10	"	円形	181×146	9	山形	土器類、炭灰層、土器類	1段を穿る。概ね段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
11	"	南不整形	210×187	9	山形	土器類、炭灰層、土器類	壁土層より下層まで約100cmの礫層あり。西・南側は一段と高い。西側は礫層の貫通土。
12	"	北不整形	302×224	13	山形	土器類、炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
13	1地区 東	不整形	540×420	60	なし	炭灰層、土器類	壁土層より下層まで約100cmの礫層あり。西・南側は一段と高い。西側は礫層の貫通土。
14	"	不整形	512×282	69	逆台形	炭灰層、土器類	壁土層より下層まで約100cmの礫層あり。西・南側は一段と高い。西側は礫層の貫通土。
15	"	"	255×182	20	山形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
16	"	"	210×192	76	山形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
17	1地区 東北	"	265×9	88	方型	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
18	1地区 北西	内円形	182×109	48	不整形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
19	"	不整形	180×9	82	方型	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
20	"	"	180×9	21	不整形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
21	"	"	180×9	12	山形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
22	"	長方形	185×128	81	山形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
23	"	"	215×205	33	不整形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
24	"	内円形	143×101	23	方型	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
25	"	長方形	246×159	60	逆台形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
26	"	中央円形	155×133	13	山形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
27	"	不整形	179×143	16	逆台形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
28	"	"	185×182	16	山形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
29	"	中央正方形	296×296	71	方型	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。
30	"	北西円形	100×98	33	逆台形	炭灰層、土器類	断面は段状に削り、起伏あり。ピットあり。遺物は概ね北向き。



## 4 溝

今回の調査で確認された溝は、I地区8本、II地区2本、IV地区1本、V地区2本、VI地区1本の計14本である。このうち溝1および合流する溝2は、地形・地質の項でふれている様に溝とは区別されるものである。規模は最大幅が50cm前後の小さいものが、方向は西—東方向のものが最も多くみられた。覆土は溝1・5・12・13・14を除き、全て灰色を呈している、切り合い関係も考慮にいと、これら灰色の覆土をもつものは他の遺構同様中世に埋没したと考えられる。

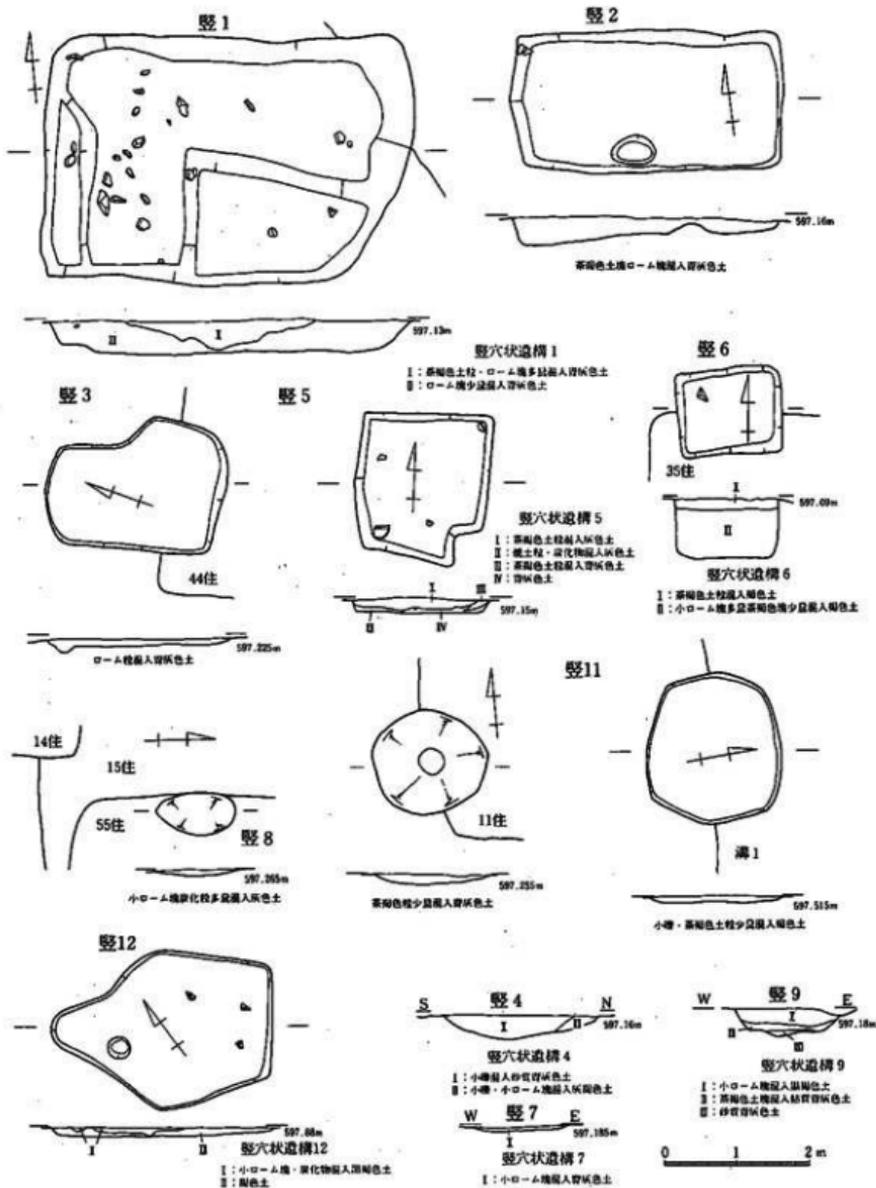
次に、各溝について概観すると、溝3・6は規模・方向などの点から、つながっていて方形の区画を有していたと予想され、集落内に生活用水として引かれてきたものと考ええる。溝8は規模が大きく、I地区北東部ではほぼ直角におれる。底部には鉄分が沈殿しており滞水していたことが窺える。おそらく、生活用水として引水された堰で、さらにここから小さい溝によって取水していたと思われる。また、I地区の溝5とV地区の溝12・13は、共に覆土が黒褐色を呈し、方向がほぼ一致することから同じ溝であったと思われる。尚、方形の区画を有する溝4は、覆土および底面の様相から水を伴っていたとは考え難く、その性格は不明である。

以上、簡単にふれてきたが、これらの溝の埋没時期は、覆土が灰色のものは前述の通り中世に、それ以外のものは住居址との切り合い関係により溝5はV期以前、溝14はVI期以前と考えられる。尚、流れの方向等さらに検討を要す。

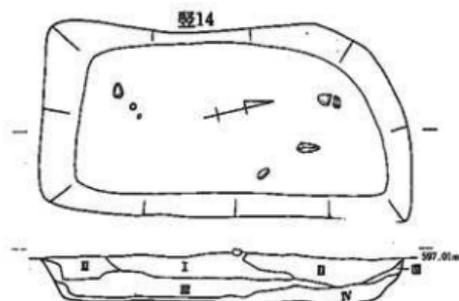
(山田 真一)

表3 溝一覽表

溝号	位 置	方 向	最大幅 (cm)	断面形	遺 物	切 り 合 い 関 係	備 考
1	I地区 南側	西—東	不明	U字形	縄文土器・石鏝	全ての遺構に先行する	
2	I地区 南西	南西—北東	150	U字形			溝1に合流
3	I地区中央西側	南—北—西	75	U字形	須恵器・土師器	8・9・27住、12・8、溝1を切る	
4	II地区 中央	南—北—東	25	U字形		溝7を切る	断続的
5	I地区 中央	北西—南東	170	U字形—V字形		溝1を切り16・20・21、14・11に切られる	
6	I地区 南西	南—北	70	U字形		溝1を切り溝10に切られる	溝2とつながる
7	I地区 南	北西—南東	135	浅いU字形		溝4に切られる	
8	I地区 東側	南—北—東	265	U字形	須恵器・内耳土器	溝1を切る	
9	I地区 東側	南—北	40	U字形		溝1・33・46住を切る	溝8に合流
10	I地区 南側	西—東	40	U字形	須恵器・土師器	51・52住を切る	
11	IV地区 北東	北—南	50	U字形		67住を切る	
12	V地区 中央	北—南	85	U字形		92住に切られる	
13	V地区 北	西—東	105	V字形		15に切られる	溝12と6分岐
14	VI地区 中央	南西—北東	45	U字形		94・95住に切られる	

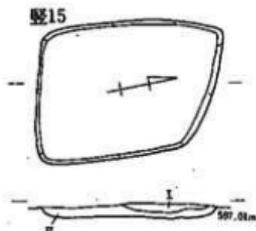


第54圖 豎穴狀遺構(1)



豎穴狀遺構14

- I: 紫褐色土粒、 $\phi$ - $\mu$ 粒多量混入灰白色土
- II: 小 $\phi$ - $\mu$ 量混入灰白色土
- III: 紫褐色土塊、 $\phi$ - $\mu$ 粒多量混入黃褐色土
- IV:  $\phi$ - $\mu$ 粒少量混入黃褐色土

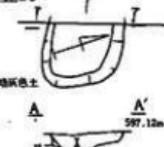


豎穴狀遺構15

- I: 紫褐色土塊混入灰白色土
- II: 紫褐色土粒混入灰白色土塊、炭化物混入灰白色土

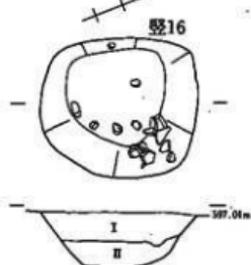


豎穴狀遺構20



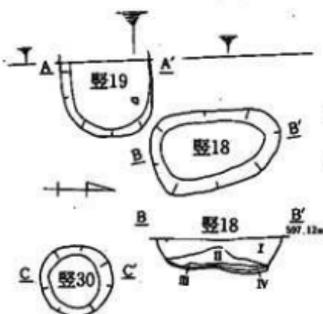
豎穴狀遺構22

- I: 紫褐色土粒少量混入暗褐色土
- II: 黃色土塊、紫褐色土粒多量混入灰白色土



豎穴狀遺構16

- I: 紫褐色土粒混入灰白色土
- II: 紫褐色土粒、 $\phi$ - $\mu$ 粒混入黃褐色土



豎穴狀遺構18

- I: 紫褐色土粒、黃色土粒多量混入灰白色土
- II: 紫褐色土粒少量混入灰白色土
- III: 紫褐色土粒、黃色土粒、炭化物土塊多量混入灰白色土
- IV: 紫褐色土粒混入灰白色土

豎穴狀遺構19

- I: 紫褐色土粒、炭化物混入灰白色土
- II: 紫褐色土塊、黃色土塊多量、炭化物混入灰白色土

豎穴狀遺構30

- I: 紫褐色土粒、灰白色土塊混入黃褐色土
- II: 紫褐色土粒、灰白色土塊炭化物混入暗褐色土
- III: 紫褐色土粒、土塊多量混入黃褐色土
- IV: 紫褐色土粒、土塊混入黃褐色土

豎穴狀遺構17

- I: 紫褐色土粒混入灰白色土
- II:  $\phi$ - $\mu$ 粒、紫褐色土粒少量混入灰白色土
- III: 紫土塊混入灰白色土
- IV: 紫褐色土粒多量混入灰白色土
- V:  $\phi$ - $\mu$ 粒、紫褐色土粒混入灰白色土
- VI:  $\phi$ - $\mu$ 粒多量混入灰白色土
- VII: 紫褐色土粒少量混入灰白色土

豎穴狀遺構21

- I: 紫褐色土粒、炭化物混入灰白色土
- II: 紫褐色土塊、黃色土塊混入灰白色土

豎穴狀遺構23

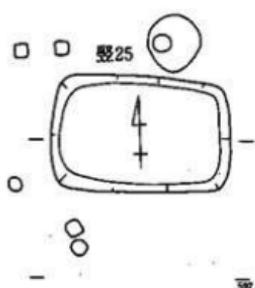
- I: 紫褐色土粒混入灰白色土
- II: 紫褐色土粒多量、黃色土粒混入灰白色土

豎穴狀遺構24

- I: 紫褐色土粒混入灰白色土
- II: 紫褐色土粒多量混入灰白色土

0 1 2 m

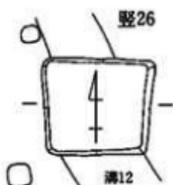
第55圖 豎穴狀遺構(2)



豎25

豎穴狀遺構25

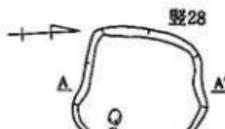
- I: 深褐色土粒層入暗灰色土
- II: 深褐色土粒多量層入灰色土
- III: 深褐色土粒少量層入灰色土
- IV: 深褐色土粒層入灰色土
- V: 深褐色土粒、W-A粒層入灰色土



豎26

溝12

深褐色土粒多量、黃色土粒少量層入灰色土

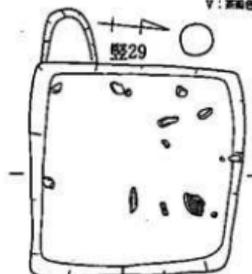


豎28

豎27

豎穴狀遺構28

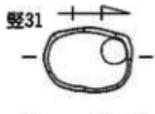
- I: 深褐色土粒、塊土、炭化物層入灰色土
- II: 深褐色土粒、灰色土層層入灰色土



豎29

豎穴狀遺構29

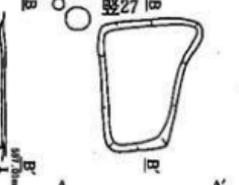
- I: 深褐色土粒、塊土、炭化物、灰色土層層入黃灰色土
- II: 深褐色土粒、塊土、炭化物、灰色土層層入暗灰色土
- III: 深褐色土粒多量、塊土、炭化物、灰色土層層入灰色土
- IV: 灰色土層層入深褐色土



豎31

豎穴狀遺構31

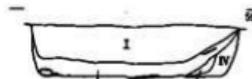
- I: 深褐色土粒、灰色土粒、塊土、炭化物層入黃灰色土
- II: 深褐色土粒、灰色土層層入黃灰色土
- III: 深褐色土粒、灰色土層層入黃褐色土
- IV: 深褐色土粒、土層、灰色土層層入黃褐色土



豎32

豎穴狀遺構32

- I: 深褐色土粒層入灰色土
- II: 深褐色土粒層層入暗灰色土
- III: 深褐色土粒多量、暗褐色土層層入灰色土
- IV: 深褐色土粒少量層入暗灰色土



豎33

豎穴狀遺構33

深褐色土粒灰色土粒多量層入黃灰色土

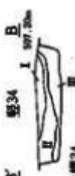


豎34

豎35

豎穴狀遺構35

- I: 深褐色土粒層入黃灰色土
- II: 深褐色土粒、塊土、炭化物層入黃灰色土
- III: 深褐色土粒、塊土、炭化物層入黃褐色土

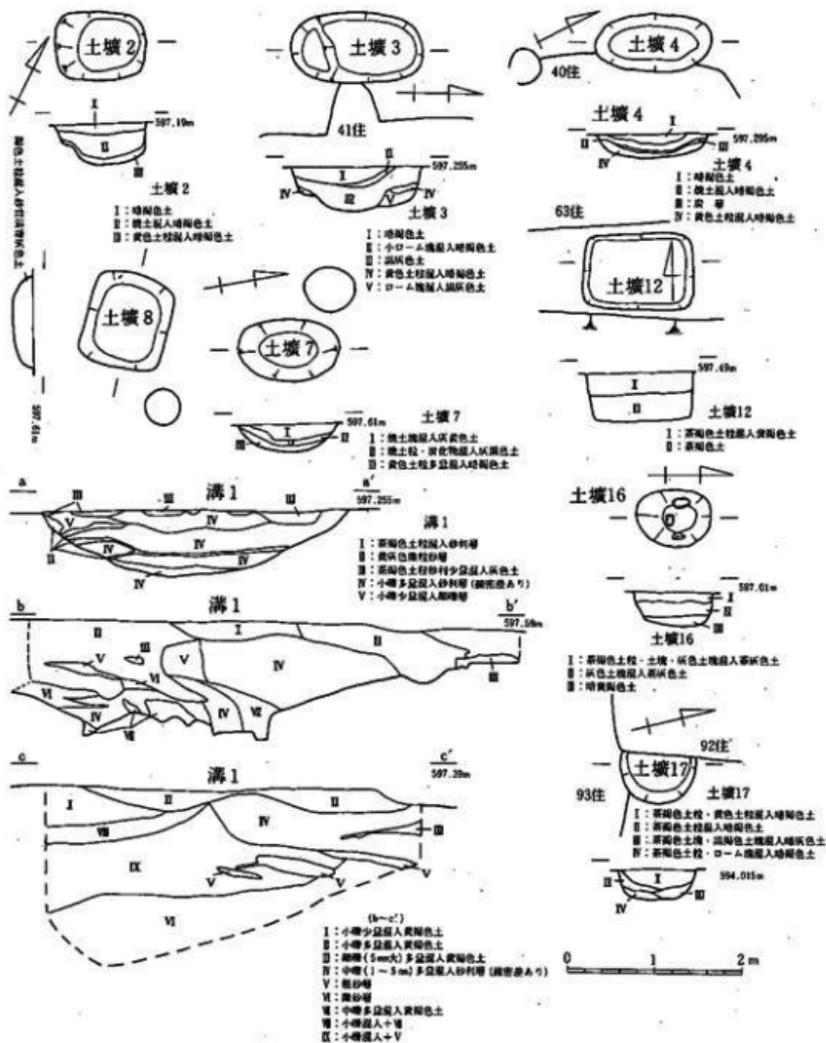


豎36

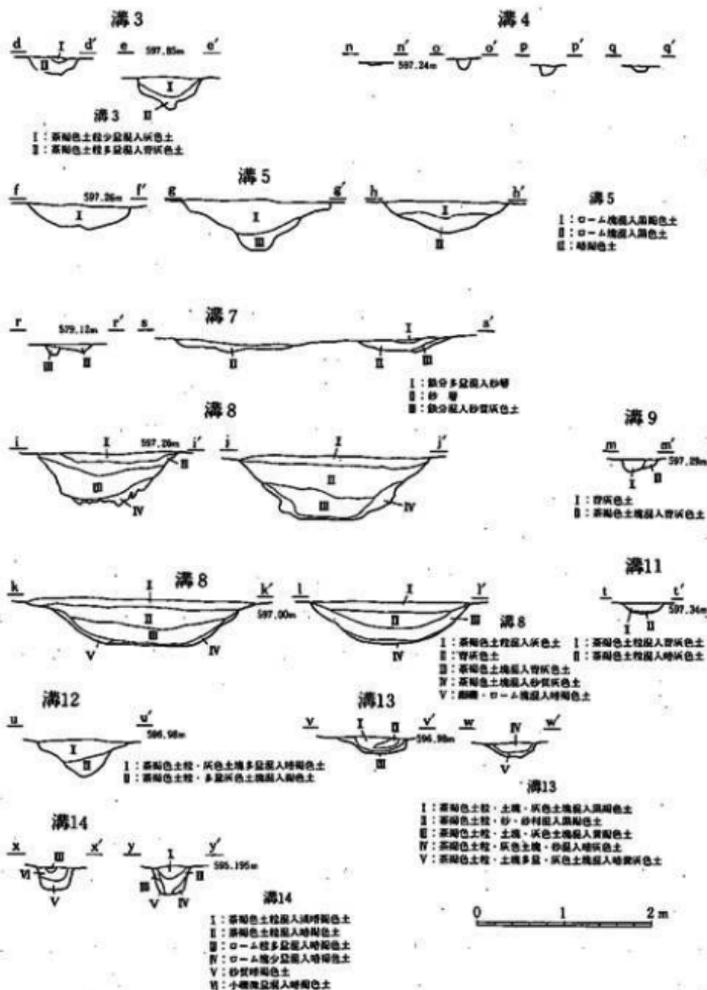
豎穴狀遺構36

- I: 深褐色土粒、炭化物層入黃灰色土
- II: 深褐色土粒、塊土、灰色土層層入黃褐色土

第56圖 豎穴狀遺構(3)



第57回 土墳・溝 (1)



第58图 沟 (2)

### 第3節 遺物

#### 1 土器

期日的な制約のため、すべての土器個々について細かな観察がなされず、土器を概観して、その共伴の傾向を把えて遺構の時期を把握するため便宜的にⅠ～Ⅲという時期を設定した。それは試論であり今後更に検討が必要である。尚、紙面の都合上ここでは供膳形態中心に書きたいと思う。又土器器形の名称については、高台の付くものを坑。そうでないものを坏。器高の低いものを皿とした。

Ⅰ期の遺物を出す代表的な住居に第37・38・77号住居址がある。供膳形態には土師器坏があり内面黒色処理（以下内黒と略記する）するものとしなないものがある。内黒坏は丸底気味の底部から内湾する口縁部が稜を境に短かく外傾し口縁端部は再び内傾するものの丸底の底部から内湾しつつ立ちあがるものがある。内黒以外のものは、内湾気味に大きく開いた口縁部下位内外面に稜を持ち丸底の底部に移行するものである。煮沸形態ではハケで調整された土師器甕（以下ハケ甕と略記する）とミガキを施した土師器甕がある。

Ⅱ期の遺物を出す代表的な住居に第68号住居址がある。供膳形態は出土遺物が少なく詳細は不明であるが裏宝珠状のつまみが付き、かえりのある小形の須恵器蓋がある。煮沸形態では鳥帽子状の細長い体部に外反する口縁部をつけ底部に木葉痕を残す土師器甕があり、下部から3～4段に分けて作り積重ねる成形が認められるものである。又粘土紐巻き上げ痕の目立つものも多い。

Ⅲ期の遺物を出す代表的な住居に第11号住居址がある。供膳形態では須恵器坏・土師器坏がある。須恵器坏には2種あり無台で器高が高く底部を回転ヘラ切りをした後手持ちヘラ削りを行なったやや丸底を呈すものと、無台で器高が低く口径・底径が大きく、底部を回転ヘラ切りした後手持ちヘラ削りを行った所謂盤状を呈すものがある。土師器坏は上記のやや丸底を呈す須恵器坏に類似するものである。この類の土師器坏は、本遺跡より西へ3 km 弱の地点にある新村秋葉原1・2号墳より出土をみている。煮沸形態では土師器甕が2大別でき、ハケ甕・それ以外のものがあり量的には後者が多い。ハケ甕は厚手長胴で丸底に木葉痕を残すものと、厚手丸胴で底部が大きいものがある。ハケ甕以外のものには厚手で胴が張り胴部をナゲ又は削り調整を行うものがある。

Ⅳ期の遺物を出す代表的な住居に第6号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏があり土師器坏はきわめて少ない。須恵器坏には無台と有台があり、無台坏は回転ヘラ切り痕を残したやや丸底を呈すものがある。有台坏は底部を回転ヘラ切りをした後回転ヘラ削りを行い高台は丸味をおびた底部端に外反気味に付く所謂ふんばる高台をなすものである。その他供膳形態に坏部が脚部より大きい須恵器高坏と脚部の太い土師器高坏がある。煮沸形態において土師器甕はバラエ

ティーに富む。ナデ調整された甕は、外湾する口縁に最大径があり長胴を呈し胴部に粘土紐巻き上げ度が残る木業底であるもの。八の字形に長く外湾する口縁に最大径があり肩部が張るもの等がある。内外面ヘラミガキ調整された甕は口縁部が短く立ち上がり気味に外反し肩部は強く張って横方向にのびるものである。ハケ甕は八の字形に外湾する口縁に最大径があり肩部張らずに底部へ集約し、ハケ目は不整方向で木業底であるものがある。

V期の遺物を出土する代表的な住居に第57号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器杯・土師器杯があるが主流は須恵器杯である。須恵器杯には無台と有台がある。無台杯には底部回転ヘラ切りをした後回転ヘラ削りを行うものと、底部回転糸切りのみ行っているものの2つに大別でき前者と後者の比はほぼ、10:1であった。又回転糸切りのみ行っているものは、二次底部面をなすものと、底部が大きく二次底部面をなさずに立ち上がるものに細分できる。有台杯は底部を回転ヘラ削り調整を行い高台は底部端よりやや内側に付くものである。又有台杯は口径12cm未満の小杯12cm以上16cm未満の杯・16cm以上の大杯の3種類が認められた。土師器杯には全体が赤褐色の色調で内面に放射状暗文を施す、所謂、甲斐型杯と呼ばれるものと、厚手で底部と体部下半をヘラ削りナデ調整を行う内黒杯があるが後者の個体数は非常に少ない。須恵器蓋は比較的大形で頂部が尖るあるいは扁平な擬宝珠状つまみを持つものと環状つまみを持つものがある。量的には前者が主流であり、形態的にはどちらも端部は丸味を持ちおさまるものが大部分で、端部が若干反り気味のものもある。その他、供膳形態は須恵器盤がある。煮沸形態では土師器甕と削り調整をするものがありハケ甕が主流である。ハケ甕は、くの字形に口縁部が外反し最大径が胴部上方にあり木業底を呈すものである。以上の器種他、ロクロナデ成形でカキ目を持たない土師器小形甕がある。

VI期の遺物を出土する代表的な住居に第59号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器杯土師器杯があるが主流は須恵器杯である。須恵器杯は無台と有台があり、無台杯はすべて底部回転糸切りを行っている。その中で体部が二次底部面を若干残し立ちあがるものと、底部はあまり大きくなく二次底部面をなさずに立ち上がるものに細分できる。有台杯は底部を回転ヘラ削り調整を行っているものと、回転ヘラ削りを行っているが中央に回転糸切り痕を残すものがある。両者とも巾太の高台が底部端より内側にほぼ直立につくものである。又V期と同様大・中・小の3種類の大きさの杯が認められた。尚上記の小杯は新村秋葉原3～5号墳出土の小杯に形態・手法の点で酷似する。土師器杯は、甲斐型杯のみで、他のタイプの杯はほとんどない。V期の甲斐型杯と比べると外径指数が50～60代と変化する。須恵器蓋はほとんどのものが扁平な擬宝珠状つまみを呈すもので数は少ないが若干頂部が尖るものもある。端部は嘴状のものと丸くおさまるものの2種である。煮沸形態では口縁部が短く外反がきつい土師器ハケ甕と器壁が薄く口縁がくの字に外反し胴部ヘラ削りの、所謂武蔵型と呼ばれているもの2種がある。その他の器種ではロクロ成形でカキ目調整を施す小形甕等があり本期より定形化する。

VII期の遺物を出土する代表的な住居に第60号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器杯・土

師器坏があり量的にはほぼ同量となる。須恵器坏は有台と無台があるが形態・手法ともVI期とほとんど変化はない。ただしVI期より有台坏がいくぶん減少する傾向にある。土師器坏は内黒の坏とそれ以外のものに分け、内黒の坏は底部に回転糸切り痕を残すものと回転糸切りを行ったのちナデ調整をするものである。又内黒以外の坏には甲斐型の坏と底部回転糸切り痕を残し内面ヘラミガキ調整をするものがあるが量は少ない。須恵器蓋は端部がもり上がり嘴状を呈するものが大部分となる。煮沸形態ではVI期とほとんど変化はないが、武蔵型の甕にコの字に外反する口縁を持つものが現れてくる。

VII期の遺物を出土する代表的な住居に第61号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏・土師器坏がある。須恵器坏でVII期にある有台坏は非常に少なくなり無台坏で底部に回転糸切り痕を残すもののみとなる。その中には、わずかに二次的底部面が残っているものと二次的底部面がまったくなくなるものがある。土師器坏は内黒坏で回転糸切りの底から直線的に体部が開くものが大部分をしめ、内黒以外の坏はきわめて少ない。又上記の土師器坏の中に口径16cm以上の大形のものもある。須恵器蓋はVII期とほぼ同様である。煮沸形態の土師器甕では、武蔵型の甕のほとんどがコの字に外反する口縁を持つものとなるが武蔵型の甕がしめる割合はへる。ハケ甕はVII期のものとほぼ同様である。

IX期の遺物を出土する代表的な住居に第47号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏・土師器坏・埴がある。量的には土師器坏・埴で内黒のものが主流をしめ、須恵器坏の量は著しく少なくなる。須恵器坏は有台と無台があるが有台坏はVIII期同様きわめて少ない。無台坏は回転糸切り痕を残す薄く極端に小さい底部より直線的に開くものである。土師器坏は回転糸切り痕を残すやや小さめの底部から内湾気味に体部が開くものである。土師器埴はほとんど内黒で回転糸切り痕を残す底部に断面が三角形の高台が直立に付くものである。供膳形態には上記の他に内黒の鉢がある。須恵器蓋はきわめて少量となる。煮沸形態ではハケ甕が主流をしめ若干武蔵型の甕もある。小形甕は前期と同様である。

X期の遺物を出土する代表的な住居址に第4号住居址がある。供膳形態の主なものに須恵器坏・土師器坏・埴・皿・灰釉碗・皿がある。この時期では土師器が主流をしめ、灰釉はこの時期から確実に姿を現す。須恵器坏はほとんどが回転糸切り痕を残す小さな底部よりやや内湾気味に体部が開く無台の坏であるが、量は少ない。又色調は灰色・黒灰色を呈し焼成胎土とも悪く多孔質の特徴的なもので所謂、酸化焰焼成の須恵器と呼ばれるものの範囲にはいるものではないかとみている。土師器坏・埴は内黒でミガキを施すものが主流でIX期とほぼ同様のものだが、埴の中に高台が下端まで丸いものがある。又坏には口径16cm以上の大形のものもある。土師器皿は内黒で底部に回転糸切り痕を残し下端まで短い丸い高台が付くものである。灰釉碗は底部および体部下半をヘラ削りをし所謂三日月高台が付くものと巾広の下端まで丸い高台の付くものがある。器壁は全体的に薄く八の字形に開き口縁端部がやや外反するものである。煮沸形態では最大径が胴部上方にあり口縁内部に

カキ目を施す土師器ハケ甕がある。土師器小形甕は変化はない。

Ⅺ期の遺物を出土する代表的な住居に第2号住居址がある。供膳形態の主なものに、土師器杯・皿・壺・灰釉碗がある。土師器杯は回転糸切り痕を残す小さな底部から内湾気味に体部が開くもので、この時期土師器皿は杯の器高の低いもの壺の器高の低いものを指し、杯・皿とも全体的に厚手できりも雑な所謂土師質土器になる。土師器壺はⅩ期のもとはほぼ同様の形態を示すが数量は減少する。灰釉碗は底部に回転糸切り痕を残し体部下半はへら削りがなされ、やや長めで下端まで丸い高台が付く深碗で、口縁内部に沈線がまわるものである。煮沸形態では羽釜が見れる。

Ⅺ期を代表する遺物を出土する住居に第3号住居址がある。供膳形態の主なものに土師器皿・杯・壺・灰釉碗・段皿がある。土師器皿・杯・壺ともⅪ期のもとはほぼ同様の形態を示すが、壺の中に高台が高い所謂足高高台と呼ばれるものがみられる。灰釉碗はⅪ期に比べるとやや高台が短くなり、器壁も厚くなる傾向を示す。灰釉段皿は回転糸切り痕を残す底部外側にわずかに丸く突出する程度の高台が付き直線的に横にのびるものである。

ⅩⅢ期を代表する遺物を出土する住居に第92号住居址がある。供膳形態の主なものに土師器皿・壺・灰釉碗・皿がある。土師器皿で無台のものは底部がⅩ期より厚くなり台状に突出する所謂疑似高台と呼ばれるものになり、有台のものは足高高台がⅩ期より顕著となる。灰釉碗はⅩ期とほぼ同様であるが、いくぶん小形になる。

以上、Ⅰ～ⅩⅢの時期分類は、調査団内で検討したものをまとめたものである。不備な点が数多くあると思われるが、御教示いただければ幸いである。

(山下 泰永)

参考文献

樋口丹一・佐沢治也『長野県中央道城塞文化財包蔵地発掘調査報告書一諏訪市その4一』長野県教育委員会 1975

小林康男・島田善男『吉田内井一長野県諏訪市吉田内井遺跡発掘調査報告書一』塩尻市教育委員会 1983

岡田正彦『平安時代土師器等の断片試論一特に長野県中南部地方の住居址出土土器を中心として一』『信濃』29巻-9号 1977年

森野繁幸・高木洋・嶋崎敏一『老阿古黒土群発掘調査報告書』秋田市教育委員会 1981

斎藤孝正他『正室1号発掘調査報告書』恵那市教育委員会 1983

前川英『築城期における灰釉陶器生産最末期の踏検地一諏訪市百代寺遺出土遺物を中心として一』『諏訪市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅲ』諏訪市教育委員会 1984

神代島二郎他『新村秋葉原遺跡発掘調査報告書』松本市教育委員会 1982

表4 出土土器観察表

高	出土地点	器別	器形	口径 (cm)		高さ (cm)		色		調	底形・罫線・形等の特徴	備	考
				口径	底径	外	内	外	内				
1	1 町住	土器蓋	円	12.9	—	4.5	底	黒	黒	内	内外面より、底面手持ち痕あり		
2	〃	須臾蓋	皿	4.0	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、裏面縁部中央、内面しぼり線		
3	〃	土師器	皿	20.9	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、裏面縁部中央へラケズリ、内面縁部中央へラケズリ		
4	1 町住	土師器	円	11.1	—	4.0	底	黒	黒	内	内、外周より、底面手持ち痕あり		内黒
5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	底面手持ち痕あり		
6	〃	小形蓋	〃	11.8	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、内面工具によるケツ		
7	7 町住	〃	円	14.9	7.8	8.5	底	黒	黒	内	内、外周より		内黒
8	〃	〃	〃	13.9	4.8	8.0	底	黒	黒	内	外周より、底面手持ち痕あり		
9	〃	須臾蓋	皿	11.2	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、内面縁部中央へラケズリ		
10	〃	土師器	皿	19.6	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、内面縁部中央へラケズリ		
11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	底面手持ち痕あり		
12	9 町住	須臾蓋	円	9.0	—	2.1	底	黒	黒	内	底面手持ち痕あり		
13	〃	土師器	小形蓋	22.4	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、内面縁部中央へラケズリ		
14	〃	〃	〃	9.2	6.7	10.8	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		本底のみ有り
15	〃	〃	〃	21.9	6.4	10.8	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		本底のみ有り
16	1 11 町住	須臾蓋	円	12.2	6.1	4.0	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		底面外周からの寄れ有り
17	〃	〃	〃	15.6	6.2	5.1	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
18	〃	土師器	〃	13.1	8.0	4.6	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
19	〃	須臾蓋	〃	10.3	8.1	3.8	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
20	〃	土師器	皿	25.0	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、内面縁部中央へラケズリ		
21	〃	〃	〃	22.5	12.0	21.9	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、内面縁部中央へラケズリ		
22	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、内面縁部中央へラケズリ		
23	1 6 町住	須臾蓋	圓	17.0	—	—	底	白	白	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
24	〃	〃	円	14.4	9.1	4.6	底	白	白	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
25	〃	〃	〃	14.6	6.5	8.9	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
26	〃	〃	〃	15.0	11.5	4.8	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
28	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
29	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
30	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
31	〃	土師器	〃	14.7	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
32	〃	須臾蓋	〃	7.4	—	—	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
33	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
34	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		
35	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底	黒	黒	内	口縁部外周下縁へラケズリ、底面手持ち痕あり		



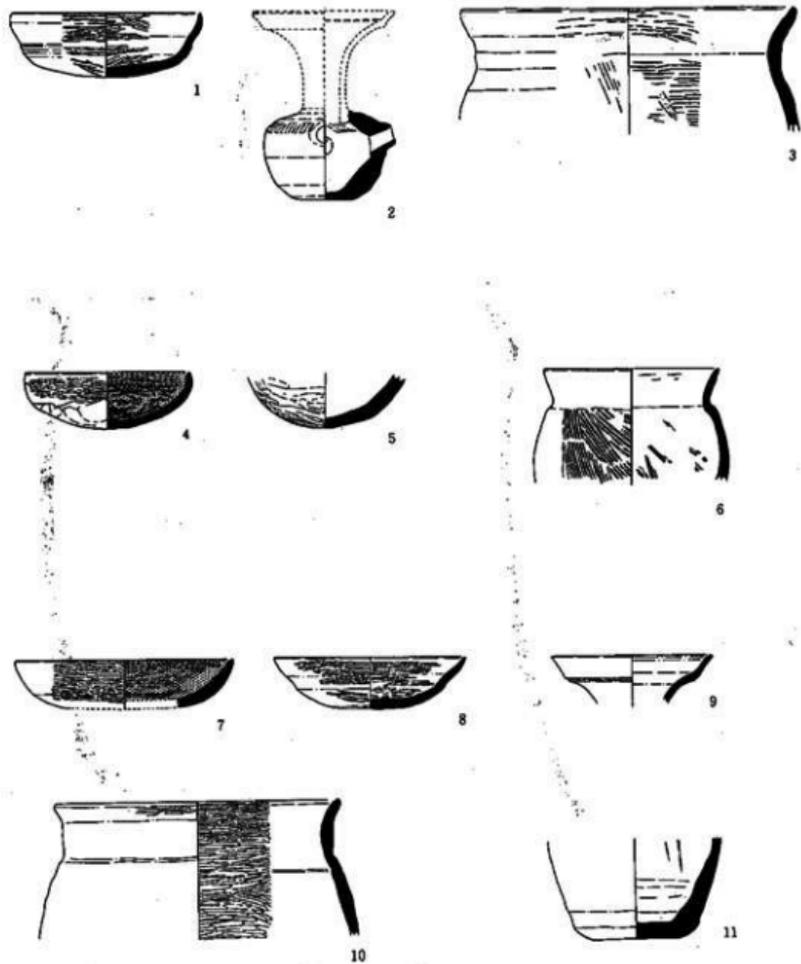


No	出土地点	産別	産名	寸法 (cm)		色	調		成 形 ・ 調 整 ・ 形 態 の 特 徴	備 考
				口径	深さ		外面	内面		
109	土師	円	土師	5.8		黒	黒	黒	口縁部、底面は赤褐色、内面は黒	内 黒
109	〃	〃	〃	14.8		黒	黒	〃	〃	〃
109	〃	〃	〃	10.4	6.4	黒	黒	〃	〃	〃
111	〃	〃	〃	8.2		黒	黒	〃	〃	〃
112	〃	〃	〃	6.8		黒	黒	〃	〃	〃
113	〃	〃	〃	6.8		黒	黒	〃	〃	〃
114	〃	〃	〃	11.8		黒	黒	〃	〃	〃
115	〃	〃	〃	14.8		黒	黒	〃	〃	〃
115	〃	〃	〃	17.0		黒	黒	〃	〃	〃
117	〃	〃	〃	12.7	6.8	黒	黒	〃	〃	〃
118	〃	〃	〃	12.7	6.8	黒	黒	〃	〃	〃
119	〃	〃	〃	11.8	4.1	黒	黒	〃	〃	〃
120	〃	〃	〃	11.8	4.2	黒	黒	〃	〃	〃
121	〃	〃	〃	11.8	3.5	黒	黒	〃	〃	〃
122	〃	〃	〃	8.2		黒	黒	〃	〃	〃
123	〃	〃	〃	12.7		黒	黒	〃	〃	〃
124	〃	〃	〃	12.7	4.5	黒	黒	〃	〃	〃
125	〃	〃	〃	12.4	3.7	黒	黒	〃	〃	〃
126	〃	〃	〃	7.2		黒	黒	〃	〃	〃
127	〃	〃	〃	15.0		黒	黒	〃	〃	〃
128	〃	〃	〃	8.6		黒	黒	〃	〃	〃
129	〃	〃	〃	14.9		黒	黒	〃	〃	〃
130	〃	〃	〃	9.6		黒	黒	〃	〃	〃
131	〃	〃	〃	8.2		黒	黒	〃	〃	〃
132	〃	〃	〃	25.8		黒	黒	〃	〃	〃
133	〃	〃	〃	7.6		黒	黒	〃	〃	〃
134	〃	〃	〃	16.0		黒	黒	〃	〃	〃
135	〃	〃	〃	13.4	3.9	黒	黒	〃	〃	〃
136	〃	〃	〃	4.3		黒	黒	〃	〃	〃
137	〃	〃	〃	6.5		黒	黒	〃	〃	〃
138	〃	〃	〃	9.5		黒	黒	〃	〃	〃
139	〃	〃	〃	10.2	4.1	黒	黒	〃	〃	〃
140	〃	〃	〃	12.2	5.6	黒	黒	〃	〃	〃
141	〃	〃	〃	15.2	5.1	黒	黒	〃	〃	〃
142	〃	〃	〃	15.2	5.1	黒	黒	〃	〃	〃
143	〃	〃	〃	15.2	5.1	黒	黒	〃	〃	〃



品名	仕立地点	種類	形状	寸法 (cm)	重	色	成形・調整・形態の特徴	備	考
120	I 4位	頂蓋	円	口径 5.5	底高 1.5	外周 灰一黒	内面 灰一黒	内蓋 灰一黒	口縁部は、底面は赤色切りか
181					5.0				口縁部は、底面は赤色切り
182					5.4		灰白一灰		口縁部は、底面は赤色切り
183					5.1		灰灰一黒		口縁部は、底面は赤色切り
184					5.5		灰一黒		口縁部は、底面は赤色切り
185					10.4 6.8 4.1		黒 灰		口縁部は、底面は赤色切り、付け灰白のももコナダ
186					9.8		灰		口縁部は、底面は赤色切り、付け灰白のももコナダ
187					5.8		灰 黒		口縁部は、底面は赤色切り
188		灰 動	楕	14.6		灰 灰	灰 灰		口縁部は、底面は赤色切り
189			楕	14.8 7.1 2.9					口縁部は、付け灰白のももコナダ、体面外周下半へラケズリ
190			楕	6.5		灰	灰		口縁部は、底面は赤色切り切りのももコナダへラケズリか、付け灰白のももコナダ
191					7.7	灰 白	灰 白		口縁部は、外周下半部へラケズリ、底面は赤色切り、付け灰白のももコナダ
192					6.4	灰	灰		口縁部は、底面は赤色切り、付け灰白のももコナダ
193					7.9				口縁部は、底面は赤色切り、付け灰白のももコナダ
194					15.4	黒 灰	黒 灰		口縁部は、底面は赤色切り、付け灰白のももコナダ
195					14.5	灰	灰		口縁部は、底面は赤色切り、付け灰白のももコナダ
196			小 楕	2.4 0.8 0.7		灰 白			口縁部は、底面は赤色切り
197		土 師 器	楕	20.8		赤 灰	黒		口縁部は、内面は赤色切り
198					10.9	灰 赤一黒			口縁部は、内面は赤色切り
199			小 形 楕	13.9		黒	黒		口縁部は、底面は赤色切り
200					12.7	赤 黒	赤 黒		口縁部は、底面は赤色切り
201					14.0	明 赤 黒	明 赤 黒		口縁部は、底面は赤色切り
202					6.3	黒 赤 黒	黒 赤 黒		口縁部は、底面は赤色切り
203					8.5	灰 黒一赤 黒	灰 黒		口縁部は、底面は赤色切り、底面外周上半部は赤色切り
204					10.2 6.5 9.1	灰 黒一赤 黒	灰 黒		口縁部は、底面は赤色切り、底面外周上半部は赤色切り
205					7.7	灰 赤			口縁部は、底面は赤色切り
206			楕			灰 黒一黒	灰 黒一黒		口縁部は、底面は赤色切り
207					23.8	灰 黒一赤 黒	灰 黒一赤 黒		口縁部は、底面は赤色切り、内面は赤色切り
208					10.6	黒 赤一黒	黒 赤一黒		口縁部は、底面は赤色切り、内面は赤色切り
209					21.2	赤 黒	赤 黒		口縁部は、底面は赤色切り、内面は赤色切り
210					28.4	灰 黒	灰 黒		口縁部は、底面は赤色切り、内面は赤色切り
211					24.2	灰 黒一赤 黒	灰 黒一赤 黒		口縁部は、底面は赤色切り、内面は赤色切り
212					10.8	明 赤 黒一黒	明 赤 黒一黒		口縁部は、底面は赤色切り、外周は赤色切り、内面は赤色切り
213					21.4 10.2 30.8	灰 黒一赤 黒	灰 黒一赤 黒		口縁部は、底面は赤色切り、内面は赤色切り、底面外周は赤色切り
214		灰 黒 器			24.0	灰 黒 灰	灰 黒 灰		口縁部は、底面は赤色切り、内面は赤色切り
215					26.0	黒 灰	黒 灰		口縁部は、底面は赤色切り

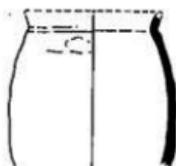




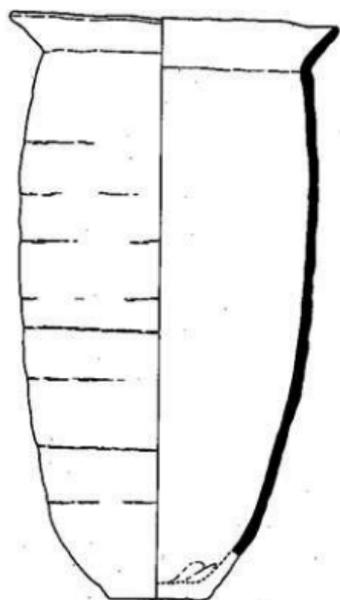
第59图 土器实测图(1) 37·38·77住出土



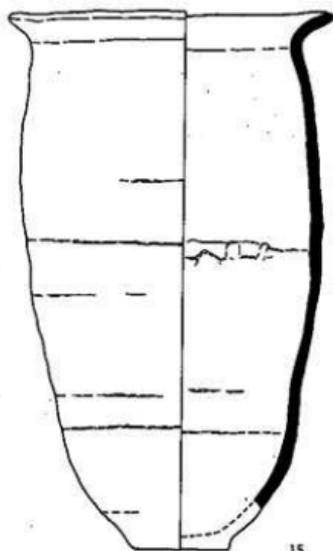
12



13



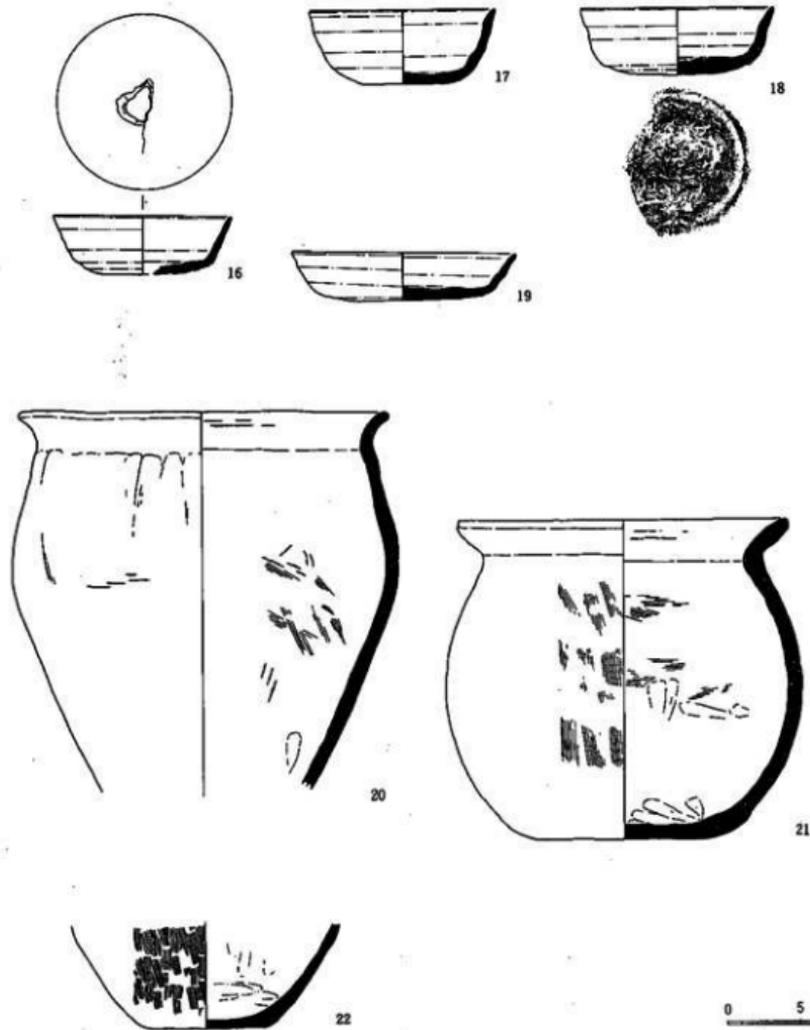
14



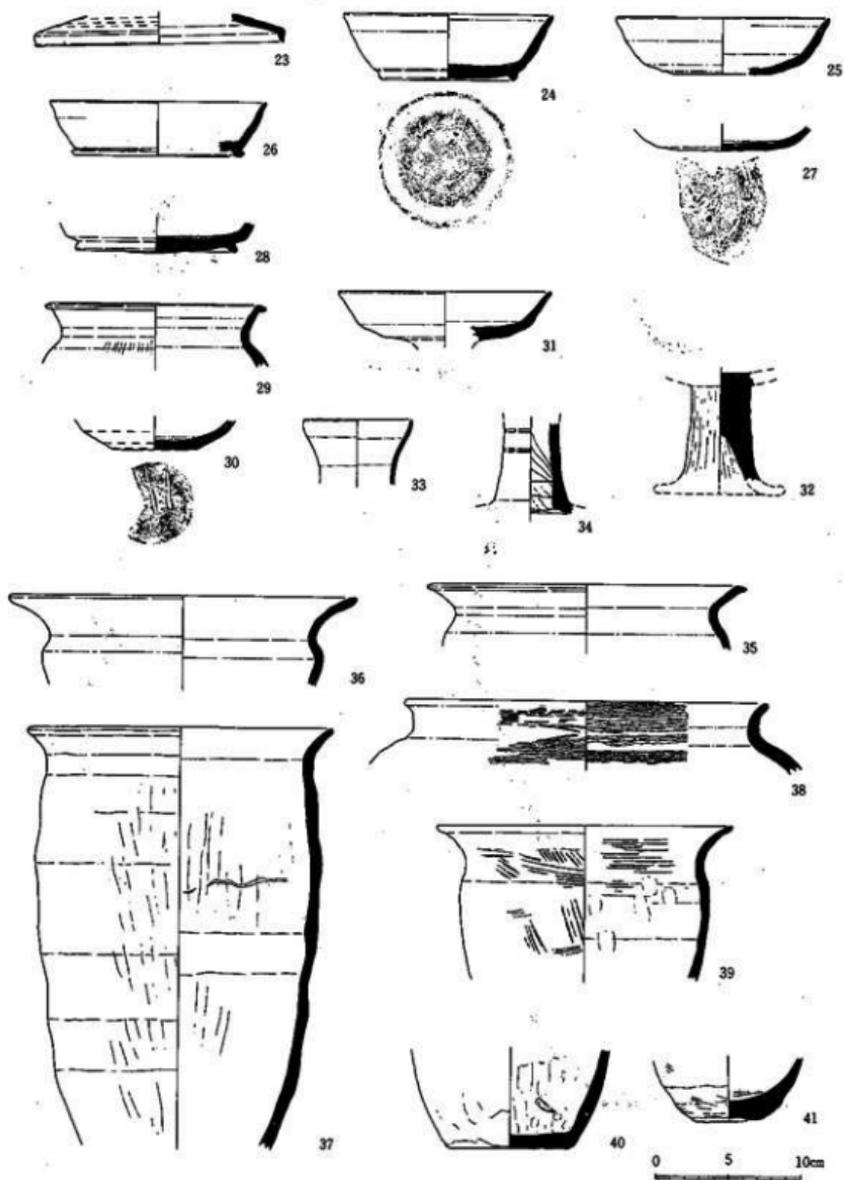
15

0 5 10cm

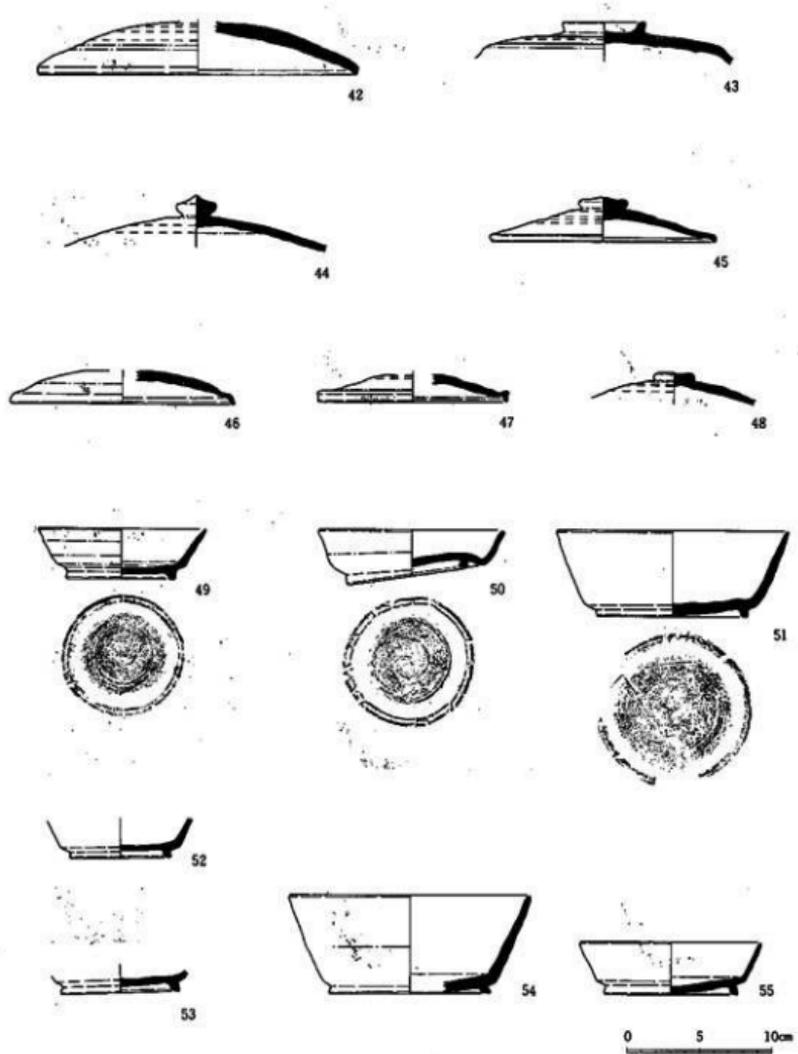
第60图 土器実測図(2) 68住出土



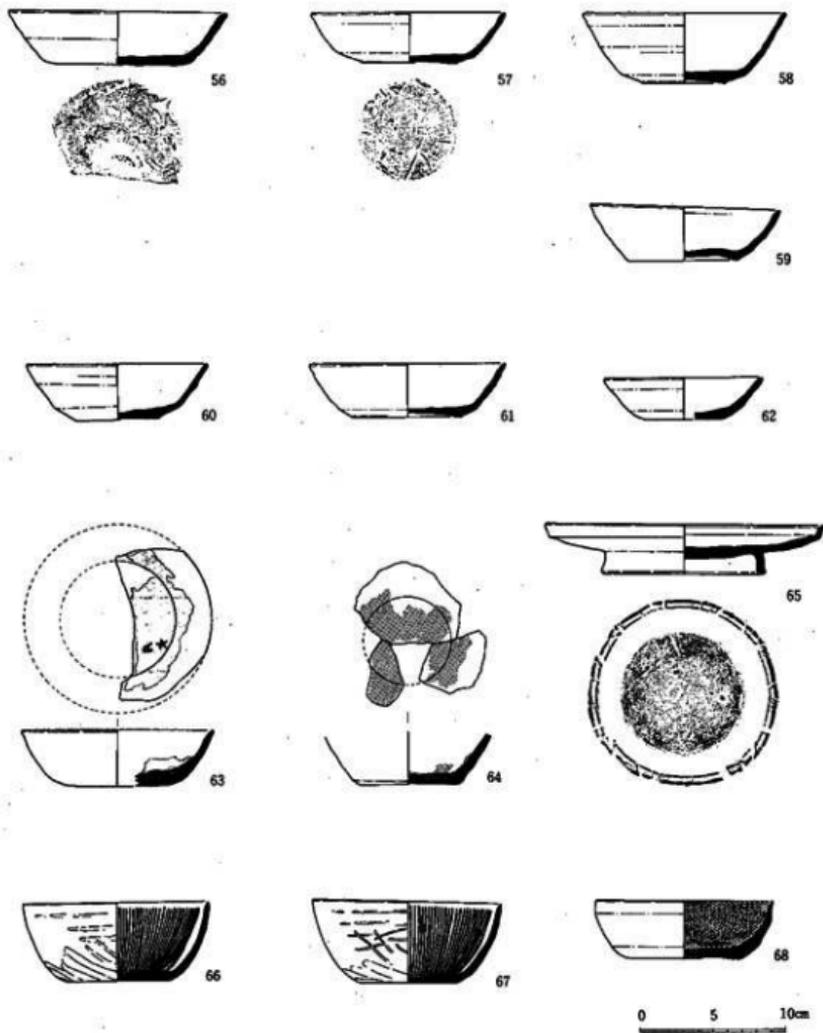
第61図 土器実測図(3) 11住出土



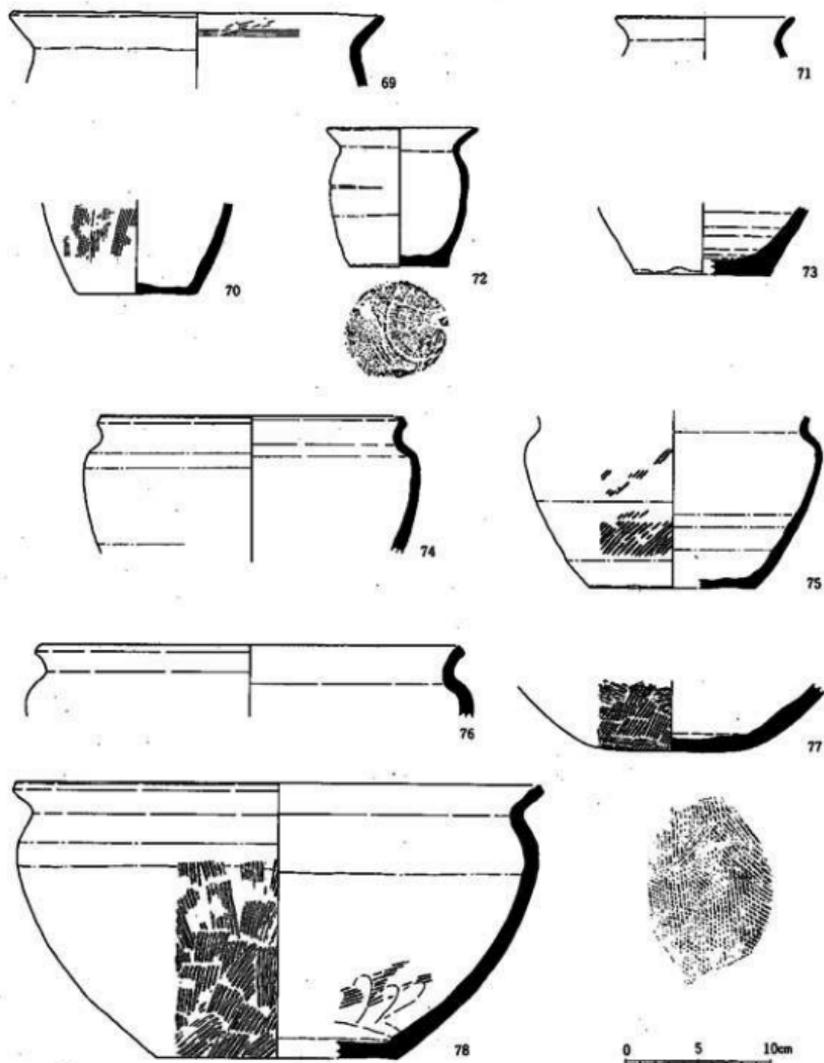
第62图 土器实测图(4) 6住出土



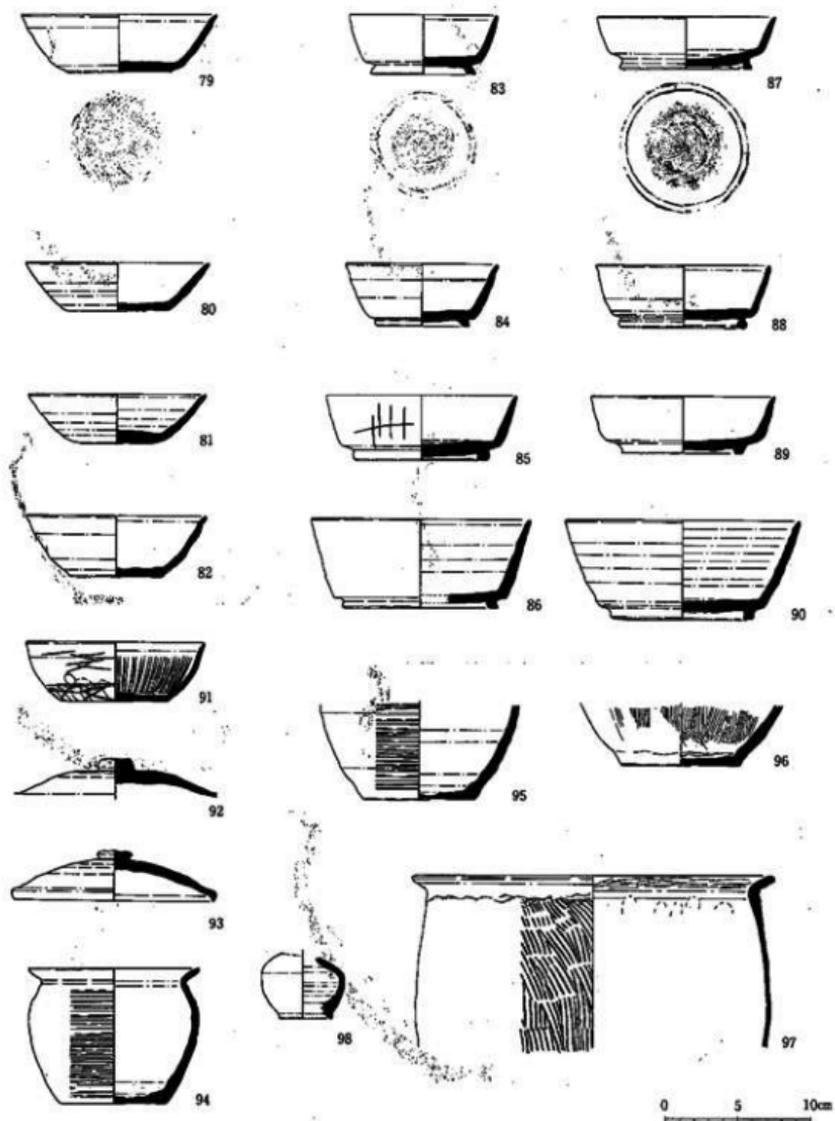
第63图 土器実測図(5) 75住出土



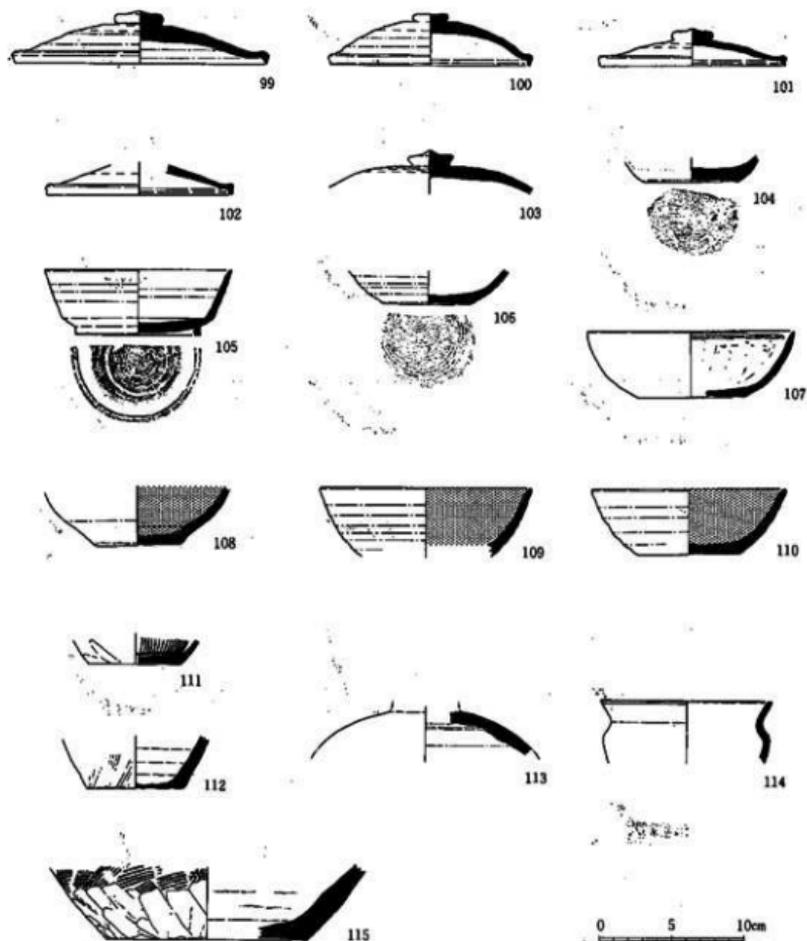
第64圖 土器実測圖(6) 75住出土



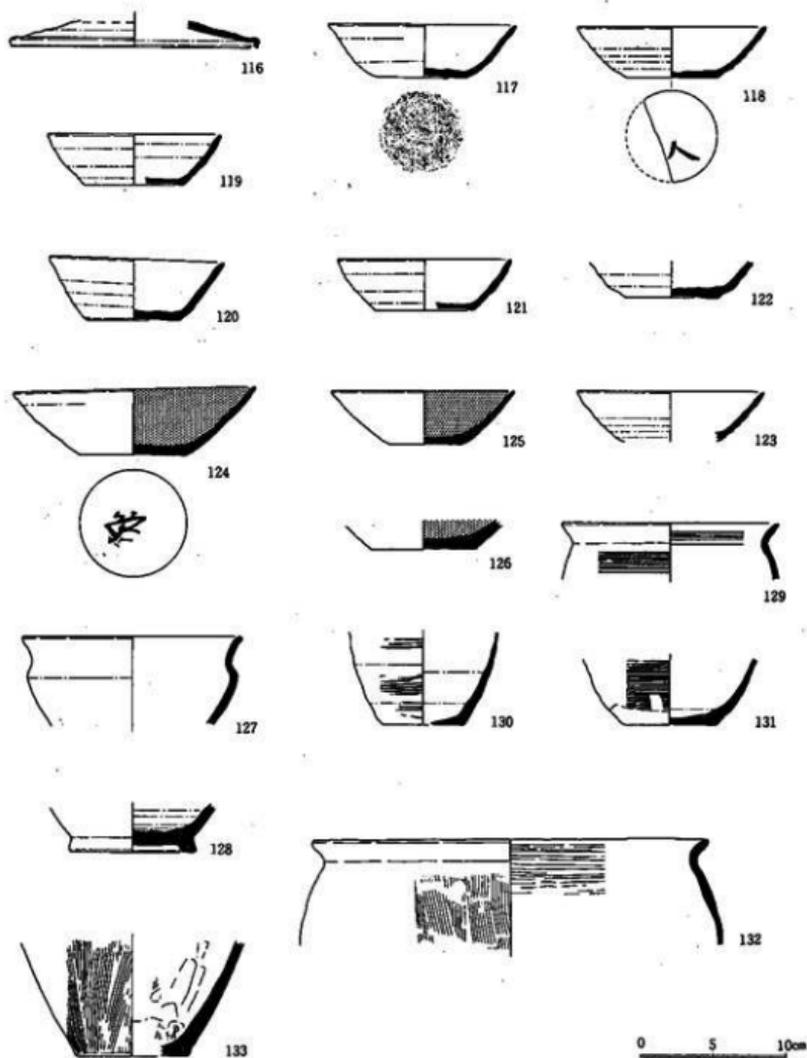
第65圖 土器実測圖(7) 75住出土



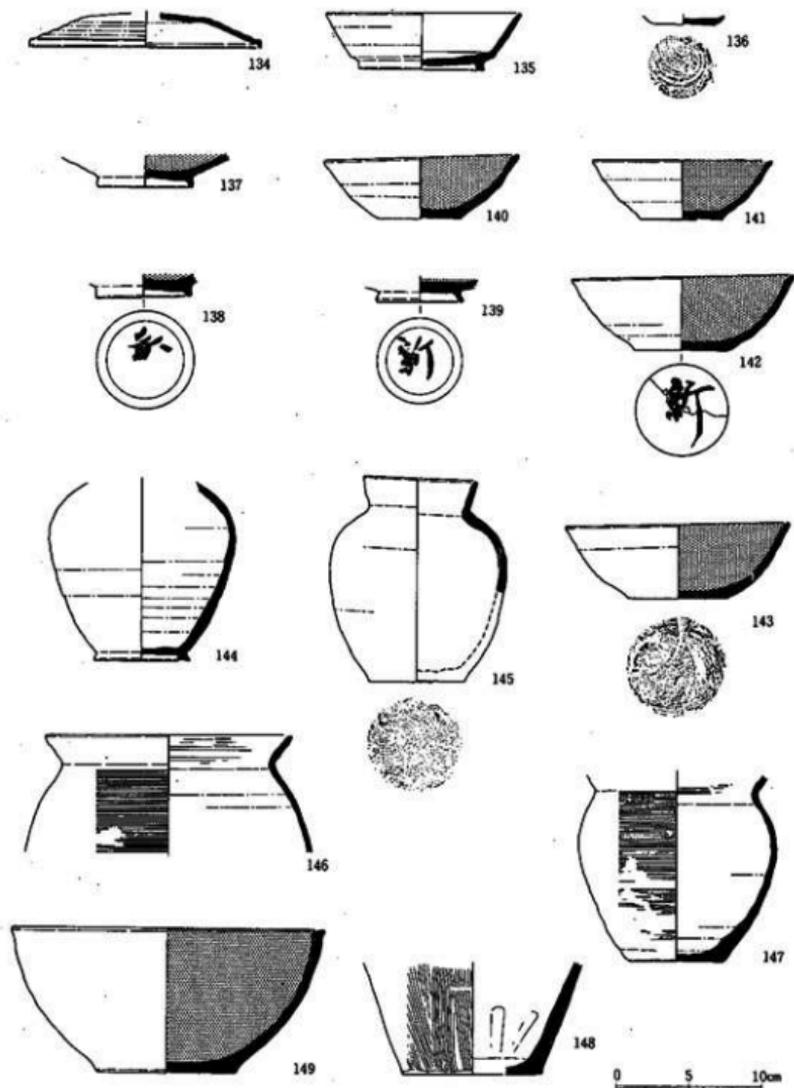
第66图 土器実測图(8) 59住出土



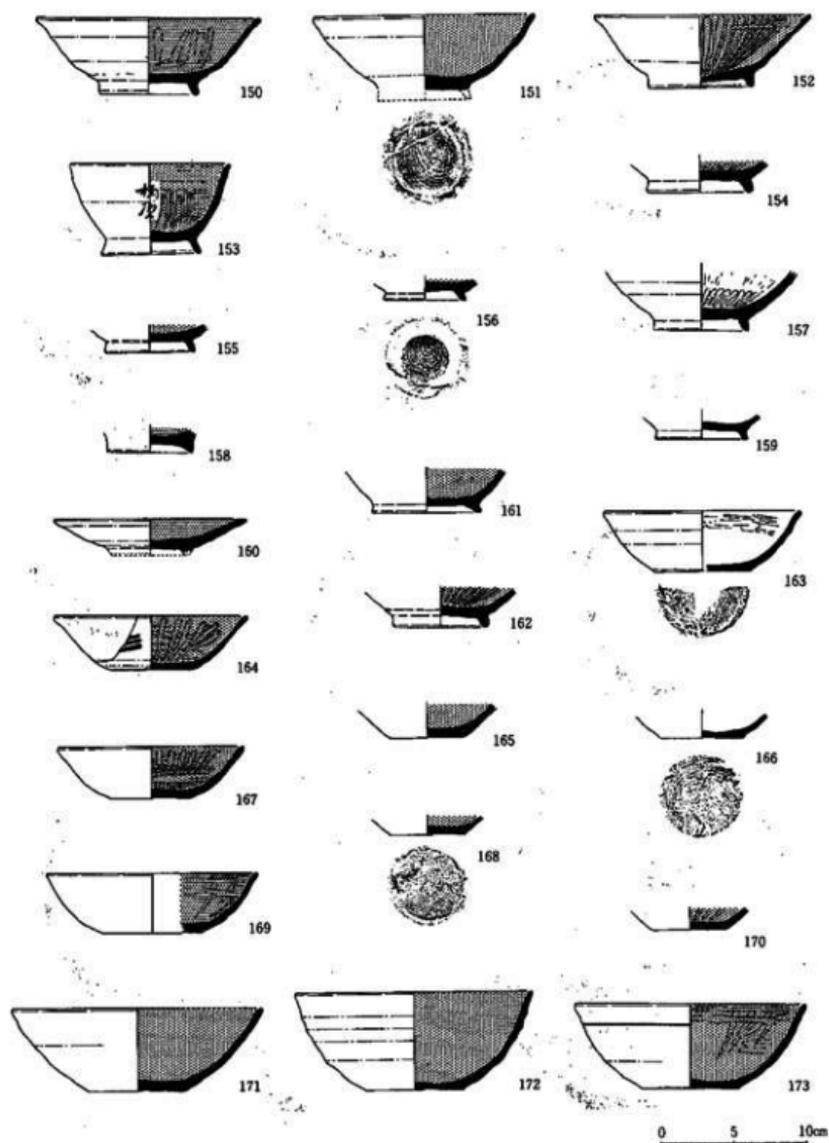
第67圖 土器実測圖(9) 60住出土



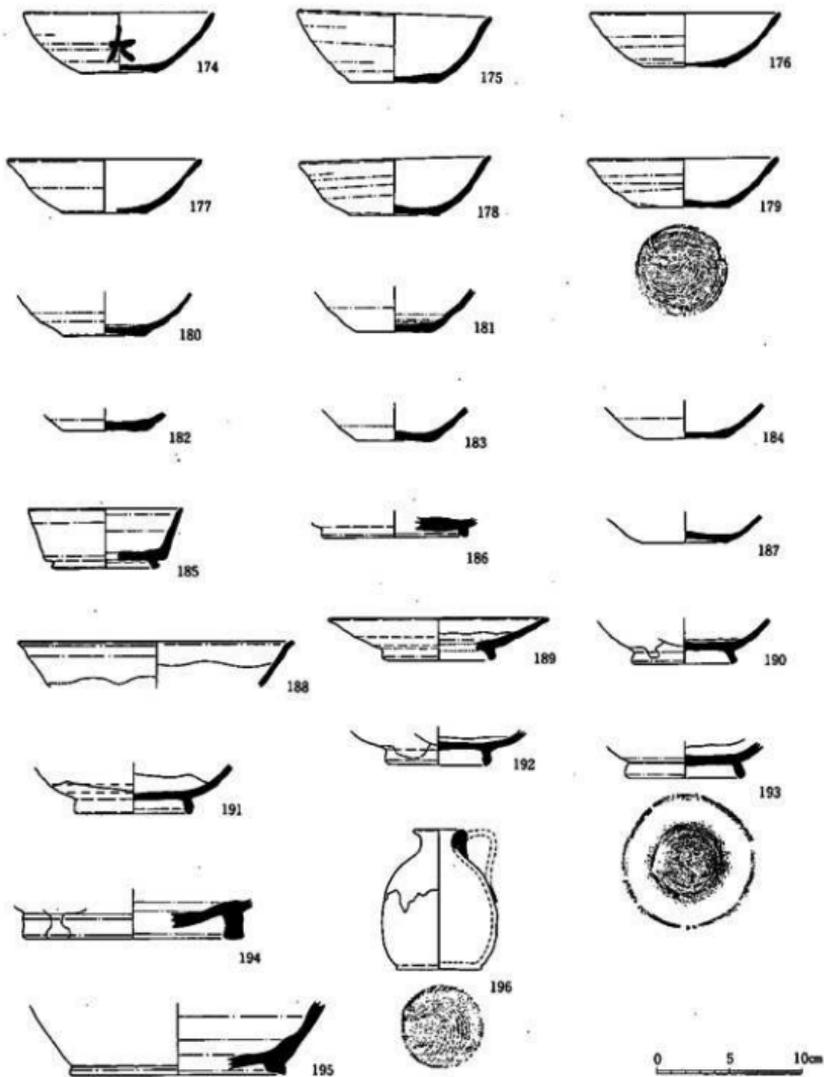
第68圖 土器実測図00 61住出土



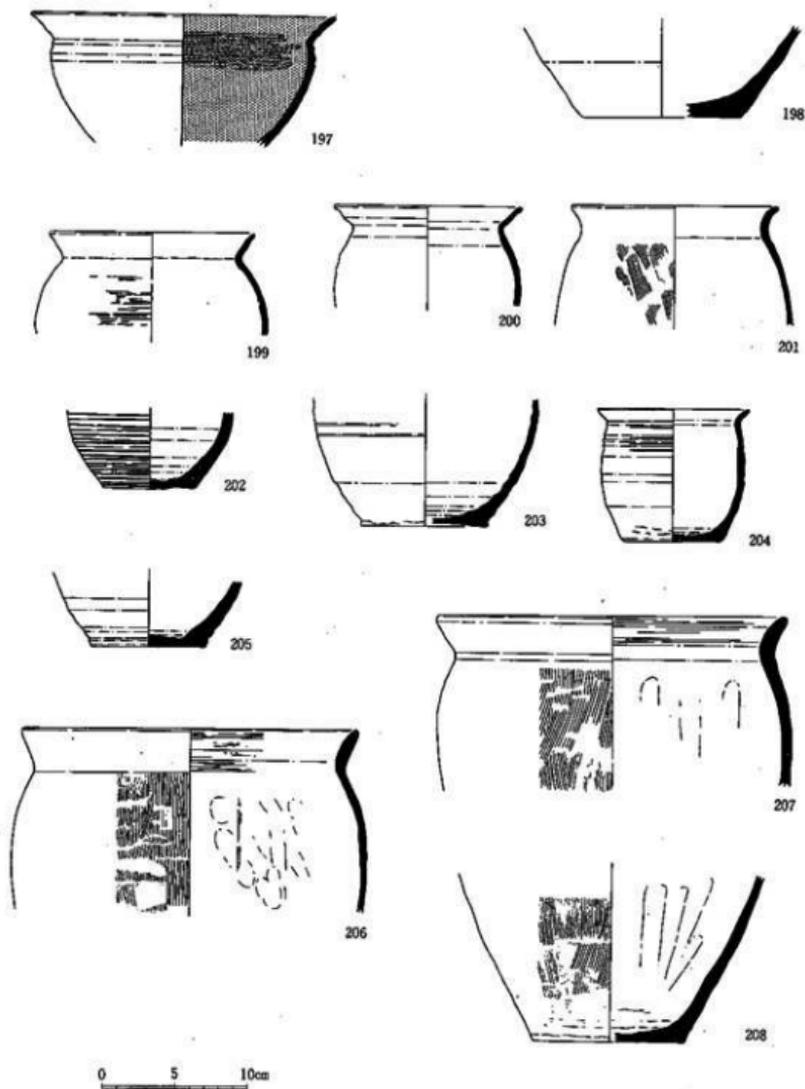
第69圖 土器実測図(0) 47住出土



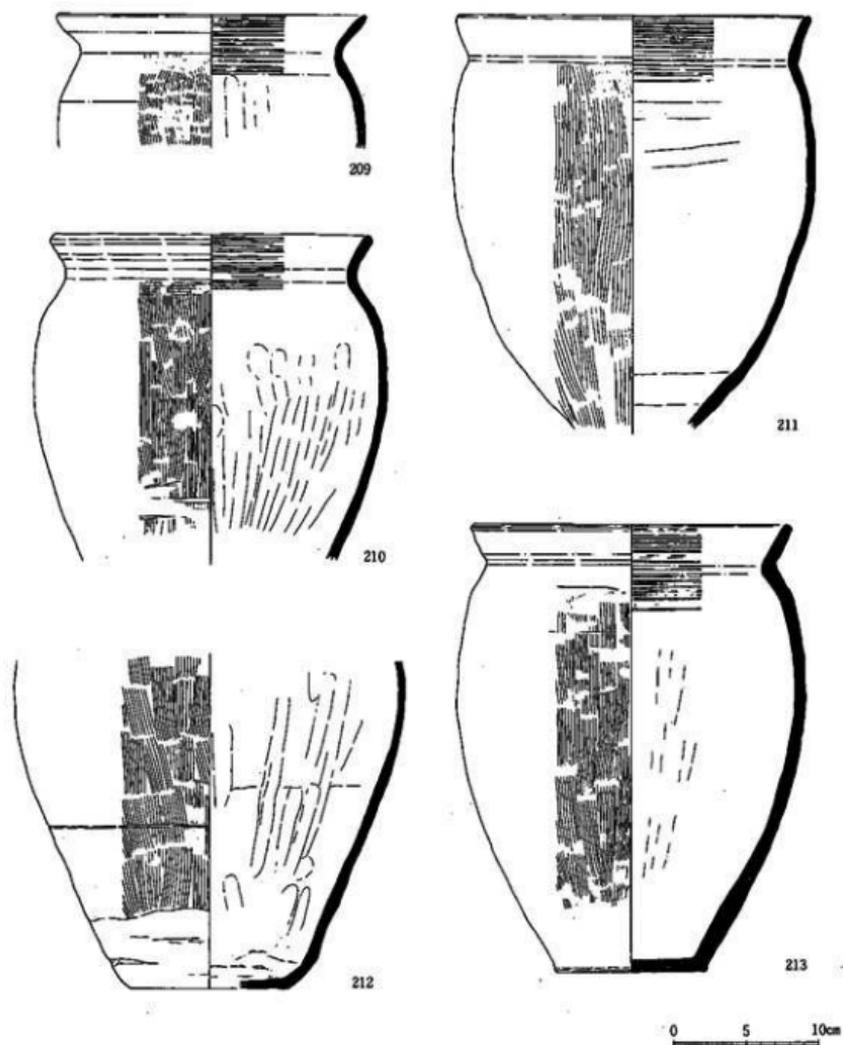
第70图 土器実測图(2) 4住出土



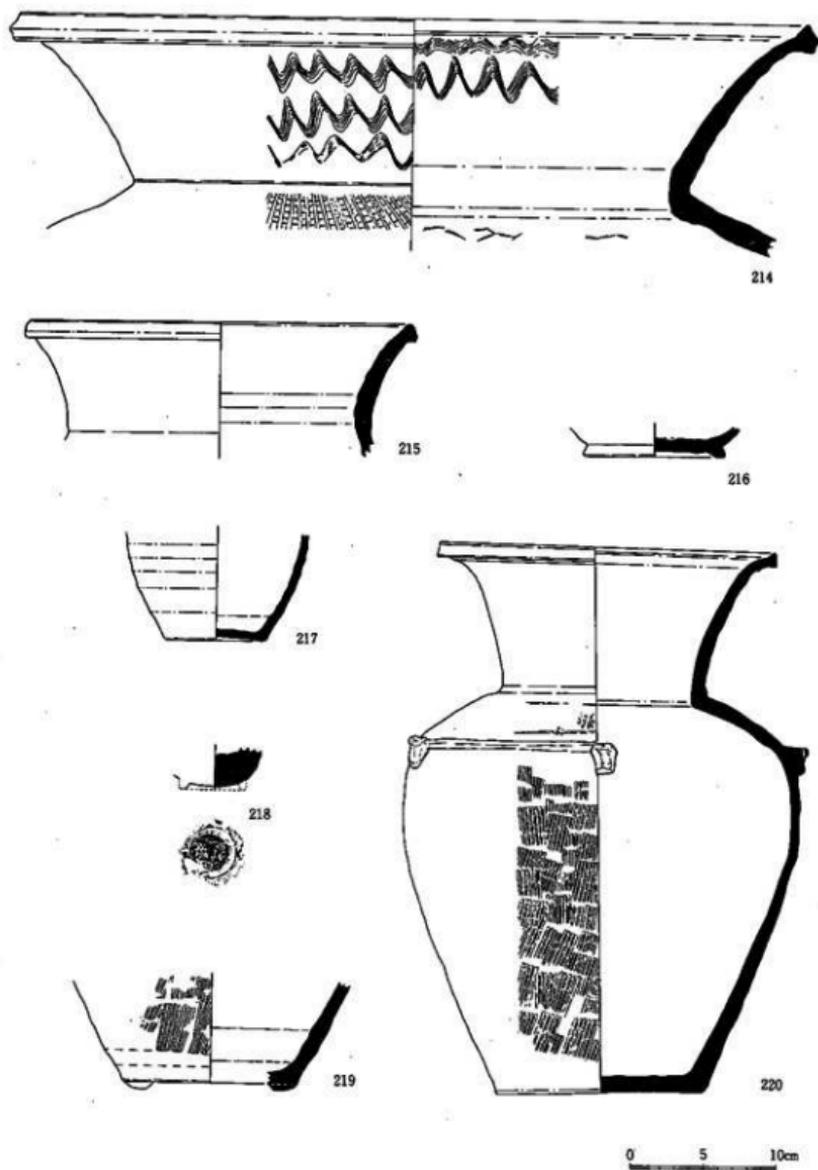
第71圖 土器実測図(13) 4住出土



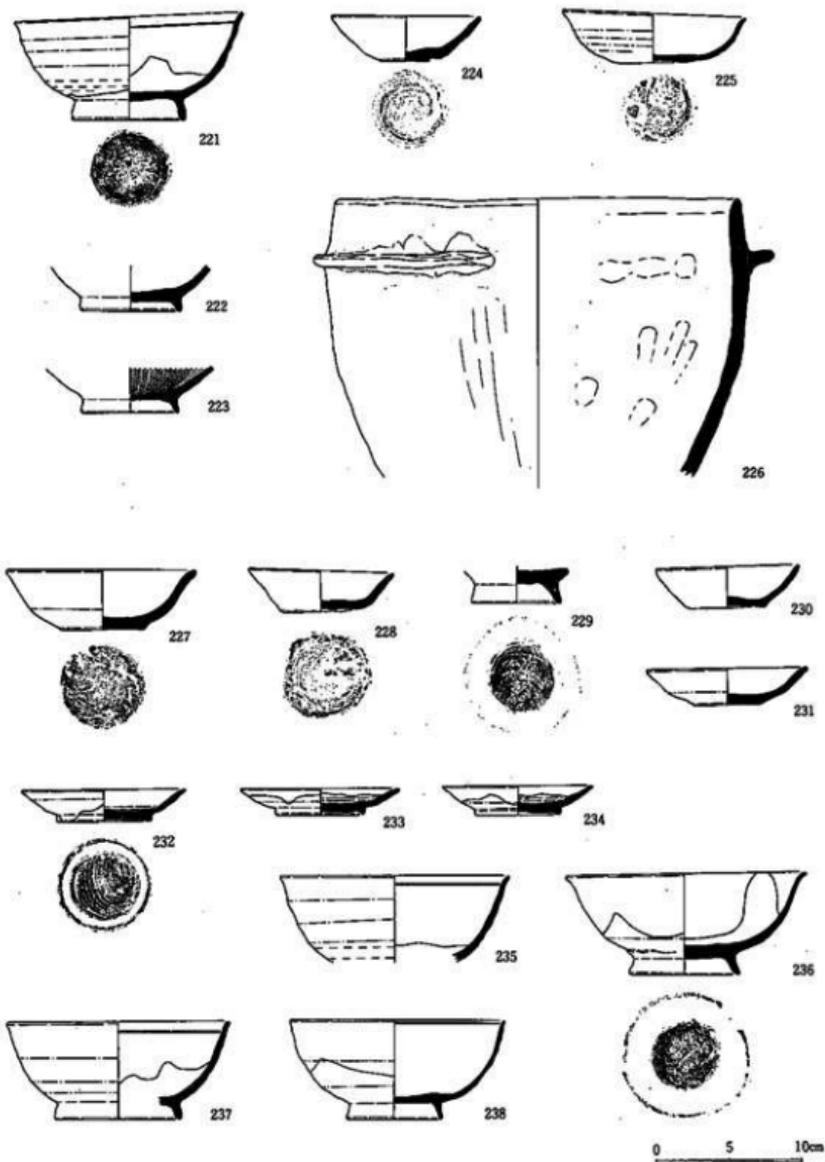
第72图 土器実測図(4) 4住出土



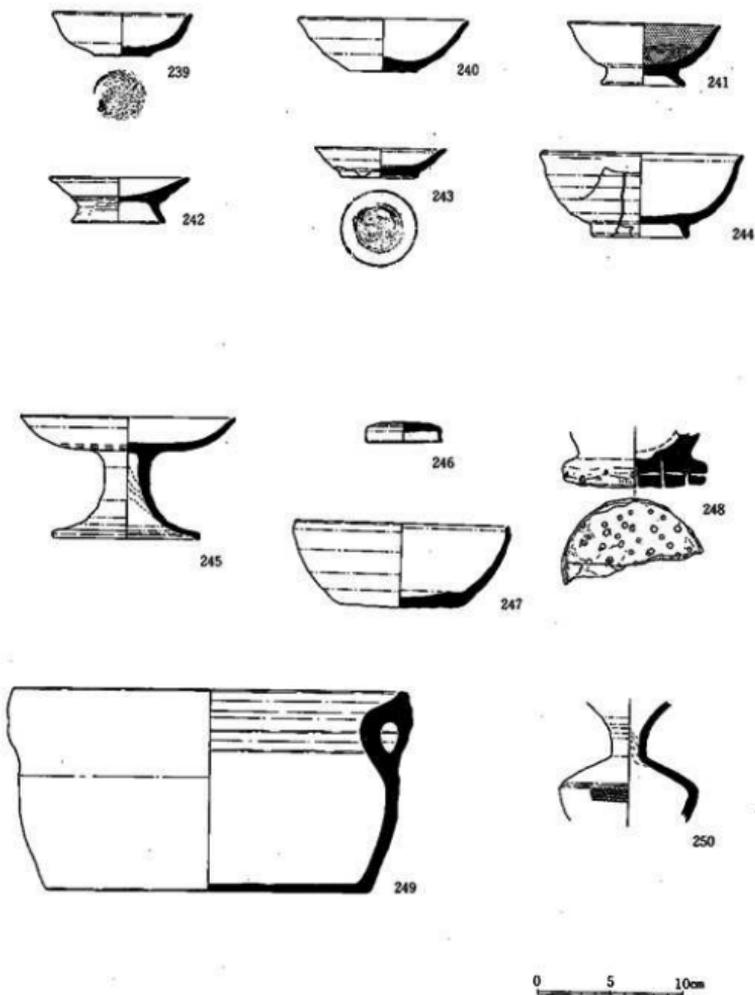
第73图 土器実測图(15) 4住出土



第74图 土器実測图(16) 4住出土



第75圖 土器実測図(17) 2・3住出土



第76図 土器実測図(18) 92住・その他

## 2 銅製品、鉄器、銭

ここでは住居址から出土した金環と、帯金具、鋤頭、鎌、銭について若干触れてみたい。

金環は77号住居址の覆土下層より出土した。地金に付着した緑青により周囲の金張りほとんど剥落してかろうじて金環と分かる程であった。この地金で見ると断面形は楕円形をなし、その厚さは最大で3mm強、最小で2mm、曲げられた両端は尖り、かなり粗雑な素材を使用しており、その形から推測してもやや小形のものであったと思われる。

帯金具は2点出土している。2点とも銅製で1は2号住居址北壁際、2は61号住居址床面上より得られたものである。このうち2は跨帯もしくは巡方と称される。透し穴際の一部を欠き縁辺を腐蝕しているが全体はしっかりした状態を保っており、長さ3.45cm、幅3.70cm、厚さ0.65cmと復元できる。裏面には足金具と思われる凸起が5個見えており、他に欠損部に1個あったものであろう。1は横長のもので腐蝕は2よりも進んでいる。全体の $\frac{1}{3}$ 程を欠くが、復元すると全体は長さ3.30cm、幅1.55cmと思われる。裏面には2同様に足金具が3個付くがその位置は2のように側部のみでなく、透し穴際に2個と上部に1個が見えている。これは通常正方形とした巡方の異形なものなのであろうか。

鋤頭は2点である。24は16号住居址カマド袖北際、25は88号住居址カマド袖南際より出土した。出土状態より両者共住居址の時期を与えられる。2点共完形でいわゆるU字形を呈する。錆びが厚く付着する為細部までは観察できないが両者を比較すると小形の24は刃部が大きく曲線を描き、耳部でやや内湾、身の厚さも幅の割に肥厚している。25は大ききの割に身がやや薄く造られている。両者とも身全体がやや湾曲し錆びによって木質部装着部分より身の中央に“ス”が入っており、これが鍛造時の素材の接合を示すものであろう。

鎌は耕作、開墾用具としての鋤、鋤とともに収獲用具として当時の主たるものである。今回は3点出土した。すべて住居址からのものである。22は完形で鋤頭出土の16号住居址床面からのものである。比較的大形で身全体が大きく湾曲し折り返しと刃のなす角度は約115°前後と鈍角をなしている。刃部中央は研ぎ減りがかなり激しく使用頻度の高さを物語っている。又23は刃部の半分を欠するが身の厚さを除けばほぼ22と同様の形態を示すものと思われる。

銭は17種47点を出土している。このうち16種43点が同一ビット(P<sub>222</sub>)からの出土である。このビットは12号住居址東2mに検出され、灰白色土を覆土としている。円形で上面直径28cm、深さ30cmである。銭はその上部に43ヶが珠数つなぎとなり穴に紐様なものを通して錆びで一連となっていた。このようすから故意にビット上層中に置いたものと思われるのだが、類例を見ないので詳しくは分らない。

(高桑 俊雄)

### 参考文献

土井儀夫「関東地方における住居址出土の銅製品について」物質文化誌 1971

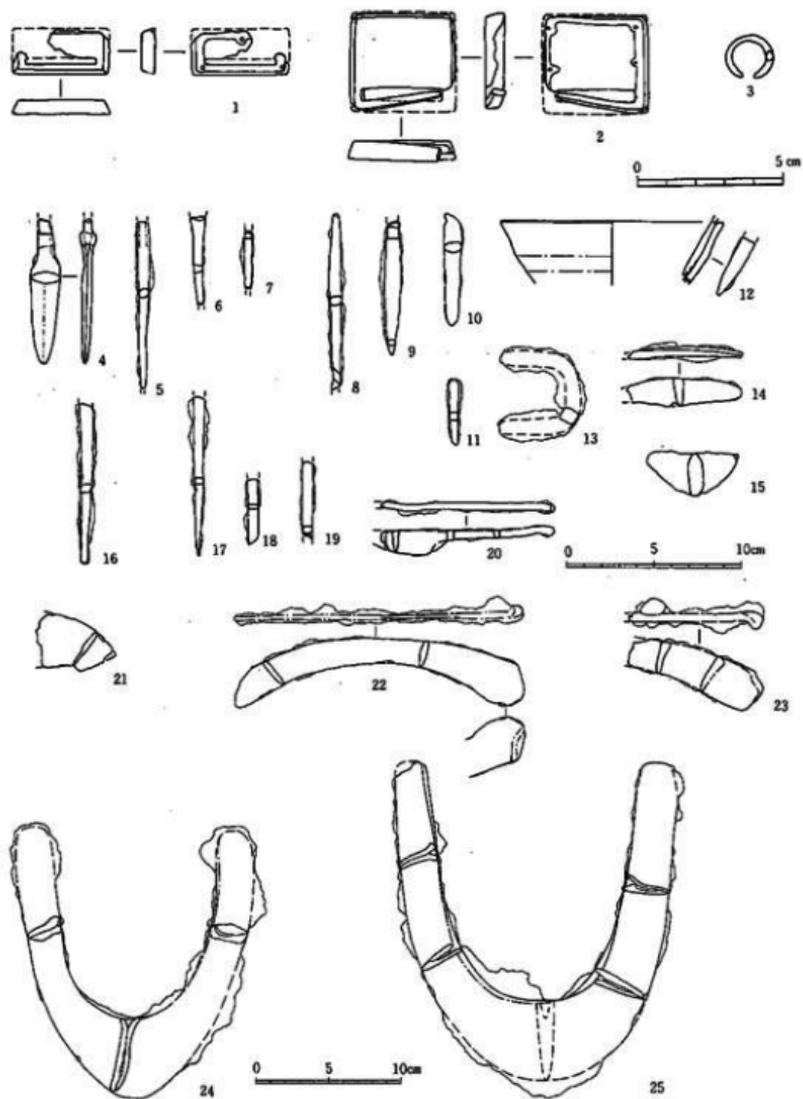
＊ 「鉄器と工具研究」ノート どもん10 1976

表5 銅製品鉄器一覽表

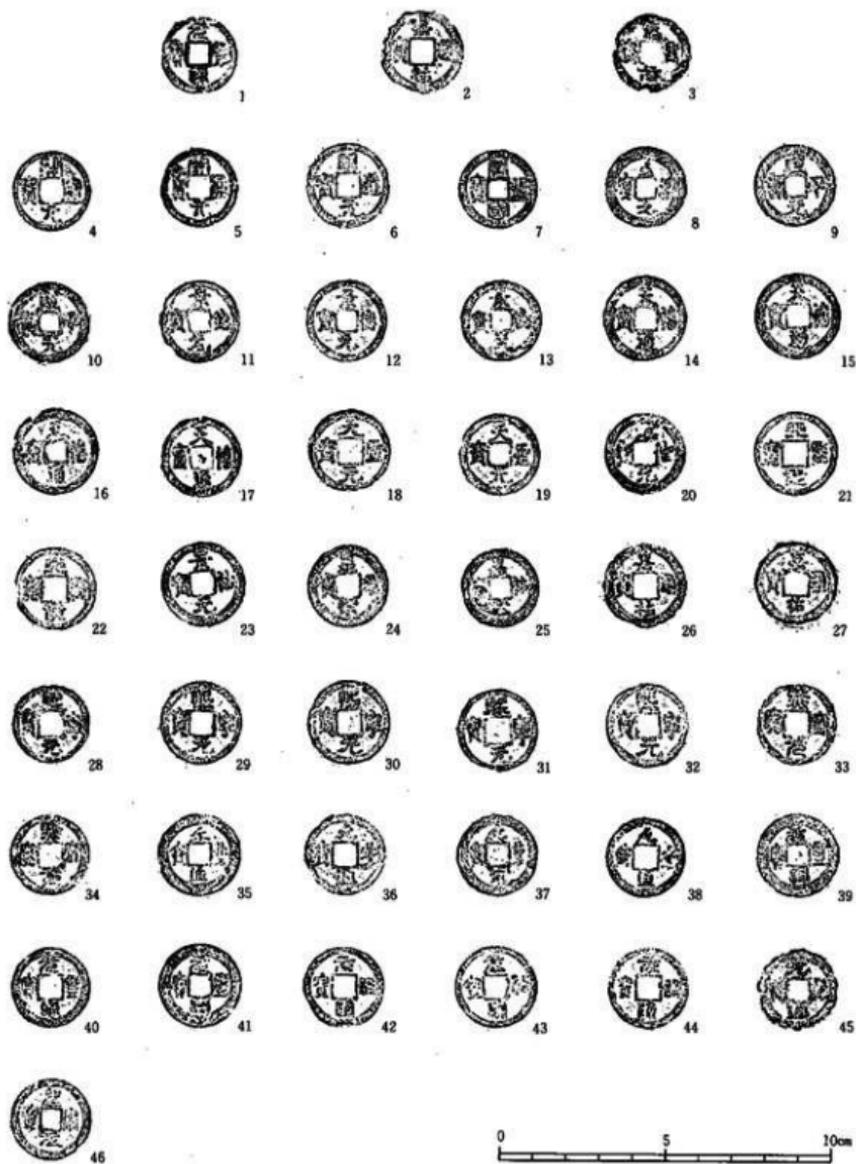
図 No.	出土遺跡	種 別	寸 法			重量 (g)	備 考
			長さ (mm)	巾 (mm)	厚さ (mm)		
1	2 庄	持 指	(115)	(88)	4.5	9.9	1/3 欠損
2	61 庄	#	(88.5)	(88)	6.5	12.72	縁辺欠損
3	77 庄	金 指	14.5	16.5	3.5	1.09	金指り刺傷
4	2 庄	釧 先	(84)	17	7	15.8	口金付着、重欠損
5	#	和 釘	(97)	7	5	10.70	釧部欠損
6	#	#	(82)	9	4.5	4.70	#
7	#	#	(84)	5	4	2.60	同端欠損
8	4 庄	みり杖工具	(102)	7	3.5	8.58	先端ヒキリあり
9	#	の み	(77)	11	7.5	18.81	工具? 12と類似
10	#	不 明	65	11	6.5	7.18	片側刃部あり
11	#	#	87	6	5	3.84	
12	#	の み	(87)	9	4.5	15.41	土師器内面内部に密着している。9と類似。
13	#	不 明	48	47	7.5	80.77	釧部不明
14	#	#	(66)	16	6	11.65	片側刃部あり
15	#	#	52	26	9	17.82	残状を冠し、釧部不明。(他に鉄片4点(錆蝕しい)、鉄屑2点出土)
16	6 庄	和 釘?	(94)	8	5.5	11.35	釧部欠損
17	77 庄	#	(88)	7	4.5	8.72	#
18	#	不 明	(89)	6	3.5	2.48	基部か
19	#	和 釘	(65)	7	4.5	4.30	両端欠損
20	豊 29 刀	子	(100)	16	4	8.68	先端欠損、蓋は長い
21	6 庄	釧	(49)	(87)	4.5	12.28	ほとんど欠損
22	16 庄	#	101	82	5	70.25	完形
23	75 庄	#	(88)	80	7	56.55	土欠損。(他に鉄屑2点出土)
24	16 庄	釧 釧	188	184	9	475.0	完形
25	88 庄	#	222	195	7	669.0	完形
26	99 庄	#					鉄屑1点出土

銭 一 覧 表

図 No.	出土地	名 称	初鋳年	径 (mm)	重量 (g)	備 考	図 No.	出土地	名 称	初鋳年	径 (mm)	重量 (g)	備 考
1	豊 19	#	#	28.5	2.42		25	#	嘉祐元宝	1056	24.0	4.09	
2	豊 14	嘉祐通宝	1056	28.5	2.82		26	#	嘉祐通宝	#	25.5	2.17	周縁磨蝕
3	#	熙寧元宝	1094	25.5	1.88	磨蝕かなり激しい	27	#	#	#	24.5	3.41	
4	P 222	開元通宝	621	24.0	3.45		28	#	開寧元宝	1068	28.5	8.77	
5	#	#	#	29.5	4.04		29	#	#	#	25.9	3.55	
6	#	#	#	25.5	3.78		30	#	#	#	25.0	3.95	
7	#	唐開通宝	909	24.0	3.50	銭名明確	31	#	#	#	24.5	4.07	
8	#	至道元宝	995	24.5	2.52		32	#	#	#	25.0	3.40	
9	#	咸平元宝	998	24.5	3.89		33	#	#	#	24.5	3.55	
10	#	#	#	24.5	3.88		34	#	#	#	24.0	3.70	
11	#	景祐元宝	1004	24.5	3.34		35	#	元龜通宝	1078	25.5	3.57	
12	#	#	#	24.5	3.96		36	#	#	#	24.8	3.90	
13	#	#	#	24.5	4.18	磨蝕かなりすすむ	37	#	#	#	25.0	4.07	
14	#	天福通宝	1017	26.5	3.74		38	#	#	#	25.0	3.35	
15	#	#	#	26.0	3.96		39	#	#	#	25.0	3.43	
16	#	#	#	26.0	3.43		40	#	#	#	25.0	3.80	
17	#	#	#	24.5	4.42		41	#	#	#	24.8	3.90	
18	#	天聖元宝	1023	25.9	3.37		42	#	元祐通宝	1086	24.5	3.38	
19	#	#	#	24.5	3.65		43	#	#	#	25.0	3.84	
20	#	#	#	24.5	4.25		44	#	#	#	24.5	3.97	
21	#	#	#	25.5	4.27		45	#	#	#	24.5	2.41	周縁磨蝕しく欠損あり
22	#	#	#	25.0	3.55	磨蝕すすんでいる	46	#	皇宋元宝	1101	24.5	3.28	
23	#	景祐元宝	1084	25.5	3.50								



第77图 銅製品・鉄器実測図



第78圖 錢拓影

### 3 土製品、石器、石製品

今回の調査で出土した土製品には表の如く紡錘車と土鍾がみられる。共に大形のもの、平均的な大きさのものとがみられる。特に土鍾は出土数が少なく判然としないが、大きさの違いは用途の違いを窺わせる。

石器・石製品は、砥石・硯・石臼・編物用石鍾が出土している。尚、表には土器の実測図を載せた住居址および唯一の出土であった硯についてのみ記した。砥石のうち6～8は携帯用であり、石質は粘土質岩であった。また、同じ石質の9は安定しない形であるが使用痕が多く手持ちで使われたであろう。何れも仕上げ砥として用いられたと思われる。10～14は固定式で石質は砂岩である。石材の質が中粒の14は中砥として、他の粗粒のものは荒砥として用いられたと思われる。また、これらの中には線状の砥痕を持つものと、面状の砥痕を持つものとがみられた。硯と石臼は共に中世の遺構から出土した。硯は、裏面に欠損しているため厚さは不明であるが、あまり厚くはなかったと思われる。石質は粘板岩で、産地は上伊那郡横川であろうか。石臼は竪29から出土したが、遺構の性格が特殊であるだけに注意される。

(山田 真一)

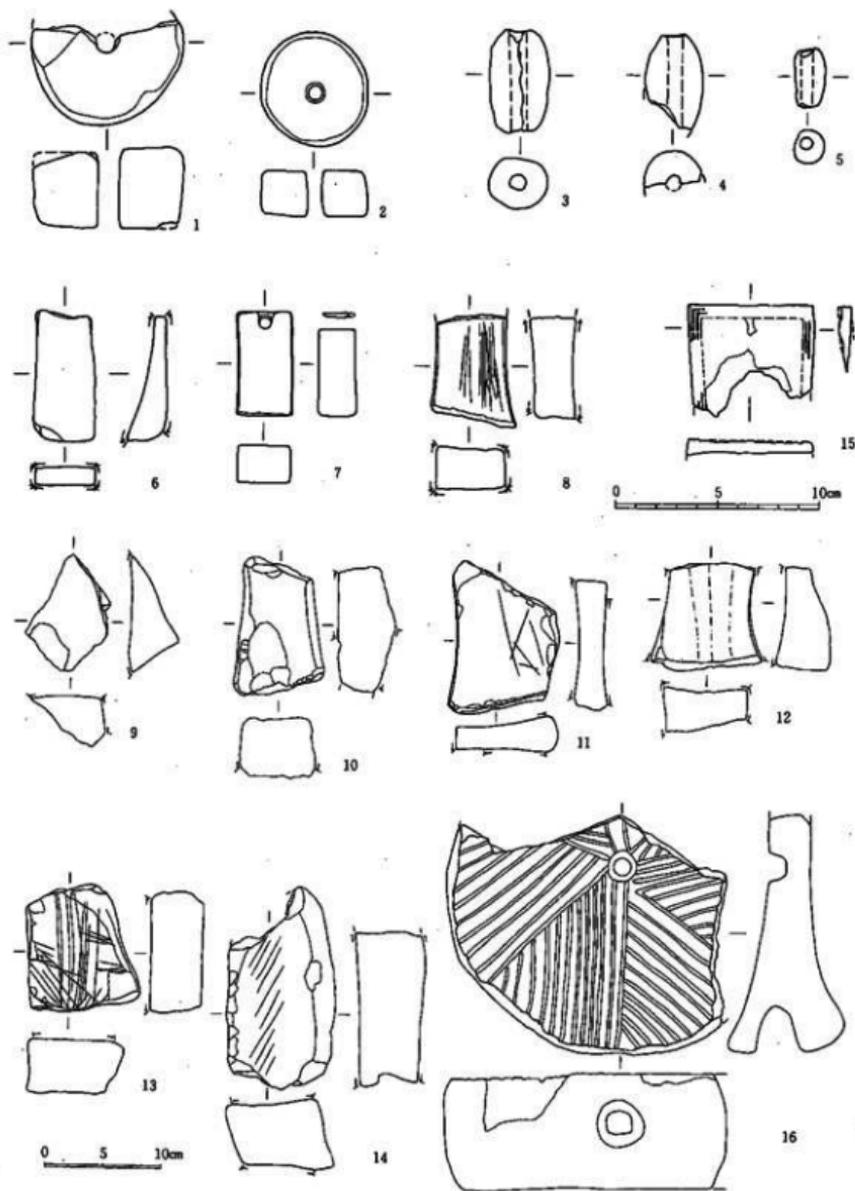
表6 土製品・石器・石製品一覧表

土製品一覧表

No.	品名	出土地	長さ(cm)	最大径(cm)	内径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	紡錘車	6 住		7.5	1	3.8	(147.63)	1/2欠損
2	#	62 住		5.8	0.8	2.3	88.40	完形
3	土 鐘	6 住	5.0	2.9	0.8		26.06	# 大形
4	#	75 住	(4.6)	2.9	0.8		(19.13)	1/4欠損 #
5	#	61 住	2.8	1.5	0.6		6.15	完形 小形
	#	62 住	3.8	1.9	0.5		9.27	# #
		竪 13	4.3	2.1	0.6		10.35	# #

石器・石製品一覧表

No.	品名	出土地	長さ(cm)	巾 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石 質	備 考
6	砥 石	4 住	6.2	3.0	3.0	86.96	粘土質岩	砥痕磨しい
7	#	11 住	5.1	2.7	2.6	58.74	#	細孔用貫通孔あり、使用痕少ない
8	#	#	(5.4)	(4.0)	(3.4)	(76.41)	#	半部欠損、線状砥痕あり
9	#	3 住	10.0	7.1	6.1	200	#	裏面は脱いまま
10	#	4 住	11.7	7.7	6.5	610	砂 岩	# 敲打・研磨して調整
11	#	#	18.1	8.8	8.8	470	#	# # 線状砥痕あり
12	#	6 住	9.1	9.7	7.2	510	#	幅1～2cmの面状砥痕あり
13	#	60 住	10.7	9.5	8.2	760	#	周囲は敲打研磨して調整、線状砥痕磨しい
14	#	92 住	17.0	9.3	8.3	(1430)	#	片端欠損、線状砥痕あり
15	硯	竪 1	(5.4)	6.2	(0.6)	(21.6)	粘 板 岩	半部・裏面欠損、線に文様あり
16	石 臼	竪 29	(24.2)	(20.7)	10.0	(4.84g)	安 山 岩	1/2欠損



第79図 土製品・石器・石製品実測図

## 第4節 小結

今回の発掘で実質的に検出を行なった面積はI地区5339、II965、III354、IV1477、V756、VI165 m<sup>2</sup>の計9056m<sup>2</sup>である。遺構の分布はII地区で西側が疎となる様子を示しているがこれはIIトレンチで分るように何らかの影響によって遺構に砂層を含む土が被覆していたためである。その原因は現在不明である。時期的な遺構占地の傾向としては、V地区の中世遺構が特に目立つ。又やや微視的变化ではあるがI地区の東側に古墳時代の住居址2基が位置し、西側には1～3号と平安時代末期の住居址が検出されている。時代が下がるにつれて段丘崖際から内部へ徐々に生活の中心を移していったのかも知れない。ここでは遺構の種類別に添って気づいた点を述べる事とする。

住居址は欠番と堅穴状遺構を含みながら97まで番号を付した。上屋構造に関しては、意外と住居址内にピットの検出が少なく12号は方形に並ぶ唯一のものである。非常に深く二段底を呈していた。又75号はピットを設けず浅い穴を穿ち大きな石を置いて礎石としたものであろう。配置も隅に5ヶ、その中間に1ヶずつ、カマド際は左右に2ヶの配置を行っており非常に興味深い例であった。34号からは覆土中より多量の焼土と、炭化材が認められる。しかしその下部覆土の様子から本址は火災に遭ったものではなく、埋没途時の痕跡と考えられよう。

カマドは長い煙道と煙出しをもつものが多い。壁中央寄にあるものと、隅に位置するものがある。カマドの設けられている方向は33号、82号と34号の旧カマドが北に位置し、他はすべて東或いは西壁になっている。後者は5例しかなく、北西部2基、北東部3基である。11号煙出しにはピット周囲に3個体分の土師甕が貼ったような状態で置いてあった。このようなあり方は75号にも見えており、時期的な特徴とも云えようか。又、袖部を造っているもの、壁の掘り残しで袖の代わりとしたもの、袖が無く壁を掘り込んだのみのもの、その形状もU字形、V字形など多様に見せており、今後更に検討する事が必要である。

・遺物の出土状態についてみると、68号カマド火床部より大型の甕2点がいれこになって出土している。75号カマド北袖前床面には非常に浅いピットがあり、その中から須恵器杯3点が重なり須恵器盤、土師器小型甕などと共に出土した。ほかには鋤頭が2点完形で出土している。16・88号からのもので両者共カマド袖部に置かれたような状態であった。以上その器物、道具の配置をうかがい知る良好な資料となろう。なお72号カマド横に大きな内側への張り出しが見られ、その用途も共に考えなくてはならない。

建物址はI地区の中央やや東寄りに5棟がみえている。5と6、7と8は前後関係を示しながら規模もさほど変えていない。位置、方向からすると建て直したものと思われる。又、これらのうちには方形の掘方をもつものがあり、掘方底までしっかりと入った柱痕跡も見られる事ができた。このような事からやや特殊な用途を想定する事ができる。

堅穴遺構と土壌については当初その覆土上面の土色について分類を行なった為、遺構の時期についてはともかくその規模、形状などで事後処理に若干問題が残ってしまった。今後の検討とする。

溝は14本検出した。そのうち自然流は1、2である。3と6、8と9は方向がU字、L字になっており、集落内へ導水したのではないかと考える。

ビットは約700基検出した。これらのうちには建物址同様に柱痕跡を残しているものも見られた。ただ灰色系の覆土をもつ中世のビットはV地区に非常に多いのであるが浅く、小型であり、建物址を復元することはできなかった。

最後に巻頭カラーの75号住居址出土杯に付着して出た紙について簡単に述べてむすびとする。紙は杯内部に斜目に付着しておりその状態はあたかも食べ残しのものが僅か底に残り、この器が斜めに置かれているため一方の底にかたまるとでもいう状態であった。

紙は最も厚い部分で5 mm、表面はほぼ平らになってはいるがその内部は2～3 mmの虫が入ったような穴が走り、あたかもダンボール断面様に中空部分が多い。紙そのものは植物質の繊維を失って褐鉄酸化しており、紙とも言えない状態になっている。

この表面に左字で「月」の字が見えた。これは毛筆によりしたためられたもので大きさは8 mm×5 mm、紙が裏返しになっている為逆に透けて見えるものと判断した。更に月の下に文字らしきものが見えた為奈良国立文化財研究所にお願いして赤外線テレビで調査をして頂いた。この結果月の字の下に「大」の字が判読された。更に遺物の角度を変えて文字を探したがこの2文字以外は見出す事ができなかった。

記された「月大」であるがこれは何を意味しているものが現在のところ不明である。しかし層に関わる文字ではないかという見方がある。大の月、小の月と云われるその大の月を示すものではないかとの考えである。

多賀城などでは漆紙文書として漆付着の紙が出土しているが、本例では漆の付着は見られず稀少な例と云えよう。（この紙の保存についてはパラロイドB62の5～10%液を塗布した）

なお、これとは別に同じ75号住居址より杯内面に付着した漆を見つけた(64)、漆は黒色を呈し底一面から体部1～3 cm程まで薄く塗ったように付いている。漆は割れ口にも付着している事から破損した杯を再利用したものであろう。漆容器として利用してきたものだろうか。（高桑 俊雄）

赤外線テレビは奈良国立文化財研究所写真室 橋氏にお願いした

文字判定は平城宮資料研究室 橋本義嗣氏らに委ねた。

顕微鏡調査は大町高校教諭 森義富氏にお願いした。層との図も同氏による。

遺物処理は奈良国立文化財研究所保存工芸室長 沢田正明氏の御指導を得た。

## 第4章 高綱中学校遺跡

### 第1節 調査の概要

発掘を行なった地区は、周囲の水田とは異なり、以前建設工事の資材置場として使用し、荒地のまま放置されていた。そのため表面には他の地区より持ち込んだ土、砂利等が堆積し、検出面迄も80~90cmとかなり深く、排土置場も広く必要となり、実際調査面積は約650m<sup>2</sup>である。

遺構は鉄分の沈澱する茶褐色土中に灰色の土を落しており明瞭に分かるのだがいずれも覆土は非常に固い。遺構は方形の大きな落込みと、ビット計56である。ほかに腐材を捨てたとみられる深い穴が5ヶ所にある。方形の落込みは住居址というより堅穴状遺構としてとらえた。又ビットは配置、土色より4棟の建物址を復元する事ができる。

出土した遺物は土師器杯・甕・埴・須恵器杯、甕、灰釉陶器など計30余点と少ない。奈良時代末~平安時代末期の様相をみせている。 (高桑 俊雄)

### 第2節 遺構と遺物

#### 1 堅穴状遺構

用地内西側に検出した。北側には拵土があり、全容は調査できなかった。鉄分を多量に沈澱している茶褐色土層へ掘り込まれ、礫を少量含む灰褐色土を覆土としている。この様相は付近の建物址と同様である。壁は一様なならかさをもち床面は下層の礫直上で遺物の散布が終わるためこれを本址の床面として扱っている。焼土などは全く見られず、住居址というよりは堅穴状遺構とした。

遺物はすべて小片であり須恵器杯・甕、土師器のハケ甕等が出土した。9世紀~10世紀の様相を呈しているがすべて覆土中からのものでありその量も約10点ときわめて少ない。

本址の一辺が南側に検出した建物址1~3の梁方向と一致しており、時期も上がるものであろうか。

#### 2 建物址

調査地区のはほぼ中央に3棟、南東隅に1棟検出された。中央の3棟は全て総柱式の建物で、建1は4間×2間、建2・3は3間×2間である。また北西に位置する建4は側柱式の建物で、2間×



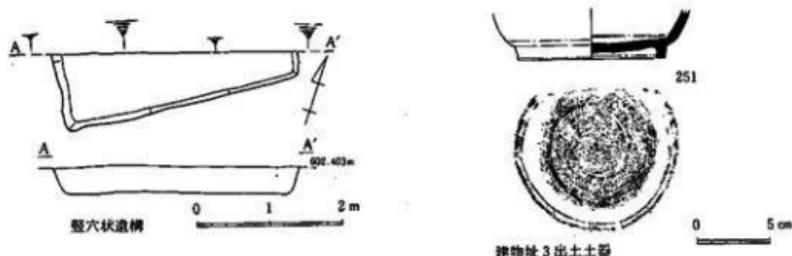
1間である。面積は、建1が12.8m<sup>2</sup>、建2が16.3m<sup>2</sup>、建3が26.9m<sup>2</sup>、建4が10.3m<sup>2</sup>であり、建3が他の3棟に比して大きい。柱穴の掘り方は全て坪掘であり、平面形は建1・4が円形、建2は主として円形、建3は方形と円形が混在してみられた。柱穴の深さは、建1・2がその径に比して極めて浅く、建4は径に比して深く良好であった。なお、建1・3には、2段底を呈し柱痕が観察できたものもある。柱間寸法は建1・2が1.6m、建3は桁行が1.8m、梁行が2.4m、建4は桁行が2.0m、梁行が2.4m程を測る。

遺物は概して少ないが、建3のP<sub>39</sub>覆土中層から須恵器坏が1点出土している。この遺物からすると建3は奈良時代末～平安時代初期に該するものである。また、建1・2・3は位置および主軸方向の振りから同時期あるいは連続して設けられていたと思われる。

### 第3節 小結

昭和30年頃、今回の調査地よりはほぼ西へ50mに位置する高綱中学校プール建設の際に、土器と共に粘土等が見つかり、住居址らしきものの存在をうかがわせた<sup>(1)</sup>ことより、今回はなるべくその位置に近い場所を選定し発掘調査をした。しかしその結果は前述のようなものであった。また、用地内北西隅に検出面からの深さ約1.5m程のグリットを設けた。その結果は南側の土層採掘地点とは異なっており、検出面直下から大小の礫層となっていた。当時の生活面もこの礫層上にあったものと思われる。中学校へ近づく程遺構埋没が浅くなっているのではないと思われる。調査範囲がやや狭かった為、遺構・遺物の量もさほど多くはなかったが、獨立柱建物址が4棟検出されたという背景には、付近に該期の住居址が存在したことが予想される。尚、本年には高綱中学校グラウンド拡張に伴う発掘調査も予定しており、今回の結果と併せて検討することができよう。(高桑 俊雄)

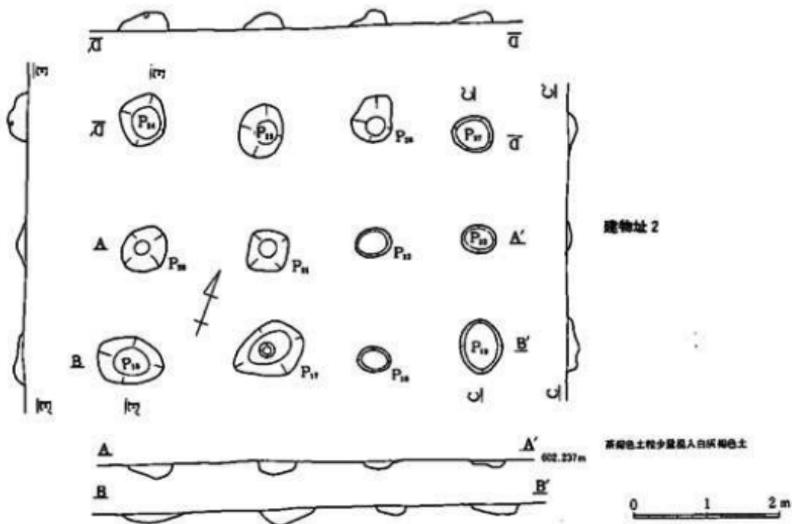
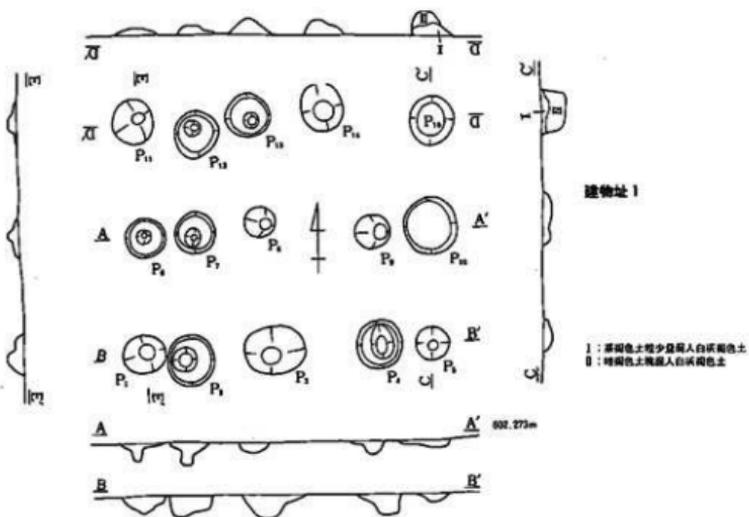
(1)「東京朝報、松本市、植民地誌」第2巻歴史上



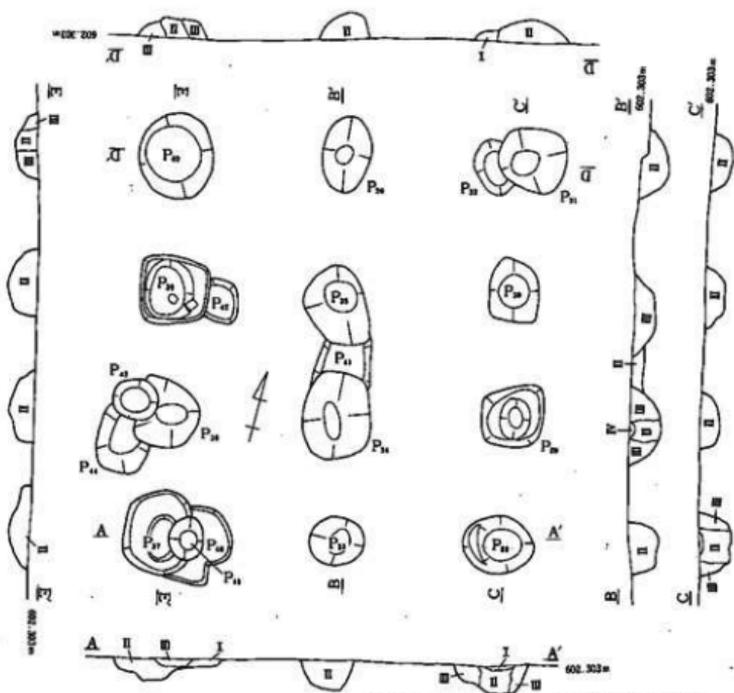
第81図 竪穴状遺構、建物址出土土器

表7 建物址一覧表

番号	平面形	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (m)			柱穴 平面形	柱穴偏倚	遺物址所見							
					高さ	長さ	短径										
1	長方形	N-00°-E	(4間)×2間 4.9×2.2	桁 0.6~1.5 梁 1.6~1.8	1	50	53	24	円形		調査地区中央南側に位置する。 礎柱式の建物で赤褐色土中に検出された。掘り方は円形で浅く、柱穴の検出されたものは2階礎をなす。 遺物の出土はない。						
					2	70	54	20	"	柱礎あり							
					3	81	61	26	楕円形								
					4	67	68	30	円形								
					5	47	46	9	"								
					6	56	55	24	"	柱礎あり							
					7	56	56	30	"								
					8	48	42	14	"								
					9	49	47	16	"								
					10	80	74	12	"								
					11	64	57	14	"								
					12	66	60	25	"	柱礎あり							
					13	61	61	21	"								
					14	66	57	21	"								
					15	67	61	31	"								
2	長方形	N-70°-E	3間×2間 4.8×3.4(3.1)	桁 1.4~1.7 梁 1.5~1.7	16	90	65	10	不整形		調査地区中央やや西側に位置する。 礎柱式の建物で赤褐色土中に検出された。掘り方は円形が主で、非常に浅い。P <sub>15</sub> は、やや掘り出す北側へゆるやかに立ちあがり後方寄り傾かと思われた。 遺物の出土はない。						
					17	108	75	24	"	柱礎あり							
					18	45	34	11	円形								
					19	75	59	18	楕円形								
					20	78	66	12	不整形								
					21	65	52	20	方形								
					22	50	46	9	円形								
					23	48	40	5	"								
					24	74	65	26	不整形								
					25	75	61	29	楕円形								
					26	68	56	16	不整形								
					27	57	50	12	円形								
					3	長方形	N-14°-W	3間×2間 5.3×4.9		28		99	80	37	楕円形		調査地区中央に位置し、検出された4棟の中でも最大である。 礎柱式の建物で、掘り方は方形が主であり、深い。柱穴が検出されたものは2階礎を呈す。遺物は、P <sub>15</sub> 埋土中から須恵器片が出土している。南壁直後に埋れ込んだものと推られる。
										29		85	82	24	方形		
30	84	68	30	"													
31	94	85	28	不整形													
32	78 (54)	17	"														
33	78	68	31	円形													
34	120	90	44	不整形													
35	107	84	30	"													
36	104	70	36	楕円形													
37	115 (87)	28	不整形														
38	92	78	34	"													
39	98	96	40	方形													
40	115	102	31	円形													
41	?	80	17	?													
42	66 (60)	11	不整形														
43	62	54	9	円形													
44 (165)	72	26	不整形														
45	60	50	14	円形													
46	107 (100)	11	不整形														
4	長方形	N-84°-W	2間×1間 4.1×2.5 (2.4)	桁 1.9~2.1 梁 2.4~2.5	47	26	25	16	円形		調査地区南側に位置し礎柱式である。 掘り方は円形で、小さいがしっかりしていた。 遺物の出土はない。						
					48	29	28	14	"								
					49	34	28	25	"								
					50	30	28	19	"								
					51	30	25	18	"								
					52	25	21	23	"								

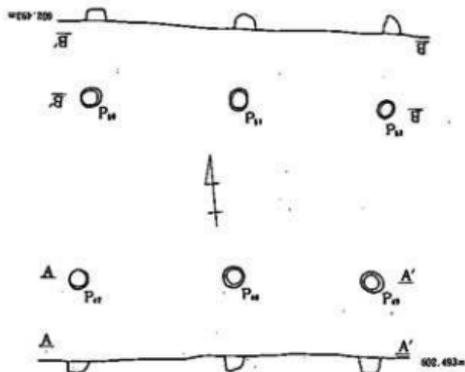


第82图 建筑物 1·2



建筑物 3

I : 深褐色土粒混入白灰褐色土  
 II : 深褐色土粒混入灰褐色土  
 III : 深褐色土粒混入灰黄褐色土  
 IV : 深褐色土粒多量混入灰褐色土



建筑物 4

深褐色土粒混入粘黄褐色土

0 1 2 m

第83图 建筑物 3·4

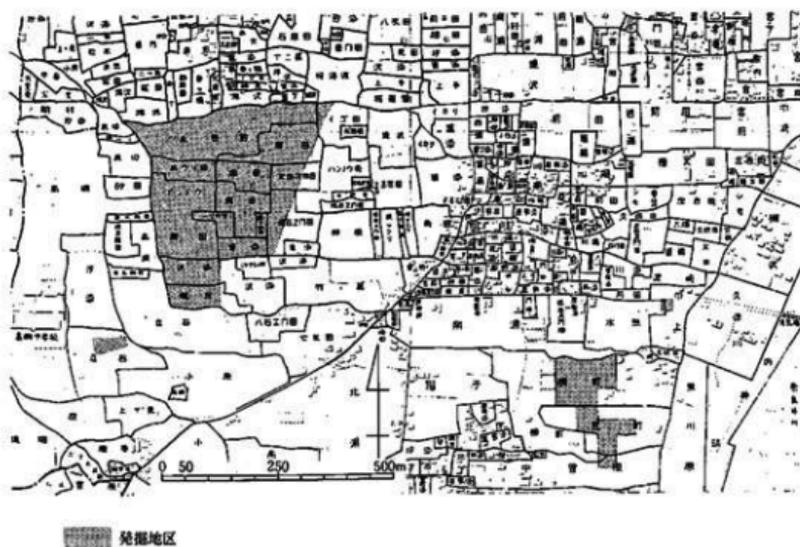
## 第5章 島立条里的遺構

### 第1節 調査の概要

今回の調査は従来より研究者、地元の方々の間で条里遺構と目される一帯を調査した。用地が非常に広いため重機により深さ1m、幅1m程の長いトレンチを設定した。トレンチは東西に4本(1-4)南北に3本(5-7)である。次に各トレンチの側面を細かく観察し、人為的な痕跡の確認と記録、遺物を採集、できれば遺構の性格をつかむ事に主力を注いだ。

その結果住居址、土壇、ピット、溝などと思われる遺構の存在を認めた。これは計124にのぼり、水田の下にはかなりの遺構の存在をうかがわせる。

遺物は総量でテン箱1ヶ分量である。小片が多くあえて分類すると古いものでは縄文土器から、土師器、須恵器、陶器、磁器などがみられる。これらは縄文時代から近世の遺物であり、なかでも量的に中心をなす遺物は9世紀から11世紀の様相を見せていた。



第84図 島立発掘地区 大字・小字界図



■ 高綱中遺跡調査地

0 50 100m

第85図 調査地の位置・トレンチ設定

調査した小字地名をみると南栗・北栗遺跡では「巾上、横町、荒町、中曾根。であり、すぐ東の奈良井川の氾濫をさけて、いわゆる巾上に居を構えたものと思われる。開発については近くに「水無。もあり「荒町。とともに荒蕪の地で開発は遅かったのではない。

条里的遺構の調査地は「永田前、廣田、木ウリ田、塚田、太郎・次郎田、ドンドウ、一ツツサ、藤十郎田、伝右衛門田、道派、沢田、鏡田。で水田を示している。特に「一ツツサ。など数字の入るものは条里とも関わりがあるといわれるが、この地では近くに「二ツ長、十二長、八ツ長、一ノ坪、三ツ旗、四ツ旗、一ツ長。などがある。しかし「一ノ坪。以外は一枚の水田は小さく位置もとびとびで条里に関わる場所とは考えられない。調査地点は高綱北方で和沢と小和沢が分かれて南流し、その和沢がほぼ直角に「鏡田。で曲って東流する。これに並流する田中沢、くぬぎ沢、鬼沢、境沢が北側にあり、それぞれの間隔は100、80、90、100mと一坪の一辺を形づくる縦の線となっている。それらの地割は計画開田を示しているが、この範囲内では条里に関わる地名は「一ツツサ、五反田。しかないので、地字のみでは条里はわからない。(神沢昌二郎)

参考文献

『建設』第36巻第7号『島立条里の中間報告概要』 小穴芳美他

## 第2節 遺構と遺物

ここでは各トレンチの状態を細かく報告すべきであろうが、範囲が広い為局部的変化が大きく分層した土層は一つの目安にはなろうが、これのみで一概に述べる事はできない。又、トレンチによる断面観察だけで遺構を断定する事はかなり大胆である。

しかし、あえてここでは4m以上の落込みを住居址として扱った。これらは全部で16基あり遺物を含み、床面、焼土、カマドを検出できたものもある。(図86の「あ。～「こ。」4m以下のものは土塙、ピットになるものであろう。110基ありどのトレンチにも10基以上は見えている、3トレンチ(3T)には42基確認した。又、2T-C、7T-1には焼土とともに骨を見る事ができる。墓墳なのであろうか。溝は砂質灰色系の土を含み、下面に多量の鉄分を沈澱させているものを扱った。一番大きなものは5T-1北端にあり、トレンチ部分だけで11mある。北側にある境沢の旧河川であろう。又幸運にも「くぬぎ沢。を切り観察する事ができた(5T-4)、ここでは北側にあった旧水路を認める事ができる。

遺物は、住居址として扱った16基中10基が9世紀以降、そのうち4基は11世紀頃の様相を呈す。土塙、ピットには2基から7世紀代の坏、瓦片を得てはいるが、大概のものは住居址同様のものがある。このうち255の瓦は覆土上層に埋められた状態であった。中には女陰を思わせるこぶし大の自然石が上を向けて置いてあり実に奇異なものであった。又、7T-1からの須恵器坏(267)には「元」の墨書が見える。他に5T-4から布目瓦の小片が1点出土した。室町期以降のもの<sup>(1)</sup>と思われる。

(注) 三村繁氏調査

参考文献『浅川流域遺跡群 遺田遺跡、川田条里の遺構・石川条里の遺構』長野市教育 長野市遺跡調査会 1983

(高桑俊雄)

### 第3節 小結

今回調査の対象地区は約29500m<sup>2</sup>であり、設定したトレンチ7本の総延長は1569.2mに達する。ここではその概要と問題を述べむすびとする。

当地は島立地区の稲作適地として知られ、耕作者にとってもかなり耕土が深いものと信じられていた。しかしその結果は東に位置する南栗・北栗遺跡よりも浅いものであり、礫層までの深度は西の和沢側、北の境沢側で50cm、南側地区（6 T-6）で80cmを測る程度である。

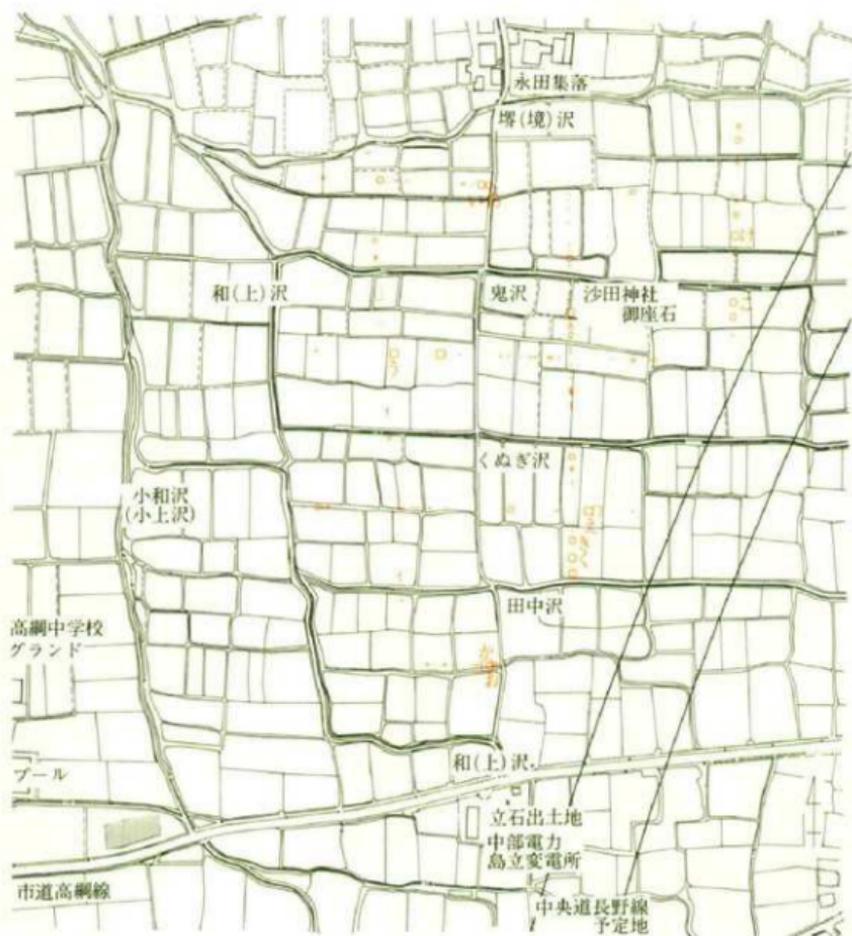
遺構には住居址、もしくは同じ規模の落込み16、土壇、ピットが110基、溝9本を検出した。今回特に注目した点に関しては3 T-eでII、或いはII+III層下に粘質灰褐色土の薄い層を見ており、それが旧水田なのかも知れないが徹視的な変化であり、面的に拡げていないため断定は難しく、遺物も皆無である。又、2 T-bではIII+IV層上にこぶし大以上の礫を含む青灰色土のレンズ状を呈するベルトを認めた。現在の農道下にあり、ここからは付近で得られなかった縄文の土器片、土師器の破片等少量の遺物をみだ。

しかし今回の発掘は時間的制約が厳しく、面的な発掘は行なう事ができず、又、現在使用中の水路、農道等は諸般の事情からトレンチにより切断する事が不可能であった。このことは上に掲げた遺構の形状のみならず、現在の水田に至るまでの歴史を解明する上でかなり不十分なものになってしまった点は否めない。

（高桑 俊雄）

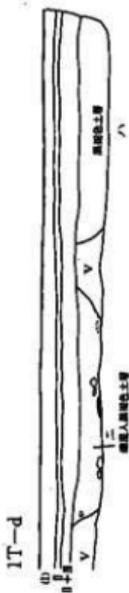
表8 出土土器観察表

No	出土地点	層位	器形	寸法 (cm)		色		測		成形・修整・彫刻の特徴	備	考
				口径	高さ	外底	内底	内径	内高			
252	1丁-ハ	土師器	甕	9.5		赤褐色	褐色			輪郭明確ハテ目カ・内底工具によるナド		
253	ニ	灰土器	坪	9.1		青灰	青灰					
254	2丁-0	土師器	甕	5.5		褐色	褐色			ナド、付け具合のもヨコナド		内底
255	3丁-6	小形器	小形甕	12.8	6.3	赤褐色	赤褐色			ヨコナド、底面凹凸あり、胴部下へラケズリカ		中央部石みカ
256	4丁-0	灰土器	甕	14.0	—	黒灰~紫灰	黒灰~紫灰			ヨコナド、底面ヨコナド		
257	〃	〃	〃	14.3	—	青灰	灰			ヨコナド、底面ヨコナド		
258	〃	〃	〃	12.8	—	〃	紫灰			ヨコナド、底面ヨコナド		
259	〃	〃	坪	12.2	5.3	灰	灰			ヨコナド、底面凹凸あり		
260	〃	土師器	甕	7.6		赤褐色	褐色			底面へラケズリ、胴部外底ハテ目・内底ナド		
261	5丁-9	灰土器	坪	15.9	8.3	灰	灰			ヨコナド、底面へラケズリ、付け具合のもヨコナド		
262	〃	同上	〃	18.4	4.4	赤褐色	赤褐色			ヨコナド、底面凹凸あり		
263	〃	〃	〃	5.0		〃	〃			ヨコナド、底面凹凸あり		
264	〃	〃	坪	6.9		褐色	褐色			ヨコナド、底面凹凸あり、付け具合のもヨコナド		
265	〃	〃	甕	18.7		赤褐色	赤褐色			胴部ナド、口縁部ヨコナド、胴部ヨコナド		
266	7丁-ハ	灰土器	坪	5.3		灰	灰			ヨコナド、底面凹凸あり		
267	〃	〃	〃	7.9		〃	〃			ヨコナド、底面凹凸ありの凹部へラケズリ、付け具合のもヨコナド		底部青リ



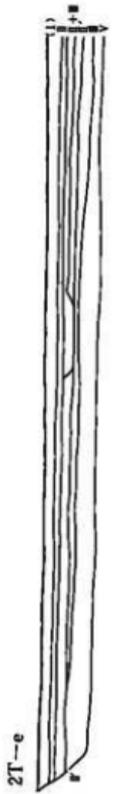
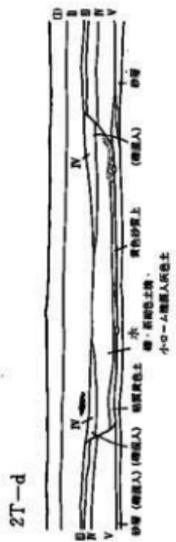
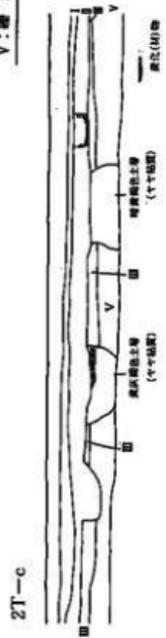
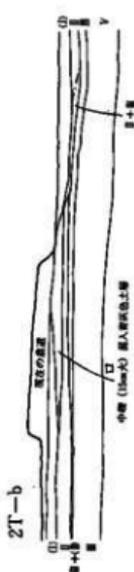
■ 高綱中遺跡調査地

0 50 100m



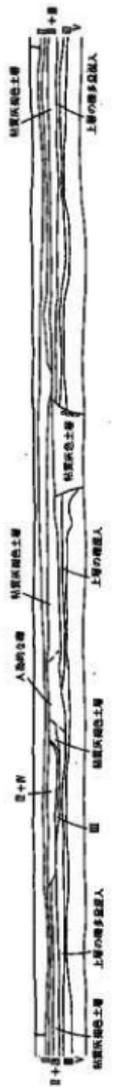
1〜7号トレンチ断面凡例

I: 灰色土層	現耕作土
II: 灰色土粒混入灰色土層	溶肥層 (灰土を含む)
III: 茶褐色土層	根鉢層 (根鉢層となる。一部に根痕を見る。上部は10m以下で層をなす事もある。)
IV: 砂質褐色土層	(見当らない地区もある)
V: 礫層	小〜大礫を多量に含む。砂層にみられる場合もあり、上部に薄く層を見る事もある。



第87図 1・2トレンチ

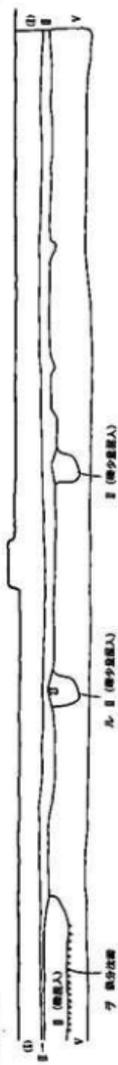
3T-e



第88図 3 ト レ ン チ



6T-6

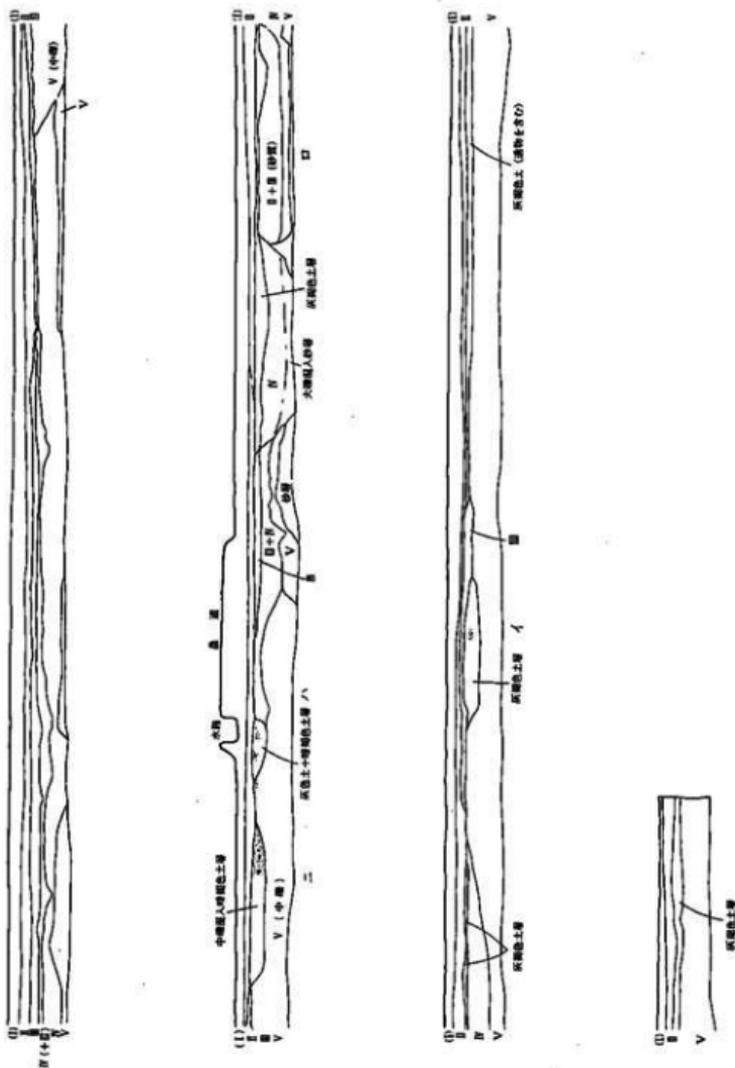


7T-3

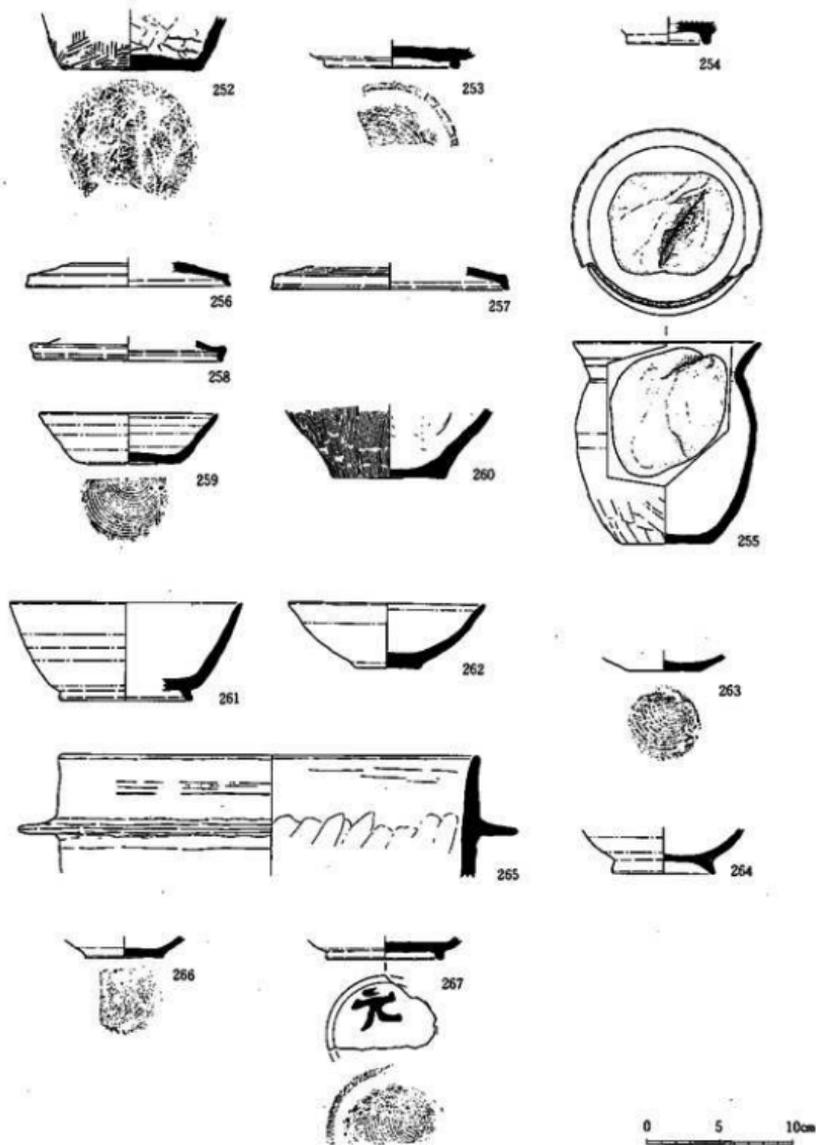


第90図 6・7 トレンチ

7T-1



第91図 7 ト レ ン チ



第92图 土器実測図

## 第6章 調査のまとめ

今次調査は各項記述のとおり、松本市内においては最大の発掘調査であった。それは調査面積もさることながら、数多くの住居址を検出したことと、永年条里的遺構として論究されている水田に調査の手が入ったということである。

まず住居址についてみると、住居址は計96軒を検出し、そのうち全掘は72軒、他は半掘及び一部確認のみである。これらの時期は古墳時代から中世にわたるもので、松本市近在では昭和57年度塩尻市調査の吉田向井遺跡の85軒と必敵するものである。これらの住居址の中で特記すれば、第IV地区における第75号住居址であろう。本址は墨書の紙を出土した家で、壁面内側には10個の平板な石を土台石としてあり、他の家とは趣を異にしていた。住居址を平均的にみると規模は4.25×3.88mで、カマドの位置は東壁中央が60%、西壁は30%であった。年間を通じて多く吹く南風を避けたのではなかろうか。住居址の他には建物址が15軒、堅穴状遺構、土壇が計50数箇所あり、また溝状遺構が居住地域の中にあつたことも本遺跡の特徴と言えよう。

次に出土遺物については、土器は前段にもふれたようにI～XIII期に分類した。これは詳細な比較検討の結果得られたものではなく、観察により便宜上行ったものである。しかし一見してこれだけの時期差を読みとれるということは、それだけ良好な資料があつたということでもあり、この分類をより確かなものにするのが、今後の課題として残されている。鉄器には2点の鋤頭と3点の鎌がある。これは当時の農耕を知る上で良い資料である。特筆されるものに紙の出土がある。これは第3章でふれているが、漆紙でなく、ただの紙が残っていた点に価値がある。これらの出土遺物を並べてみると、ある程度の生活の復元が可能となってくる。

条里的遺構については、和沢と境沢の間430m×300mの間を調査した。本遺構は条里的な地割りをもって、律令時代から奈良時代における計画開田の跡と考えられており、過去新村地区内において僅かに調査を行った以外、地下遺構を調査する機会がなかったものである。今回調査では前述のごとく総延長1570mのトレンチを縦横に入れた。その結果は16軒の住居址にあたり、また3Tの西部では水田址らしき存在を思わせる地層もみたが、時間的余裕がなく、地質専門家に充分みてもらえなかった。しかし、これら住居址の時期はほとんど平安時代になるものであり、しかもそれらは地表下59～70cmという深さにあって、その下層は厚い砂礫層であった。このことは本地点の水田開発は平安時代以降であることを明らかに示しており、今迄の考えよりも新しい時期に開発されたということになる。ただ残念ながら線としての調査しか行えず、面的に捉えることができなかった点、今後の調査に期待するものである。

次に地元の研究者らによって、旧極楽寺跡の調査をしたが、これは1600年頃<sup>(1)</sup>この島立の地にあつ

たと言われ、古文書にも記載のあるものであるが、調査中に出た話であり、工事の進捗と合せて調査体制の取組みなど、困難な問題があった。しかし工事に合せての調査ということで急遽行った結果、小和沢の末流と思われる旧水路と、僅かな土器片を検出したにすぎず、極楽寺そのものの遺構、遺物は見当らなかつた。極楽寺調査は事前に本調査に組み入れることができず、対応がくれたが、地元研究者、土地改良区等関係者の熱意と協力で無事終えることができたのは何よりであった。

最後に調査そのものについてふれてみたい。今回調査は総額1500万円で行なつた。県営は場整備事業は中央道長野線建設工事に合せて急ピッチで進んでおり、その為発掘調査はその体制のいかんにかかわらず、持たなして行なわねばならず、調査期間も耕作と工事の合い間という短期間に行なう状況下にある。その中において遺跡破壊を少しでも守りたいと調査面積を拡げて調査を行なっているが、それは調査者自身の首をしめるものであり、人間・時間・費用の不足を調査者らが身を削って埋め合せねばならないという矛盾を含んでいる。報告書も補助事業という枠の中で年度内発刊が義務づけられており、遺跡が大きければ大きい程、学術とは程遠い工事記録になりがちであり、真の記録保存にはなり得ないでいる。ただ一らの望みは発掘した全容を示すことができなくても、その現場における記録は確実にとっており、また出土遺物を保管しているので、次代の考古学研究者にその資料を提供し、今回究明できなかったものを解明する手がかりを残しているという点である。

本調査は夏期・秋期と延4ヶ月半にわたり行われ、その整理、報告書づくりと徹夜に及ぶ作業で、今ようやく終ろうとしている。この間調査にご指導いただいた先生方、調査員の方々、作業にご協力いただいた方々、また地元の公民館はじめ関係の方々、土地改良区の方々にあつくお礼申し上げ、昨年度に続いて、鳥立の地の歴史が徐々に解明されつつあることを喜びとしたい。(神沢昌二郎)

(1) 遺跡発掘による



I 地区



I 地区



II 地区



III 地区



IV 地区



V 地区

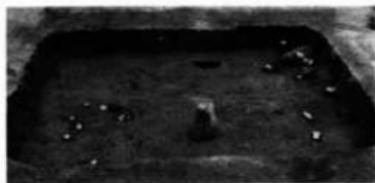


VI 地区

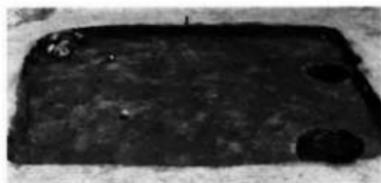


I 地区 電探調査

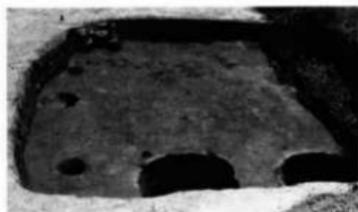
第1図版 南栗・北栗遺跡調査地風景



第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址



第3号住居址カマド



第2号住居址カマド



第4号住居址



第4号住居址



第4号住居址カマド



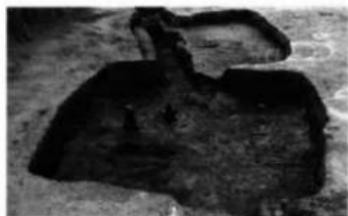
第5号住居址



第6号住居址



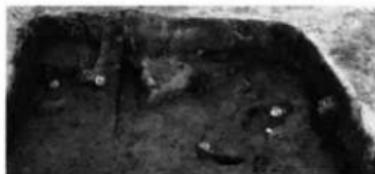
第7号住居址



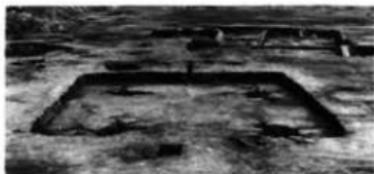
第8·9号住居址 溝3



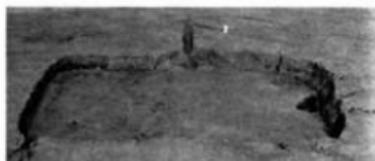
第10号住居址



第11号住居址



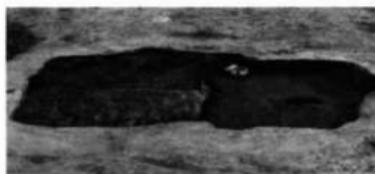
第12号住居址



第13号住居址



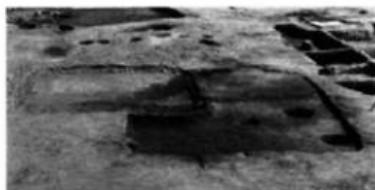
第14·15·16·53·55号住居址



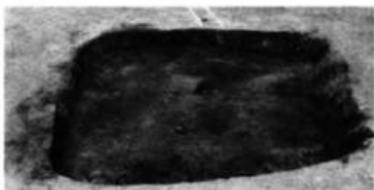
第18·19号住居址



第20·21号住居址



第22·23号住居址 溝1



第24号住居址

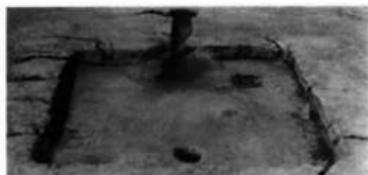
第3图版 南栗-北栗遺跡・遺構



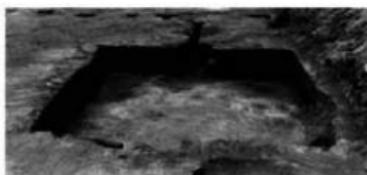
第25号住居址



第26・28号住居址



第31号住居址



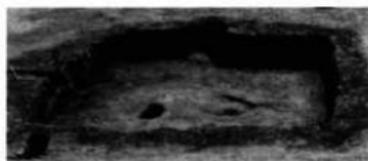
第32号住居址



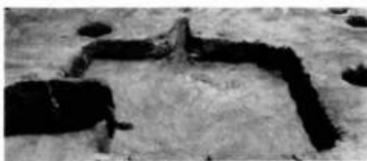
第33号住居址



第33号住居址カマド



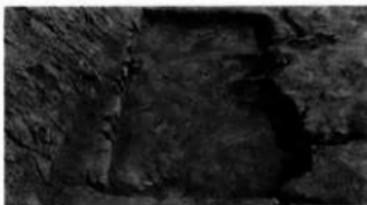
第34号住居址



第35号住居址



第36号住居址



第37号住居址

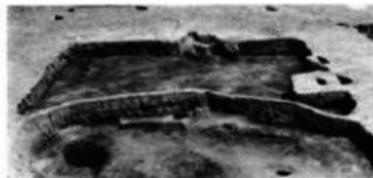
第4図版 南栗・北栗遺跡・遺構



第38号住居址



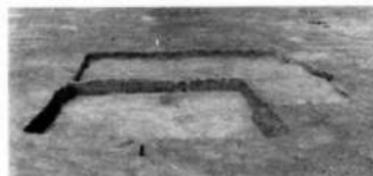
第40・41・42・54号住居址



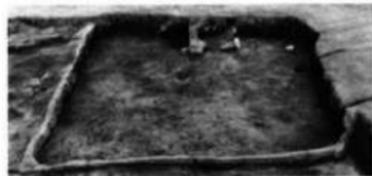
第48号住居址



第49号住居址



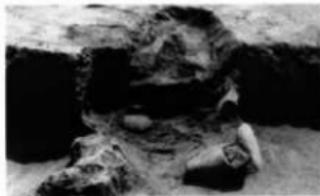
第51・52号住居址



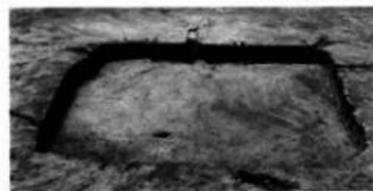
第53号住居址



第55号住居址



第53号住居址 カマド



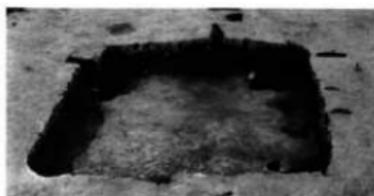
第56号住居址



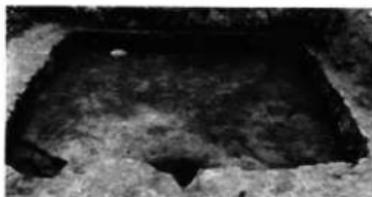
第57号住居址



第58・59号住居址



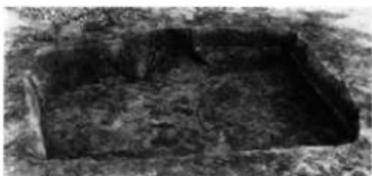
第62号住居址



第63号住居址



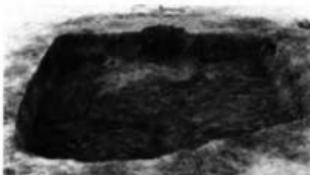
第64号住居址



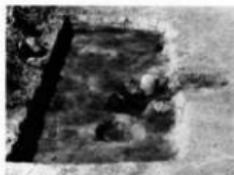
第65号住居址



第66号住居址



第67号住居址



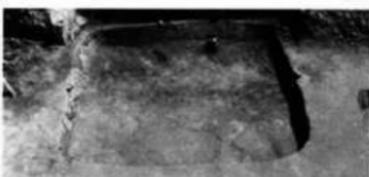
第68号住居址



第68号住居址カマド遺物出土状態

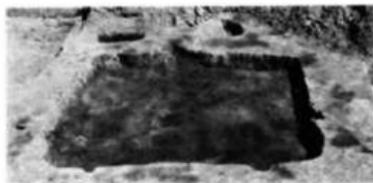


竪穴状遺構17・第69号住居址



第70号住居址

第6図版 南栗・北栗遺跡・遺構



第71号住居址



第72号住居址



第74号住居址



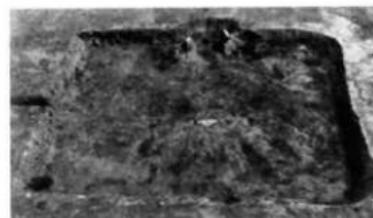
第75号住居址



第75・76号住居址



第77号住居址



第78号住居址



第79・80号住居址



第83・84号住居址



第84・85・89号住居址

第7図版 南栗・北栗遺跡・遺構



第88号住居址



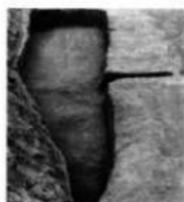
第88号住居址カマド



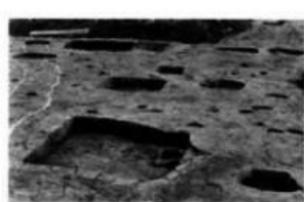
第92・93・94号住居址



第92号住居址カマド



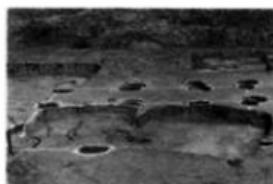
第95号住居址



第97号住居址



建物址 1



建物址 2・3



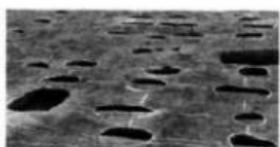
建物址 4



建物址 7・8



建物址 12・13



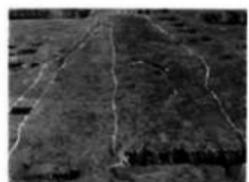
建物址 14・15



竪穴状遺構13



竪穴状遺構29



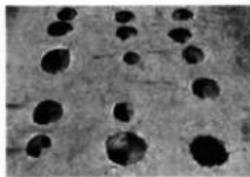
溝 8・9



高綱中学校遺跡 排土作業



高綱中学校遺跡 遺構掘下作業



高綱中学校遺跡 建物址1



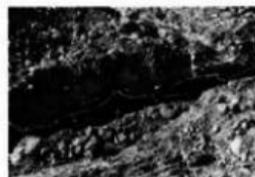
島立条里の遺構 作業風景



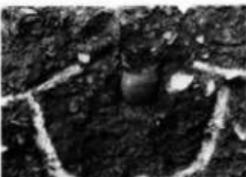
島立条里の遺構 遠景



島立条里の遺構 6トレンチ北側より



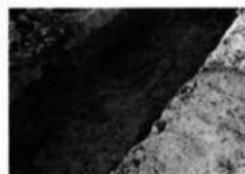
島立条里の遺構 1トレンチ-4  
"くぬぎ沢"



島立条里の遺構 5トレンチ-ル



島立条里の遺構 遺構切合状態



島立条里の遺構 住居址検出



島立条里の遺構 5トレンチ-7



島立条里の遺構 7トレンチ-d



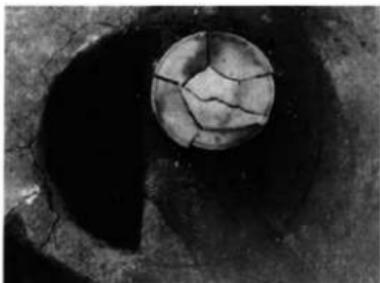
第16号住礎頭



第47号住カマ下前



第75号住須恵器鉢・小形壺



第60号住蓋



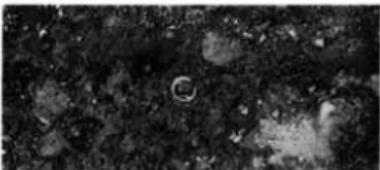
第75号住須恵器鉢・壺・甕



第88号住礎頭



第2号住帯金具



第77号住金環

第10図版 南栗・北栗遺跡・遺物出土状況



2



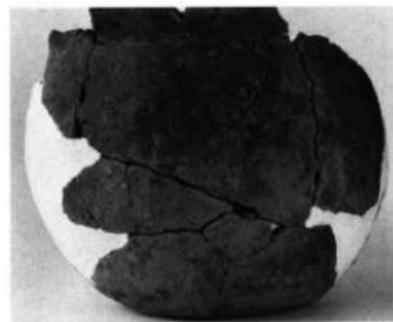
4



12



15



21



16



17



19



66



61



78



60



65



72



90



87



88



82

第12图版 第75·59号住居址出土土器



99



118



145



175



204



220



213

第13图版 第60·61·47·4号住居址出土土器



153



152



196



226



230



227



234



246



241



242

第14图版 第4·2·3·92号住居址出土土器



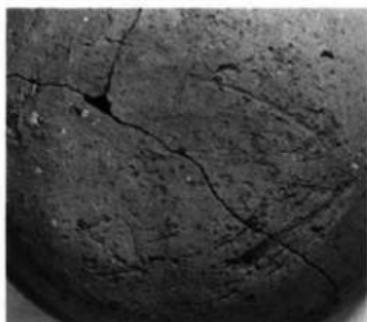
249



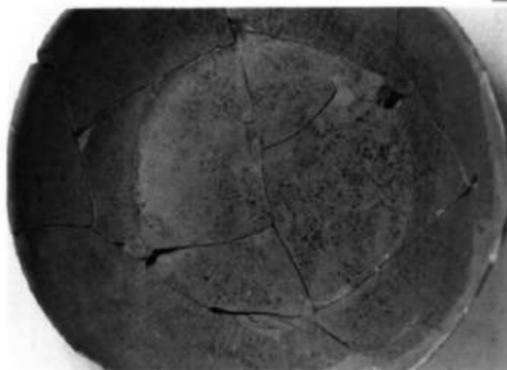
245



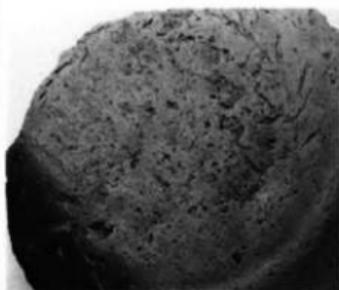
14



17



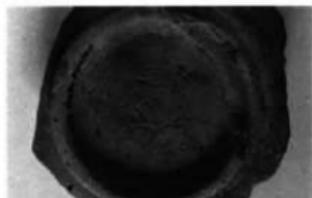
67



18



104

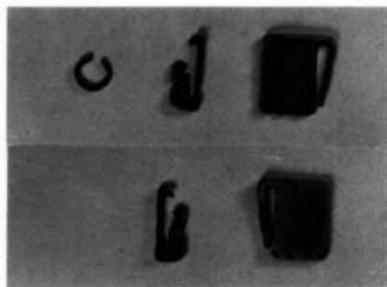


155

第15图版 整穴状遗構29・第5号住居址出土土器  
土器細部写真



第75号住漆付着



金環・帯金具



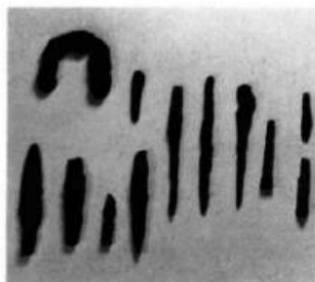
第88号住鋤頭



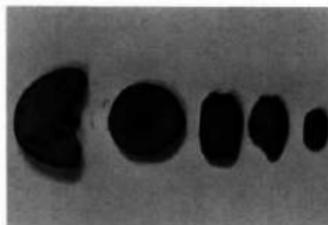
第16号住鋤頭



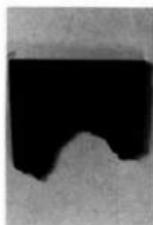
鎌・刀子



和釘等



紡錘車・土鏡



硯

第16図版 土器・鉄器・土製品・石製品

---

松本市文化財調査報告No.35

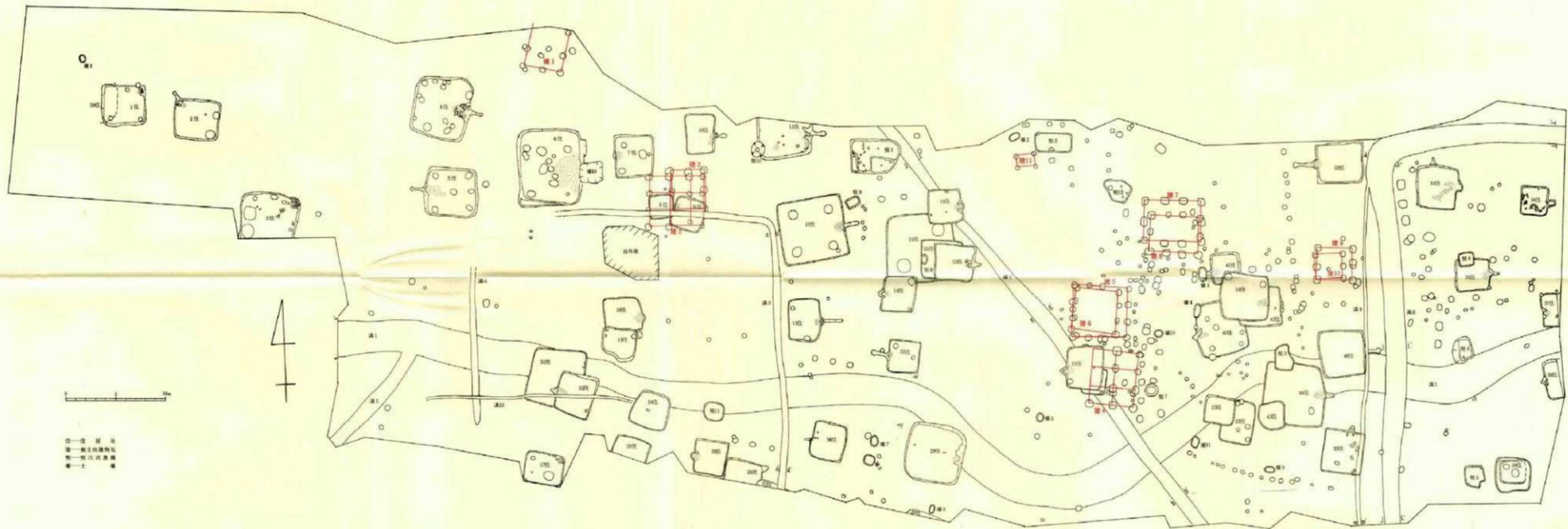
松本市島立南栗・北栗遺跡  
高綱中学校遺跡、条里の遺構

昭和60年3月20日印刷

昭和60年3月30日発行

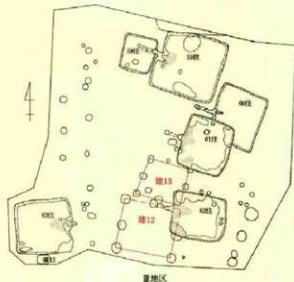
発行 長野県中信土地改良事務所  
松本市教育委員会  
印刷 電算印刷株式会社

---

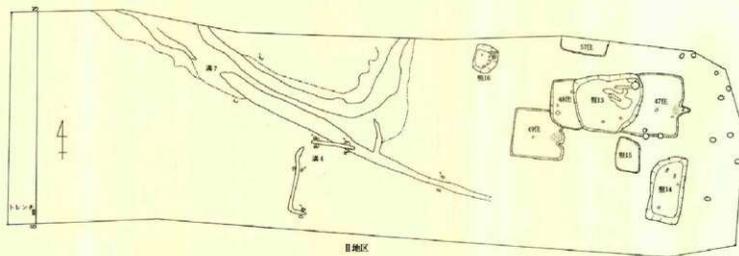


- ①—柱 礎 址
- ②—柱 礎 基 礎 址
- ③—柱 礎 基 礎 址
- ④—土 坑

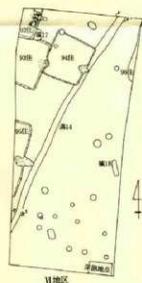
1地区 (1地区)



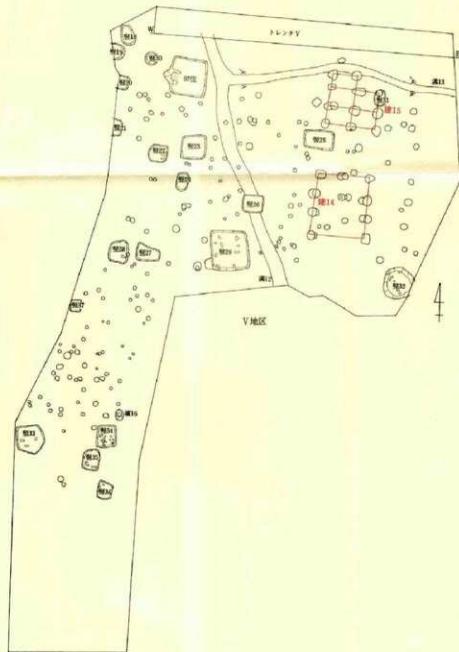
I地区



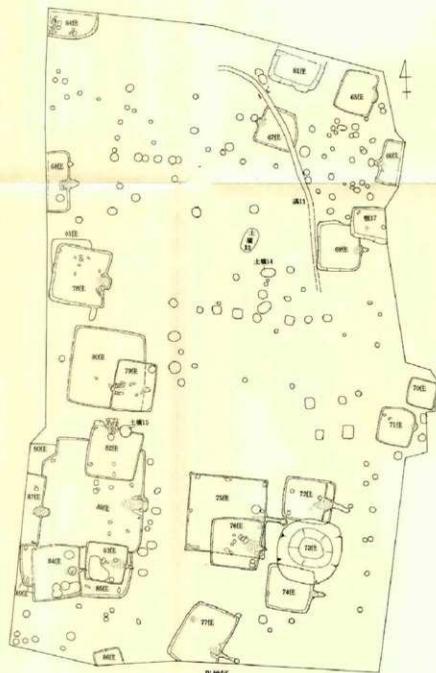
II地区



III地区



V地区



VI地区



注—○ 瓦 柱  
 一 瓦 柱 跡  
 一 瓦 柱 跡  
 一 瓦 柱 跡

